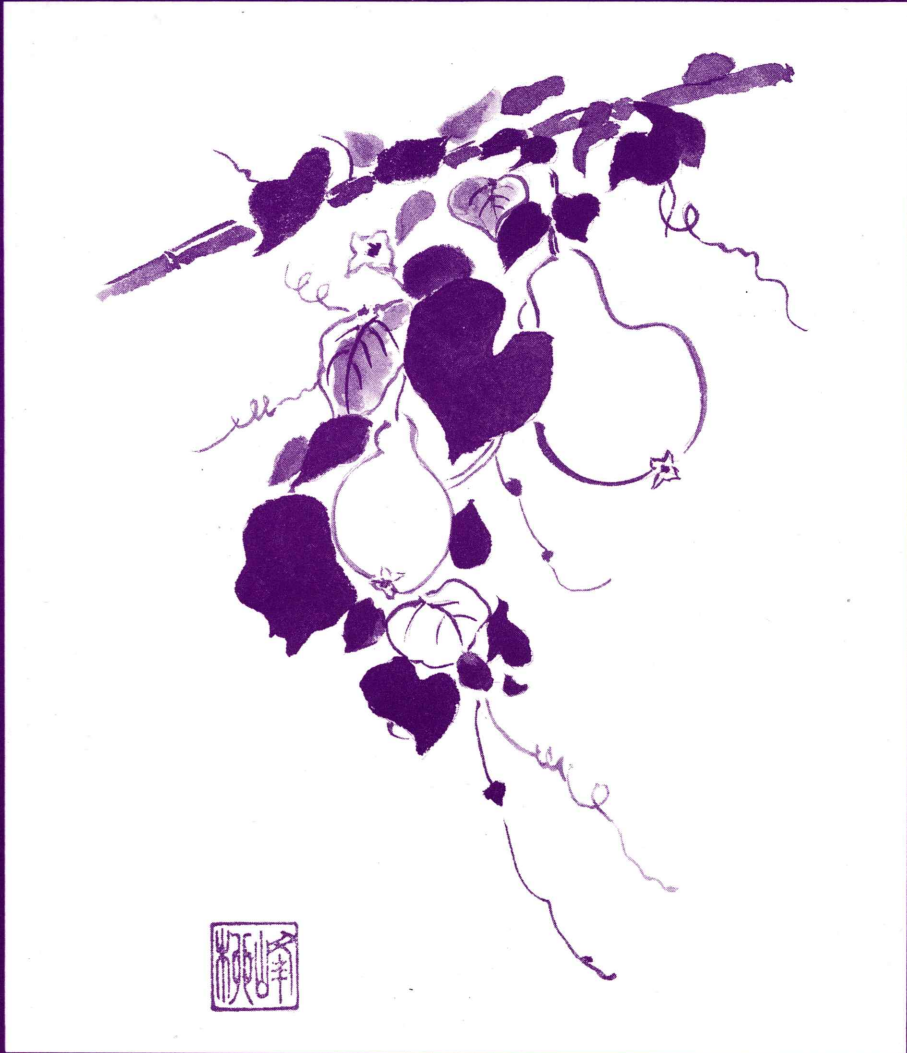


十五周年記念

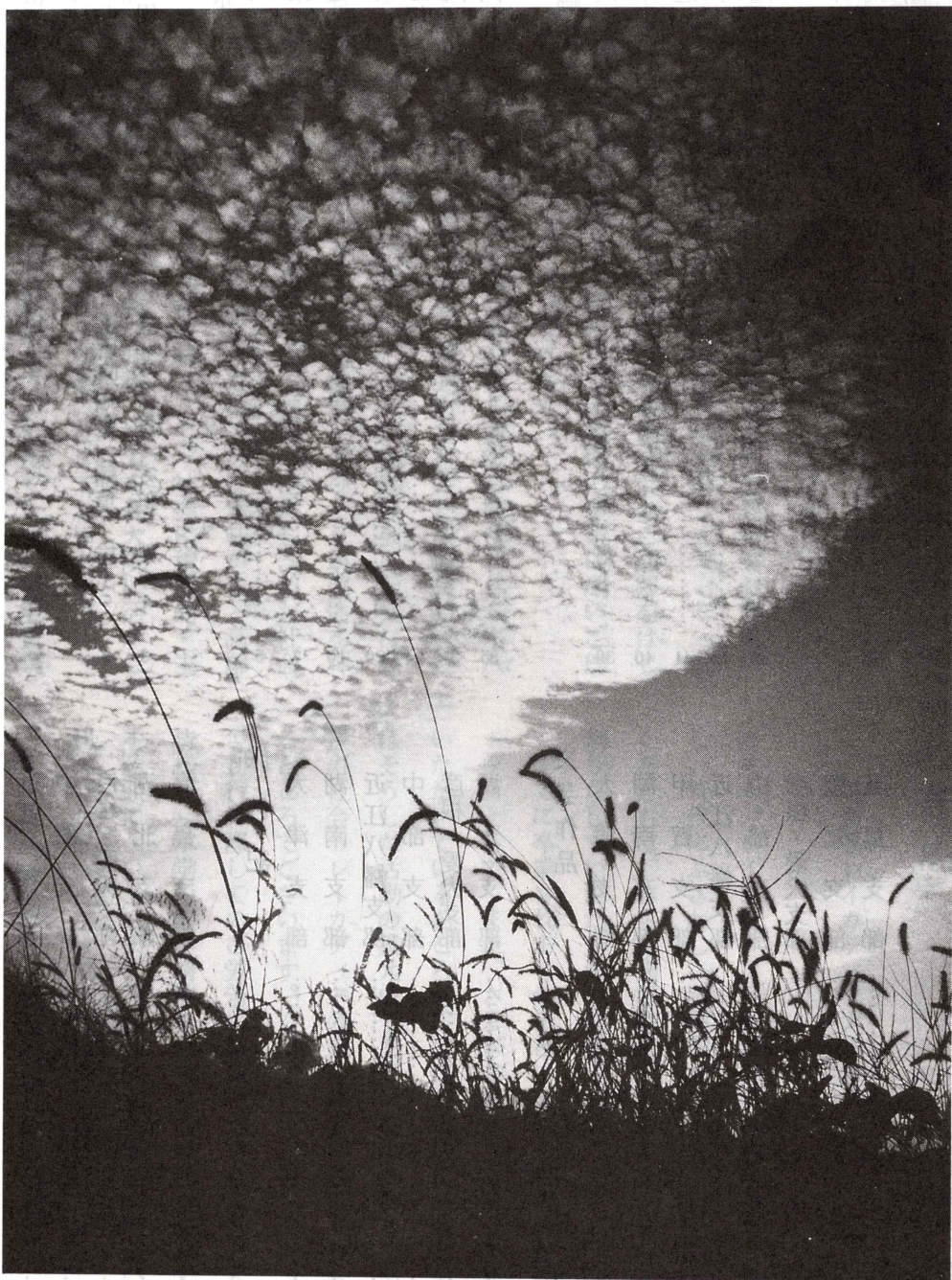
會 報

第 14 号

平成7年度



滋賀県レイカディア大学同窓会



刻々とひろがりゆく雲の変化♪
自然と人間とのかかわりが、悠々と安らぎを魅せている。……

野洲町、加藤俊雄氏撮影

目次

甲賀支部	77
湖南支部	72
大津支部	53
随筆・感想		
湖北支部	48
中部支部	42
近江八幡支部	41
湖南支部	40
大津支部	39
史跡探訪		
高島支部	35
湖北支部	31
彦根・愛犬支部	24
中部支部	20
近江八幡支部	10
湖南支部	7
大津支部	5
レポート		
あいさつ	2
十五周年を迎えて	3
滋賀県知事 稲葉稔	
同窓会長 安倍勉	

近江八幡支部	115
中部支部	94
彦根・愛犬支部	131
湖北支部	146
高島支部	156
旅行記		
大津支部	163
湖南支部	168
近江八幡支部	170
中部支部	174
彦根・愛犬支部	177
湖北支部	178
文芸作品		
大津支部	183
湖南支部	186
甲賀支部	188
近江八幡支部	188
中部支部	191
彦根・愛犬支部	191
湖北支部	194
高島支部	198
あとがき	199
広報部長 野沢政次	



十五周年記念誌の発刊に寄せて

滋賀県レイカディア大学学長 稲葉 稔

滋賀県レイカディア大学同窓会が創立以来十五年をお迎えになられましたことを心からお祝い申し上げます。

平素は同窓会の皆様方にはそれぞれの地域でのご活躍をはじめ、レイカディア振興財団が実施します各種の事業に深いご理解とご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

日本人の平均寿命は世界の長寿記録を更新し続け、「人生八十年時代」が確実なものとなり、歴史的ともいえる超高齢社会の到来が間近といわれています。この、超高齢社会は元気な高齢者が増える社会でありますが、高齢者一人ひとりが個性を輝かせて生き生きとした生活を送ることで他の世代も含めた社会全体の活力が高まっています。そのような意味から、高齢者の方々が地域社会の主要な構成員として、社会に積極的・主体的に参画し、その豊かな経験や知識、能力を最大限に活かしていくことは極めて重要なことと認識いたしております。

高齢者の方々が地域社会で活躍していただくために、滋賀県では老人大学校、そして現在のレイカディア大学を開設してお

ります。レイカディア大学が、学習活動のきっかけとなり、新しい時代にふさわしい積極的な生き方を自ら創り出していただくとともに、さらに発展的な学習やボランティア活動の場をも創りだしていただきたいと考えております。

すでに卒業されました皆様には、それぞれが地域のなかでリーダーとして、また、さまざまなボランティア活動にとご活躍いただいているところでございます。この度の十五周年記念誌はそうした活動の集大成であり、豊かで明るくいきいきとした長寿社会＝レイカディアの実現に大いに役立つものと考えているところでございます。

刊行に際してのご労苦に感謝いたしますとともに、卒業生の皆様が、本学の建学精神である「地域社会のリーダーたれ！」を念頭に、いよいよご活躍されますことを祈念いたしました、刊行のお祝いとさせていただきます。



十五周年を迎えて

同窓会長 安倍 勉

昭和五十五年九月、草津市社会福祉センターに於て、百余名の卒業生が一堂に会し発足した同窓会も今年十五周年を迎え会員数千八百余に達し感激もひとしおであります。

老人大学校は過去十年余に亘り県の老人クラブ連合会に委託して開校されたのでありますが、校舎も設備等は全て借家での勉強でありました。仮教室で寒さをも厭わず四時間に亘る講義に堪えて頑張った苦難も今はただ追憶し友との交わりと絆を保ち健やかな生活を保持しています。

老人大学校は平成二年四月よりレイカディア振興財団に委託運営されることとなり、二十一世紀の超高齢社会を迎えるに当たり、誰もが生き生きと豊かに暮せる長寿社会をめざして「湖の理想郷」構想を推進するためにその中心的拠点として県立長寿社会福祉センターを設立し、レイカディア振興財団と共に校舎を設立し社会福祉センターに移転し平成五年十月一日よりレイカディア大学と名称変更に伴い同窓会の名称及び諸規程を変更をし今日に及んだのです。

学校当局としては校舎の新設に伴い入学定員の増加と教料の増設を図り今日に及んだのであります。

同窓会発足十五周年に当たり、記念誌の発刊と共に本校の企画に係る総合イベントに積極的に参加協力するとともに学校当局と共に大学卒業生の生活実態の調査を行い将来の同窓会の活動の資料と致したので会員の悉皆調査のため御協力をお願い申し上げます。

老人大学校の憲章を思い起して高齢化社会の指導者として理想郷建設のためご活躍を期待して止みません。

今後各位の益々の御健康と御多幸をお祈り致します。

地域と私

第十三期生陶芸学科 長澤 壽雄

現役を引退したある日、ふとした事から、福祉法人湘南学園を知り、これまでの自分をふり返り今日あるのは社会のいろいろな人の支えがあった事を思い、これからは何んらかの形で社会へ恩返しをと思いボランティアとして学園の授産施設れもん会社のテクニカルアドバイザーとして、陶芸木工織物等を指導員の方達と共に子供達に指導している。園内に自分の工房「ドッキングクラブ」をもち地域の人達に陶芸表装を教えたり要請があればどこへでも遠くは八日市、水口、草津等の公民館、老人福祉センター、婦人会、子供会へ出張指導にボランティアとしてかけ廻っています。

福祉に関わって約十年見てきた社会福祉を考えると、ハンディをもつ人達のための施設はかなりの数の設立が見られ就労の場の設定はなされています。しかし本当の意味での就労の場と

呼べる所は少なくハンディを持つ人が自分の働く場を選んでいくという視点から見ればまだまだそういう場が保障されていないと思う。このたび知人がそのような人達に対して社会自立に必要な訓練をしたり、働く場を提供していくために新しい試みとして「自立就労センターパレットミル」を栗東町観音寺に設立し頑張っているから時間許す限りお手伝いをしていきたいと思っています。

陶芸科で学んだ仲間、水口碧水荘で陶芸の研鑽を積んでいく有志に呼びかけ七十七才まで現役目標に各人が個性溢れる作品を作り続ける喜寿会を結成し年数回県立陶芸の森窯で伝統の信楽焼に挑戦した十三名が手づくりの自慢作を持ち寄って、第一回展示会を昨年十月一日より六日まで、大津市歴史博物館で開催。信楽焼伝統工芸士古谷弘、神山俊一両先生の特別出展を頂き盛況の裡に終了しました。

平成八年度は県芸術祭に喜寿会として参加を目標に作陶に励んでいきます。

入会者を待っています。

喜寿会事務局は陶芸十二期生

高野喜六さんまで

淡海路を歩こう会

第十六期生園芸学科 三 矢 豊 造

平成七年五月、十六期生園芸学科で卒業記念と親睦と健康維持を兼ね、湖西・湖北・湖東・湖南の約二百五十キロの道程を月一回約一年間で琵琶湖一周の計画を世話役安曇氏を中心として万歩会が発足された。一日の行程はJR二駅分で約十キロを神社・仏閣を主に歩こうという事である。第一回は大津京の探索であった。西大津駅に集合、大津歴史博物館、三井寺、近江神宮参拝して叡山駅までの行程であった。近場で何度か行っている所であるが、謂れや、誰がお祀りされているのか改めて確認する。また木々の樹令や枝ぶりの良さを観賞したり、民家の庭木がよく手入れされていると立ち止まり一きわ関心度が高い。

第二回目叡山駅から堅田、第三回の堅田から蓬萊までの行程残念ながら欠席、第四回目は近江舞子駅集合で北小松までの行程であった。民家の庭木を眺めながら坂道を登り、石段をやつと登りつめて目的の揚梅の滝へ辿り着いた。汗をかいた後の滝壺は水沫が何んとも涼しく心地良い。それから北小松の浜へ戻

り、本日メインのバーベキューパーティである砂浜での焼肉を食べながらのビールの味は格別においしい。

第五回目の蓬萊から舞子、第六回目の白髭から安曇川は残念だがまた欠席。

第七回は今津からマキノまでの行程であった。この日は松並木の浜寄りの道を湖面を眺めながら一路北に向って歩く。みんな元気一杯で、澄んだ空気を満喫しながら健康で歩けた喜びに感謝する。

第八回は彦根駅集合。彦根市周辺の社寺探索、清涼寺、竜潭寺、長寿寺等を参拝した後彦根城を見学し、八景亭の玄宮園を見学して河瀬駅で解散。

第九回は瀬田駅集合。各々マイカー四台に分乗して、紅葉の湖東三山探索、西明寺から金剛輪寺まで徒歩、百濟寺もお参りして瀬田駅に戻り解散。第十回第十一回は欠席、第十二回は長浜集合、慶雲館の盆梅展観賞、大通寺参拝馬酔木の観賞。あと城下町を散索して長浜駅にて解散。

この後もまだまだ続く歩こう会の級友と逢えるのが楽しみだ。予定三月は、第十三回の八日市と蒲生の里、四月第十四回は竹生島と海津大崎桜観賞が控えている。

湖南支部

デンマークの福祉

第十三期生陶芸学科 辻本 昇

先進国における男女共同参画型社会づくりを研修するため、県知事からのご指名を受け、県下十二名（男性四名、女性九名）の一員として、一九九二年十月二十日から十二日間、フィンランド、ドイツ、デンマークへ派遣されました。

福祉先進、そして男女平等の国である事は予備知識のもと、最初の訪問国フィンランドのヘルシンキへ、十月というのに氷点下（翌朝は氷点下九度で雪）、その外気に身も心も引き締められ三ヶ国十二個所の公式訪問という超スケジュールでした。今回は紙面の関係上超高齢化時代に向かうであろう事を想定して「福祉国家デンマーク」のレポートの一端を被歴して少しでもご参考になれば幸甚に存じます。

●年金で退職後も安心

デンマークは福祉先進国で、住環境、ケア体制、高齢者自身の自意識等、日本のはるか先にいる事は間違いありません。



では老後の生活対応が随分異なるという事を実感致しました。

●停年延長六十五から六十七歳時代へ

日本の税負担は社会保障負担を合わせた国民負担率は三十八%ほどですが、デンマークでは五十二%と高く、日本ではまだまだ低い水準にあります。

私の周りには、非常に元気なお年寄りもいらっしやいます。

停年延長や、主婦の社会進出により負担する側が増え、給付を受ける側が減る事によってギブ&ティクの原則から負担を望む事が今後の課題となりましょう。

サラリーマンの停年は六十七

才、その後は年金生活となり老

後の経済は国が保証しています

からあまり心配はないようだし

た。そして日本と違って子世代

と同居している人は少いようで

した。回次大朝 第十二回刊

若い時から自立心を自然と身

につけてきたデンマーク人と、

日本の家族主義がもたらす弊害、

支えあい甘えあってきた私達と

高齢化社会も超高負担を要するとなれば、中福祉で高負担になろうことも止むを得ないと思い、その場合の税負担はどうあるべきかは今後の課題として十分な議論が必要となりましょう。

躍動する夕陽

第十六期生陶芸学科 伊吹精郎

世界でもう一度行きたい所はどこですかと陶芸科の会合で聞きましたところ、モロッコとの話が出てきましたので、太平洋の日の出を見て大西洋の日の入りを見るのもいいなと早々に出かけました。モロッコの夕陽は身震いし燃え上がる躍動する大きな太陽なのです。明日の劇的なドラマを約束するような力強さと明日への希望を与えてくれる感動を覚えました。

ところで、日本は滅びるというアメリカ在住の日本の才女に出会いました。現在の日本の中高年の男性のだらしなさは何だというのです。「退職金の計算や定年後の銭勘定、個人生活の過ごし方へのみ走っているのは……何事ぞ！」とお叱りを受けました。

このままでは日本は滅びると言うのです。何故？……先進国

で中高年の年齢でのボランティアの思想がないのは日本だけだと指摘されるのです。個人だけ、自分だけ良くて生き残ろうとするエゴの国となって存続した国は正史に無いと言うのです。

QUARTER CENTURYの論理を彼女は展開します。人生百年を4分割し、オギャーと生まれて25歳までは親と社会の庇護のもとに実社会に出る前の準備をします。25歳から50歳までは子育てに専念と同時に社会に貢献できる仕事をしなければなりません。50歳から75歳までが問題で、50歳までお世話になった社会に恩返しすべきだと言うのです。

日本のこの年齢層で欠落しているのは恩返しで、社会になんらかの還元を……ボランティアをすべきであると強調します。75歳からが本当の余生を静かに送るといふ、各区切り毎に全力を尽してこそ人生があり、国も安泰な社会環境を維持できるというのです。

私達の人生はいろいろと長い道のりを経過致しましたが、やはり陽は西に傾いた位置にあります。しょぼくれた落日ではなく、全力をもって身震いし、人生の輝きを一まわりも二まわりも大きく社会のために輝かそうではありませんか。

子も孫もお爺さんやお婆さんの生きざまをみて力強く人生を歩んでくれることを信じながら。

いじめ問題

第十六期生生活学科 北村 清子

最近、心を痛めているニュースは学校でのいじめ問題である。孫達（十代）は受難の時期なのであるか、自分のその頃を偲び顧みて何処でその仲間作りが間違つて来たのか考えてみた。

昔は三世代同居は当然ながら、家族人数も多く両親は終日忙しく働いていた。また子供にしても幼い弟妹の面倒や年老いた祖母の手伝いと年令差を超えた触れ合いから自然と他人に対する思いやり、気配り、自制心、忍耐等が身についた。また遊びの場でも地域との繋がりが自他共に認める統率者がいて、彼なりの適確な判断により処理され長く尾を引くような陰湿な関係が生じることはなかったと思つてゐる。現在核家族が進み子供数も極度に少なくなり、それにより人間関係が稀薄になつたような気がする。また、一步外へ出ると物欲の対象は氾濫し若者の射倅心をあおる。被害者、加害者におかれる状況は様々であるが、悪は悪として容認することなく毅然と対処されたい。

学校の先生方にも多様な角度から考えていただいている。ある学校ではクラブ活動での中の一環として老人ホームへのボランティアがあったり、また幼児相手の保父、保母体験等をされたと聞く。これは相手方の為だけではなく自分自身の情操を養うものとして大切に思われる。

先日或る駅で、小学校三〜四年生ぐらいの集団に出会つた。エスカレーターに乗るべくその場所へ行くと一人の子供が前を行く同級生を背後から突くのを目撃した。咄嗟に大声で叱りつけると雑多な思いが頭をよぎつた。その子達には、ほんの些細な悪ふざけではあるが、もし事故が起つてからでは取り返しがつかない。双方共に一生ぬぐいきれない重荷を背負うことになつた。いじめではないと信じるが一言の注意は、その成長が大切な故に遠慮してはいられない。

ますます国際交流の進む中、多様な生き方が望まれる。限らない適性を秘め多大の可能性のある次世代を荷う青少年の人生が、晴やかで悔のないものであるよう、見守りたい。

「の時代」

第四期生陶芸学科 岡 田 英多良

昨年早々の阪神淡路の大震災。「殺人も教義」だとするオムのある恐るべき数々の反社会的な行動。狂義でなくて何なのか。

益々底沼の様相を深めつつある住宅金融専門会社（住専）の問題。それを取り巻く母体行を初めとする一連の金融機関。無感覚と言うか、放慢経営、無責任さには開いた口がふたがらない。

住専、母体行、借り手などこれら国会が態々招致した参考人による意見聴取など、大凡、国民が抱いている疑問、批判に答えぬまま。住専論議どころか、一部始終テレビで放映されたが参考人としての言動、我れ関せずと言った横柄な態度。国民を愚弄するのも甚だしいものがあつた。当然のことながら、その内の何人かが既に触法処分を受けている。

融資返済不能分を処理する為に、六千八百五十億円を財政支出する問題等々、慎重審議する筈の国会議員が議事室内の廊下階段を占拠、連日連夜長期に渉り座りこんだあの体たらくは何たる事か。住専問題と、それにまつわる国会審議の空転、これも税金からの支出で賄われているのである。

不正操作は住専だけではない。行政機関内部における公金架空支出問題等々、枚挙に限りがない。いづれも嚴重な監査規則により監査が実施されている筈、「監査」の字が泣く。

この処、子供のいじめによる自殺が頻繁に報道されるが、流行化せねばと気になってならない。薬害エイズの問題等々。

一挙げて復興に努力されているが、今尚多数の方々が仮設住宅で苦渋の生活を余儀なくされているなか、以上何一つ未解明のままなのである。

総てが戦後の「豊かさ」が起因。その「ツケ」が次々に廻ってきているように思えてならないのである。何れも今世紀の記録として大きく残る事件ばかり。

さて、表題の「の時代」パズルではないが、何と字句を入れればよいのか、書きようのない時代、思いつかぬまま稿を閉じることにする。

諺に思う

第六期生園芸学科 村井繁一

「三つ児の癖は八十まで」と子供時代から聞かされ、「菩薩（米飯）を粗末にしたら眼がつぶれる」「物を大切に使わないと罰が当る」と、耳がたこになるほど聞かされたものだ。

当時物が少なく経済力も貧弱であったが、戦後五十年凡ゆる物が社会に溢れ、経済力も豊かになり物の有難さを思う心は毛頭もなく、「ポイステ」が至る所に見られる。廃品屑物置場の衣食住器具残物、子供の学習用具履物類、中高校の自転車盗難物の借り貸し住専遊びと、目に余る行為が後を絶たない今日この頃、親は子供のしつけ、家庭教育の厳格に目を覚し物を大切に使うことが物の生命を生かし、人は生かされていることに繋ることであり、「有難い」「勿体ない」心の兆しを望みたい。

苦への対処

第七期生文芸学科 辻正一

おおよそ私達人生は笑い楽しい生活と苦しみの社会に生存し

ている。苦しい時の対処は、各人各様、この地球上の総人口と同じだけあることでしょう。だがその様々な答えの中で、たった一つの真理を見出すとすれば、人生らしく生きることだと答を耳にする。

人生の試練は日常連続の社会であり、この苦難に如何に立ち向かうということが話題として生まれる。その「苦」に対処する方法として掲げてみる。

一、苦に出会ったとき、ひたすらそれを避け、触らぬ神にたたりなし、または取りのぞくかして逃げまわる消極的の姿勢。
一、苦を懸命に耐え忍び、ひたすら我慢するという忍難根性の姿勢。

一、苦を避けることをせず、むしろ自ら求めて自分自身の修練の場と信じる挑戦求道の姿勢。

右の三つの姿勢に大別することが出来る。
人間とは万物の長であるという性善説の立場からすれば、三つ目の歓苦は自身に与えられた試練であると信じ、自己修練に積極的に対処することが人生の生き甲斐ではないだろうか。

まさに苦に出会い、進んで自ら対処し、打たれ砕かれる苦しみを歓とし、いとしみ、励むことこそが真に人間らしさ、ひいては人生の本当の生き甲斐であり、生活なのではないだろうか。

腑に落ちないこと

第八期生文芸学科 安倍 勉

平成八年度の政府予算は、景気と構造改革に重点を於て、一般会計七十五兆千四十九億円と五月九日可決された。不況が長引いたので税収の伸びは期待出来ず、歳入不足で七年ぶりに赤字国債の発行と建設国債の発行と合せて過去最高の二十一兆円余となりその利子は一日十三億円で毎日小学校が一校宛建てられる計算になる。この予算の中身は不良債券処理費として六千八百五十億円が含まれ、これが積算の基礎と内容が不明確であることから削減せよとの意見続出して二十日間に亘る審議が停滞した。昨今の紙上は「ジュースン」という活字が飛び交わされている。不良債券の額が不明確で第二次補充填も六千億円が必要とか、国民一人約一万円の負担であつて当然借り手の責任で処理すべきで、公費負担は納得出来ないし五大銀行及び農協金融の所見は腹だたしい。不良債券の実態を明確に把握すべきである。

次に政党助成金の問題である政治活動の諸経費は当然自分で

賄うべきであるに（後援会とかパーティ等で）不拘支出所要額の二分の一を公費負担で賄うとか、この額が三〇九億、最近この二分の一の額を廃止して全額負担の対象とすべきとの声あり言語道断である。手前味噌の予算編成に忠告したい。

税収の補填を消費税の三%から五〜八%に改定する声が出ているが、ただ税収の補填のみでなく用途を明確にすべきこと、益税の処理の不合理を是正すべきである。

抜本的な歳出内容を検討して計るように対処法を切望したい。庶民の生活を考えて……。

失われた貴重なもの

第八期生文芸学科 洞 忠 郎

今年は戦後五十一年になる。誠に感無量である。終戦の日を境として、私達国民はまるで熱病にとりつかれたかの如く、それまで絶対視していた価値観を一変した。全体主義の猛威の反動とは言え、あまりにも猪突猛進しすぎたきらいがあった。

たとえば、戦前の道徳律の中にも否定すべきものと堅持していくべきものがあつた筈である。古来からの「しきたり」

悪いもの。新しい考え方Ⅱ善と短絡的と言うよりも盲目的に信じてしまったのではなからうか。もとより、新しい考え方の中にも立派なものも決して少ないものとは言えない。

反面、破棄されて当然なものも多く存在した筈である。例えば、辛労を重ねて養育していただいた親に“頼みもしないのに生んだ”として冷遇、いや放棄する子も少数ではない現実。これは決して若人だけを責めることは出来ない。“我が子”をも殺す親も少数ではないからだ。

オウム真理教の一部の信者たちが老人も婦女や幼児までも死に至らしめた“恐るべき行為”は、彼等に特有のものとは言えない。また最近の“住専”の問題に明白に表われている“無責任さ”は言語に絶するものがある。借りた金は返却しない。返す意志も能力も欠いている相手に“大金”を貸し与えた者も二、三ではない。その事実を指摘されると、それは“バブルが崩壊したから”で、“私の責任ではない”と平然としている。さらに悪いことには、官僚や政治家たちも言を左右にして責任をとろうとしない。しかも、その“尻ぬぐい”を、すべて国民に押しつける始末だ。

こんな“無責任”で“恥知らず”な国に日本はなっているのである。今にして、この惨状は“どこに原因があるのか”一億

二千万の国民が胸に手を当てて三思しなければ、日本の前途は“暗い”ものに成り果てるであろう。

長 寿 十 則

第九期生文芸学科 鶴 房 健次郎

- (一) 少肉多菜 肉食は少なくし野菜を多く食すべし。
 - (二) 少塩多酢 料理全て薄口とし盃半分の酢を飲むべし。
 - (三) 少糖多果 糖は大敵果物は全て健康に良い。
 - (四) 少食多齧 腹八分医者不要よく齧れば少食で十分。
 - (五) 少酒多汁 酒は百薬の長適量を決めよ。味噌汁は薄口とすべし。
 - (六) 少煙多乳 煙草は少なくし牛乳は多く採ること。
 - (七) 少煩多眠 煩惱をなくし熟睡に心がけよう。
 - (八) 少怒多笑 笑う門に福来る怒は自分だけにせよ。
 - (九) 少衣多浴 薄着励行毎日入浴ぬる目で長時間入れ。
 - (十) 少車多歩 乗り物はやめ歩くこと全身運動となり健康の基なり。
- 番外少暇多趣 暇は一番毒なり趣味を多く友を多くすることが

呆け防止の基なり。

※番外は筆者が考えた言葉です。身体がよくても頭が呆けては
どうしようもない。最近特に実感として受けとめている。互
いに気をつけましょう。

手前味噌健康法

第九期生園芸学科 木村三良

過日、県職OB会のゴルフコンペに参加させて貰ったが、元
気にプレイを堪能することができて喜んでいる。

キャデイさんから「その年で元気なのは、何か秘訣があるの
でしよう」とひやかされて、くすぐったい思いを禁じ得なかつ
た。「私は車に乗るので、つい運動不足になりがちなの。だか
ら毎朝六時に起きて、朝体操をした後、十分ほどジョギングを
励行している」と言ったら、これについて「元気なのはその故
でしょう。この間九十三才の人がみえて、元気にプレイされた
のにはびっくりしました。その方までは、まだ十年あるから、
これからも頑張っつてね」と励ましの言葉をいただいて恐れいっ
た次第である。

朝早くから、このような運動をやり出したのは、前記の理由
の外に、家の中に高校と大学の受験生をかかえていて、朝六時
に起きて頑張っているのに刺激され、年甲斐もなく妙な意地を
出して負けん気を出したのが始まりである。続けているが、爽
やかな気分が味わえてよろしい。

健康を維持するには、適度な運動、休養、栄養のバランスが
必要なことはいままでもない。少しの田畑を耕作しているのも
程よい運動になっているらしい。

筆者は大阪にいた頃、軽い糖尿病と診断されて久しくなるが
治療するほどではなかったので、過食しないようにと注意され
現在に至っている。空腹時の血糖値は一三〇。少し油断をする
とはねあがる。柿の葉と青し草がよいと聞いたので、これに毒
だみ茶を混合してお茶がわりに服用している。血糖値の抑制に
は役立っているらしい。

なお、栄養補助としては、玄米胚芽油（ハイパワー）を常用
しているが、効果の程度は不明である。もう一つ、四年前に急
性座骨神経痛を患って、鍼灸で癒してもらったのが縁で、毎月
一回この治療を予防的に実施している。老化しつつある身体に
はよさそうである。

人は誰でも健康で長寿を願わないものはないであろう。しか

し、変化という自然現象には勝てない。

工夫しながら、自分に適した健康法を考え、お互いに元気で晩年を飾りたいものである。
(八十二才記)

学校の先生の制服について

第十一期生陶芸学科 井上源一

最近の新聞である都市で「先生の制服制定」が問題となり、議会で提案されたとのニュースを知りました。その時は取るに足らぬ問題だ間違いなく否決されるであろうと思っていました。それが賛成多数で議決されたとの報道を知り「オヤオヤ」と感じました。

しかしよく考えると生徒達には制服着用を決めておき、制服にしたお陰で学校の非行も少なくなり期待以上の効果が上がったと言うのもおかしいことではないでしょうか。生徒には押しつけたことを先生は自分達の制服は人権、プライバシーの侵害であり絶対反対だと言う、虫のよい言い分である。制服を着たら何か監視されるように考えておられるのではとも思う。教育者として自覚が足りないと思う。世の中に制服を着用すること

が決められている職場もかなり多い。自衛隊は別として警察官、看護婦、裁判官の法衣等々と考えると、先生の制服採用も市民の代表として議会に臨んだ議員さんの良識とも思える、先生も何でも役所から押しつけと反対するばかりでなく考えて議論して欲しい。戦前の我が国の良風が音を立てて崩壊するように受け止めている老人の戯言と言われるようにも思えますが真剣に皆さんで討論していただきたいと思う。私は今では先生の制服着用を賛成する側になりました。わが国の自由の先輩とも考えられる米国の大統領も望ましいとの話をしたとも報道されたと聞いております。

最近はず専の問題やTBSの論議が連日放映されいささか食傷気味です。マスコミ、報道関係の皆さんもわかりやすい先生の制服着用のこのような問題に少し力をさいて問題提起して欲しいと思います。滋賀県のどこかの自治体でも取り上げて欲しいと願うものです。会員皆さんはどのようにお考えでしょうか。知りたいと思います。

(最近の新聞を見て)

一期一会孫と共に

第十一期生生活学科 高原 ふみ子

「会うは別れの始め」とか。会うことはよいが、別れることはいやだ。誕生、死何れもやむを得ないことだけど……。では人はどんな生き方をすればよいのでしょうか。先日孫が中学校のPTA新聞を見せてくれ、なるほどなあとうなづくと共に紙上の先生のパーソナリティーに感動させられました。

内容を抜粹すると、「豆腐は四角四面の仏頂面だが、軟らかさ申し分なし。身を崩さぬだけのしまりもある。煮ても焼いてもよし、寒天の空に凍らしてもよい。相手を選ばず、スキヤキお鍋、実に融通がきく。要するに豆腐のような人間になれ」と先生は卒業生に贈られた言葉なのです。

融通がきく柔軟性のある人になるには難しいことであり、また勇氣もいるのではなからうか。

「豆腐のような人間になる」なんと素晴らしい言葉なのか。中学生生活を最終に迎える孫と進級する孫の二人と、私は七十路を越えた現在も、いや生涯この言葉に一步でも近づける老後を

過ごしたいものです。

理想とか、夢に向かって、とか難しい指導よりも私は孫が見せてくれた新聞のお陰で心温まる先生に出会いが出来た現在に感謝し、どんな人にも思いやりのある心と出会いを大切にして孫と苦楽を共に進んで行こうと思っています。

身に染みて一期一会の少年に贈る言の葉いま果立ち行く

世相に思うこと

第十二期生陶芸学科 西川 甲三

最近、世の中がどうなっているのかと思うほど非常識な出来事が多い。くわしくは新聞で報じられているので、ここでは省略しますが先づHIV（エイズウイルス）薬害です。

一部の医師と製薬会社は人の命を救うべき基本を忘れて危険な非加熱血液製剤を不当に販売して被害を拡大させたことです。

HIVの治療方法が確立していない現在、人の尊厳を傷つけた神を恐れぬ所業と言わざるを得ない。

もう一つは住専（住宅金融専門会社）の問題です。

担保を十分に取らずに巨億の融資を行なう等のルールを無視した行為によって経営を破綻に落とし入れ、引いては全国的な金融不安を招いていることです。その上、この「やぶれかぶれ」の乱脈経営に一片の反省もなく責任を他に転嫁していることです。「基本を忘れ」「ルールを無視した」ことがこの惨事を引き起し、多くの人々に迷惑をかけたことは明白です。

我々は子供の頃から「他人に迷惑をかけない」ことが人間として最低のエチケットであると教えられてきたものですが、自分と同年代のこの当事者達は忘れてしまったのであろうか？ プロ野球におけるファインプレーも基本をしっかりと会得してこそ可能なことです。殊にルールを無視した車は交通事故を起すことが当然です。

もう一度「基本に返って、ルールを守る」よう、先づ私の子と孫によく教えたいと思っています。(平成八年三月記)

プラス思考で心に笑顔

第十三期生園芸学科 大堀 武三

最近の新聞テレビのニュースを見る限り世紀末の感じがする。

人間の姿が基本から狂っている。国民の代表である政治家を始め、高級官僚と悪徳業者、利権を食いものに自分本位に生きている。周囲を見れば至るところにゴミや空き缶が散乱している。また殺人が簡単に起る恐ろしい世相となっている。学校でも重大問題が報道されている。どこを直したら美しく住み良い世界が実現出来るのか、全部改め直して一から出直さなければ繕いだけではどうにもならないと思います。

私達は前向きな思考で人間形成の範を示し心に笑顔を忘れず蔵の財より身の財、身の財より心の財が第一であることを大切に笑顔の人生を送りたいと念願致しております。

いじめ死を根絶しよう

第十三期生園芸学科 深尾 源次

いじめを苦にした中学生のいたましい自殺が、最近相続いている。彼等の死に心を痛めると同時に、なぜそんなに性急にかけがえない若い命を絶つのかと問いかけたくなる。残された遺書等によって、執拗に繰り返されるいじめの実態は私達の想像をはるかに超えたものだと思われる。いじめに負け

まいとして必死に頑張っているうちに、息切れし絶望し命を絶つ。そして、その多くの場合自分の悩みを聞いてくれ、助けてくれる者は誰一人いないと思いつめている。

いじめは絶対に許されない。教師と親、地域がお互いの信頼関係を築き、「弱い者いじめはよくない」「どんなことがあっても自らの命を絶つことはあってはならない」ことを、「思いきって相談すれば、まわりの大人が、先生が、友達が必ず助けてくれる」という信頼感をどの子どもにも持たすことが大切だと思う。「いじめめる」「無視する」「いじめをはやしたてたり、傍観する」ことがどんなに非人間的なことで、決して許されないことだと教えなければならないと思う。

さまざまな個性を持った者が違いを認め合って共存しているのが社会であり、自分が大切にされたいことは、他人を大事にすることの上に成立することだと認識させたい。

地域社会への奉仕

(お世話になった社会への恩返し)

第十六期生園芸学科 桜井しげお

私は、今まで培ってきた知識や技能を一人でも多くの人に広

め、地域の方々と共に活動することは自己研鑽の一つであると思えます。私は、経験豊かな高齢者が地域のシニアリーダーとして、身近なところで活躍することが、私たち高齢者の生き甲斐であり、そして心と身体の健康につながるものと信じています。六十歳代は、まだまだ現役の青年です。自分の行動が社会奉仕の一端を担っているという自覚のもと、今まで培ってきた技能や知識を活かす意味において、お世話になった地域社会へ貢献することを常に考え行動したいものです。



中品 (磯山城石付) 石共高さ30cm 鉢/白交趾丸(にれ願) 約軸構田
滋賀・近江八幡市 桜井しげお
見所: 磯山城やにれ願の樹格もさることながら、三点節りとしての鉢合わせが見事です。



五葉松 樹高76cm 鉢/和構円
滋賀・近江八幡市 桜井しげお

(カット提供者 第十六期生 桜井しげお氏)

信楽たぬきの八相縁喜

第十六期生陶芸学科 下 田 喜美子

平成七年レイカディア大学陶芸科を卒業して半年余り。今はクラスの有志と碧水荘で月に二日間の作陶教室に通っている。

往きも、かえりも、あの大きな狸や、可愛い子狸が店頭で顔を揃えて、おいでやす。氣をつけて帰りや。と送迎してくれるように、私には思われる。

さて、老大同窓会が出来て十五周年目に当たるとのこと、幹事さんに投稿を頼まれ、何を書くかと考えたが、何年か前はどこかでもらって忘れていた『信楽たぬき八相縁喜』と言う一枚の古紙が見つかったので、列記してみます。

まず、たぬきの

笠 || 思はざる悪事災難を避けるため、

用心常に身を守る笠 || 事故防止

目 || 何事も前後左右に気を配り、

正しく見つむことな || 時局認識

顔 || 世は広く互に愛相よく暮らし

真を以って務めはげまん || 笑門福来

徳利 || 恵まれし飲食のみにこと足りて徳

徳はひそかに我つけん || 始末儉約

通 || 世渡りは先づ信用が第一ぞ

活動常に四通八達 || 信用第一

腹 || もの事は常に落ちつき

さりながら || 冷静沈着

金袋 || 金銭の宝は自由自在なる

運用をなせ 運用をなせ || 勤勉貯蓄

尾 || 何事も終りは大きくしっかりと

身を立てることぞ 真の幸福 || 終良全良

これらの言葉は、

誰でもが知っていて、近頃では忘れていた事柄である。昔の人は本当に良い教を残して下さい。

私もこれからは、福徳円満、無病息災で、自分の目的とする稽古事に精進して行きたいと願っています。

高齢者活動の一考察

第十三期生文芸学科 板岡 久右之門

めまぐるしい勢いで高齢化が進むなか、どこへ行っても大勢の高齢者がそれぞれの分野で活動されていることと思う。

しかし、本当に何の抵抗もなく自分の意志の赴くままに活動され生きる喜びを実感されている方ばかりであろうか。地域社会のリーダーと言えば聞こえはよいが「役」を貰っているから仕方なしにあらゆる行事より優先して参加されている人も多いのではないだろうか。否、大半の人がこの部類に入るのでないだろうか。

今一つネックになっているのは目的地までの交通手段であると思う。自転車に乗れない人、乗れる人でも今日のような通戦争のきびしい状況ではどうしても危険を伴うので大事をとらざるを得ないことになる。即ち、棄権をするか他の手段を選ぶしかない。車を持っておられる人に便乗するのも責任が伴う

し限度があるので多くは望めないことになる。

そこでこのような状態の中での我々の活動をどのようにしたら納得も満足も得られるかを考えてみた。

先づ第一に前向きに取り組むことが地域社会に貢献しながら健康増進の一助にもなることを自覚することだろうと思う。やる気がなければ何も出来ない。人生の価値観は人それぞれであるが物事に積極的に取り組むことがもつとも大事であると思う。蛇でもエビでも脱皮をして新しく生れ変わるわけで人間も常に目的をもって行動することがどんな施策よりも優先されるものと思いたい。

次に交通アクセスの問題であるが、行政機関に依頼する他仲間とおしの便乗による方法以外に私は多数の集団による行事は出来るだけ各地方に分散し交通手段を必要としない方法をとる以外道はないと思う。

人生は長さではなく深さであることに思いをいたし、一つでも多く社会に貢献出来るようなライフスタイルを構築することが健康と社会活動を維持する源泉であり、最善策であると思じこれからも過去は振り返らず前を向いて堅実に歩いていこうと思う。

環境問題を考える

第十四期生陶芸学科 岡田 弥彦

「守れイヌワシ クマタカ」「第二のトキの危機」木之本町と岐阜県境に関西電力が予定している発電用ダム計画にからむ記事の見出しである。(三月八日朝日新聞)

数年前同地域のイヌワシの生態についてテレビで放映されたことがある。その子育てには多くの餌がいるため、落葉樹の葉がすっかり落ち山肌が一面の銀世界となり小動物が捕えやすい冬期に行われる。真白な深山の寒風吹きすさぶ上空を旋回する雄姿は餌捕りの厳しさを訴えているようでもあった。

いま、地球上では一日に一種の生物が絶滅しているとも言われる。人類の爆発的な増加と文明の進歩により、今や未曾有の大量消費時代を招来するに至った。太古から蓄積された資源や自然環境が急激に失われ、生物に多大の悪影響を及ぼしている。ではどうすればよいのだろうか。その一つ「消費は美德」から「熱を惜しむ社会」を築いていかねばならない。火力発電所を例にとると、石油や天然ガス等の燃料の六割以上が発電時や

送電中に排熱となって捨てられている。石油に換算すると一億三千万キロリットルが利用されずに環境を悪化していることになる。電気一辺倒でなく、あらゆる熱源を上手に直接利用する生活への転換、それを可能にする機器の登場が望まれる。建築家戸田和孝氏は局所暖房の見直しを推奨し「こたつは最高の暖房器具だろう。すき間風吹く木造の小部屋でコタツに入っているカンでも食べながらインターネットで世界とつながる——なんてのが最新のライフスタイルかも知れない」と書いておられた。わが家でも今年には豆炭のコタツに切り替え、長らく忘れていたまろやかなぬくもりを味わっている。

国の環境対策課では、二十四時間スイッチを入れっぱなしの待機電力、保温型の炊飯器やポット等の電力は、全国集計でざっと原発四基分に相当するという。

一つ一つは小さくても集まれば大きい。「まさに地球環境問題の構図だ」と説いている。我が家の電気器具についても見直しと効率的な使用に努めたい。

新しいダムの必要もなければイヌワシの絶滅を憂うこともないであろうと思いつつ今日この頃である。

ふれあいサロン

第十五期生園芸学科 諏訪 助蔵

私が福祉協力委員に自治会から推薦されたのは、八日市市市辺地区の社会福祉協議会の当時の会長で村田四郎氏が民生児童委員が町にないのに憂慮され、何らかの対応を求めるには、福祉委員の各町からの推薦を取付け、民生委員を補佐して福祉の充実をとのねらいで、平成四年四月に八日市市でも他地区に先がけて誕生しました。

当時は推薦された方々にも十分な認識も趣旨も理解出来ず、いたずらに月日が流れるだけで、福祉委員は何をしているのかと指摘される始末でした。私はその年、社会福祉協議会の会長に選任され、福祉委員の代表にも選出されました。私自身大役で無我夢中で努めて参りましたが、福祉委員の役目を模索するに過ぎず、民生委員からの指示もなく、民生委員は厚生大臣の委託と言える特別な使命を持っておられるので、その壁を越えることは出来ない。それに市福祉センターからの指示もないのは、市全体に福祉委員の制度が出来ていないので、まったくの

孤立の中の団体として過去三年間は名前だけのものでした。

それが今回八日市市が、県の指示で高齢者福祉の一環として標題のように、ふれあいサロンと位置づけて各自治会単位の小グループで簡単な昼食を挟んで健康チェック（保健センター）簡単な健康体操、そしておしゃべりの二時間程度を普段着で寄って頂いて実施することに福祉協力委員会の組織の出来ている私達市辺地区に相談があり、県、市、私達で協議し、民生委員や自治会にも支援を頂いて実施にこぎつけることが出来ました。これからの高齢化社会の福祉の一燈がいつまでも消えることのないよう祈るとともに、経費の面でどう取組んでいくか、集まって頂いた方々が喜んで次回を楽しんでおられるその笑顔に絶対続けていきたいの心に今まで模索していた夢が現実となりこの道に今後も取組んでいくつもりです。願わくば全市で、全県下でと祈ります。

音楽健康法

第十六期生

近藤 美枝

近年病院や様々な所を訪れると、どこでも美しいメロディー

が流れている。

今、全国の医学学会では、音楽によって人間の脳を刺激し老化防止、痴呆疾患の治療また精神的健康法などに大変な研究成果を挙げておられる。

我が町では、平成六年に素晴らしい「文芸セミナー」という音楽堂が構築された。そこには有名な音楽家を招き、時折々の名曲や、楽器の演奏などが催される。音楽愛好家はその都度心豊かな時を満喫している。

さらに平成七年から、高齢者に向けて「はつらつコンサート」を企画され、月一回催されることになった。音楽を聴くこと、歌うこと、音楽のルーツを学ぶこと、このコンサートは我々にとって、最高の楽しみと学びである。心から幸せを感じる。

ご指導頂くプロデュースは、音楽健康法を専門的に研究なさっておられ、全日本音楽療法連盟会員の呉竹英一先生である。

先生の説によると、古代エジプトやペルシャ、ギリシャなどの国では、音楽は「魂の薬」「善の精」といわれ古くから音楽療法が進められていたとのことである。

先生の研究の中から、音楽が脳を刺激すると、集中力、記憶力、持続力を高め、精神を安定させる効果があるといわれる。またコンサートの演奏前と演奏後の聴く人の脳波の動きを簡易

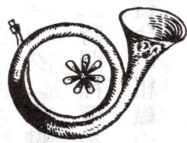
脳波計を使って研究しておかれるが、脳波の中のアルファ波

α（精神の安静状態）がかなり変化し、なお増加するのである。

例えば、暗い表情が音楽を聴くことでだんだん明るくなり、また精神が安定状態となる。心はゆったりとして不安な気持ちから離れることが出来るのである。

紙面の都合上、先生の細かい研究実例の成果を皆さんに伝えられず誠に残念である。

とにかく、音楽は健康法である。クラシックでも、ジャズでも、演歌でも、自分の好きな曲を聴き、また歌って、リラックス感を引き起し、益々これからの健康づくりに役立てたいと思う。



彦根愛犬支部

長寿百歳を夢みて

第三期生文芸学科 北川 弥一郎

自分のからだをみつめて、健康長寿の根本は何か、自分の余生を目標をたてて生涯の生きがいとなし自分の三原則として励行します。

其の一は食物のこと 自分の栄養食として自分のものは自分で調理します。一日三十種類以上を目標に果菜類、根菜類、葉菜類を取り混ぜて一回に十種類以上を三日分煮つけて冷蔵します。すべて消化の良いように味付けも工夫します。食事は一日二食で朝九時、午後は四時目標です。各種類は多いが量は少なく、ご飯は軟らかく、腹八分目を守ります。

其の二は血液の循環で運動によって血液の巡りをよくすることです。自分が今日まで五十年間自転車で鍛えられたと考えられるが、この頃では一日一時間程度乗ります。歩行運動もすれば軽い農作業も適当にやっています。入浴は一日も欠かさず風呂

は一番楽しい行事で薪を切ったり、割ったり一日分の材料を集めたり、風呂の温度は冬分は四十三度と測って自分の適温で入れるのもまた楽しいものです。毎日手足を使う運動で足や肩などそのところをもんだり摩擦したり叩いたり、夜寝る時の効果は大きい。

其の三は深呼吸で酸素を多く体内に送る運動です。年老いれば自然弱るのを老後はまず必要を感じます。百歳まであと七年、自分で作った三原則、自分で励行して目標を達成したいものです。自分に励行を誓います。

支部活動の一試み

第十一期生園芸学科 磯貝 澄雄

昨年十一月に第十六期生の本会への入会を機会に「新入会員歓迎会」を開催しましたところ、予想外の盛況で、出席会員の反応も極めて好評だったので、その概要を紹介させて頂きます。この試みは前年度から支部活動を彦根、愛知、犬上の各ブロックに分かれてそれぞれ独自の行事を行うよう、会員数に応じて予算配分がなされたので、この予算を有効に使うにはどうす

ればよいか、わが彦根ブロックでは幹事会で検討した結果「新入会員歓迎会」と銘打って親睦会を行ない併せて会員の意向を聞いて今後の運営に役立てようとの企画がまとまったことからこれを実施したものであります。

歓迎会の内容は、ブロック長の歓迎の言葉と支部長の祝辞に続いて新入会員代表の挨拶で歓迎行事は三十分で終り、出席者の自己紹介と「本会の運営等について」の意見交換を一時間三十分、あと会食懇談で約二時間、施設設備が完備した彦根老人福祉センター大広間で大いに話し、且つ飲んで食べて、また歌を歌っての親睦会だったので。

会食等に要した経費は、会費として当日出席者一人当り千円を徴収してそれをすべて弁当代に充て、あとは缶ビール。和菓子、果物を各個人に、清酒、ビール、ワイン等の飲み物は全体に必要なだけブロックの会計で賄ったが予算の範囲内で十分出来ました。

意見交換は、最初支部長から同窓会（本部・支部）の組織運営、活動状況、問題点等についての概要説明をお願いし、続いて質疑並びに意見交換に移ったが、その内容は当面している支部及びブロックの運営上の具体的な問題点を四項目に絞って話し合いました。

短時間ではありましたが、いろいろな意見が出て白熱した議論が展開されましたが、別途行ったアンケートとともに、これら後日の幹事会で総括することになりました。

なお、どのような行事をするにしても、すべての会員に情報が十分に浸透することが最も肝要と考えられることから、会員名簿をきちんと整備することが求められます。彦根ブロックでは昨年から、小学校区別に名簿を整理し、各地区毎に担当幹事を配置して責任体制を明確に、キメ細かい連絡網を整備した上で、今回の歓迎会を実施しましたので両者相まって、これが成功につながったと考えています。

今後、新入会員を迎えた時期に、新名簿を発行するとともに歓迎会を催して、より一層相互の親睦の輪を拡げていきたいと考えています。

古きに学ぶ

第十一期生園芸学科 西堀嘉一

余世と言われて久しい私は大正九年生れで明年八月通常めめでたいと言われている喜寿を迎えますが、県老大米原校開校一期

生であり私なりに一生の記念にして大切にし早くも六年、光陰矢の如く過ぎました。年のせいだろうが年一年と変りいく現代社会の発達進歩は間違いないだろうが、喜寿長寿めでたいとは思われない昨今でもあるように思えてなりません。私は「ふ」と何かの本に書かれていた「文明文化が進めば事故災害もこれに比例する」とありました。確かに現在の世情を先見の目で言った尊い言葉、心すべき教えであると思います。現代人大勢の人もお気づきのことと思います。それは日々放送また新聞紙上で知る限り災害、自然現象で片づけられない人為的行爲、自己中心、己れの欲望を満たすに手段を選ばず戦後五十年を振り返り、果して人類の将来に楽しい希望が、楽しい世界が創造出来る得るのだろうかと思えます。人間は万物の長とは言われていますが自己満足にしか過ぎない言葉でさえあるように思えます。いかなる人間もその心には良心と共に悪心も共存していると言われており、特に先を思考出来る能力は我々人間のみが持つものであり、今こそ一人一人が反省して真の良心に基づき先見思想深く人間社会の現状を参考に人間永遠の幸を創造してゆくことの大切さとまたその義務のあることに気づくべきだと思えます。

先にも申し上げました通り、かけがえのないこの地球を喰

ているのは正しく人間であり、人間を中心として発達向上の名のもとに自己満足に過ぎない行爲であると思えます。この五十年は百事百様に変ったけれど「過ぎたるは及ばざるが如し」古き教えに学び反省の糧にすべき時に来ていると思えます。

諺の一つを少し書いてみよう。

一、物事はほどほどに止めおくべし

一、浅い川も深く渡れ

一、内の鯛より隣の鯛

一、我が身の一尺は見えぬ

一、山芋が鰻になる

一、一時を間違えば三里の遅れ

一、十回読むより一回写せ

一、一善を廃すれば衰い象善に及ぶ

一、二兎を追ふ者は一兎をも得ず

一、古老の教えと牛の尻がいは外れない

心すべき教えだと思えます。

古文書学習の醍醐味

第十五期生文芸学科 川 並 稔 男

古文書を読んでむづかしいのは、見なれなくずし字であり和暦であり、何どきと呼ぶ時間であり、銀何匁水何貫匁等という通貨の呼称であろう。

明治五年十二月三日に明治政府は、大陰暦を廃止し、この日を明治六年一月一日としたから、それ以前の文書はすべて和暦である。

元禄十五年極月十四日といえは、ご存知忠臣蔵赤穂四十七士の討入りの当日、江戸は大雪であった。昔江戸は十二月に雪が降ったと考えるのは早計で、この十二月十四日を新暦に直すと二月初めで、この頃にしばしば太平洋沿いを低気圧が発達しながら通過し、北の寒気を呼び込むと典型的な春雪になる訳で、昭和十一年二月二十六日のいわゆる二・二六事件の当日東京が大雪に見舞われたのも同じ気象条件であったと考えられるのである。

また、江戸時代は日の出から日没までを昼、日没から日の出

までを夜と決め、それぞれを六等分し、九つ八つ七つ六つ五つ四つと数えた。

昼夜が同じ時間の彼岸頃で言えば、明け六つ（午前六時）暮れ六つ（午後六時）となる訳であるが、夏や冬は一つ時の時間が二時間に限らないから非科学的でもあった。子供のおやつとは、八つ（彼岸頃なら午後二時）から出た言葉であり、また十二支を当てはめて、子の刻（〇時）丑の刻（二時）寅の刻（四時）等としたことから、正午（うまの刻）とか、丑三つ刻などの言葉も生まれた。

このような時の数え方を、不定時法と呼んでいるのである。通貨は金と銀と銭が使われ、それぞれ体系の異なる貨幣であった。だから、公私とも市中相場によって換算する必要がある。幕府は慶長十四年に金一両_{びた}銀五十目_{びた}永（永楽銭）一貫文_{びた}四貫文と公定したが、時代とともに三貨の増改鑄に伴う流通量や定量、品位、あるいは経済市況などの影響を受けた時には甚だしく上下したのであった。なお鏝一文という言葉はここから出たのである。

古文書を通し、昔の人々の生活を知り、またそれが今日どのように我々の生活に融け込んでいるか、温故知新を膚で感じることができるのが古文書学習の醍醐味である。

退屈を克服する

第十六期生文学学科 杉本匡文

日常語に退屈という言葉がありますが、これはもともと仏教の言葉であり精進に相對するものであります。仏道を求める心が退き屈すること、くじけ尻込みすること、疲れいやになること等の意味の言葉です。法華經という經典に「我等疲極してまた進むこと能わず前路なお遠し、いま退き還らんと欲す」とあります。人生には学習であれ、運動であれ、仕事であれ、これによいという終りはありません。命ある限り学習し続け、体を動かし続け、働き続けねばなりません。しかし、私達はともすれば人生に疲れ經典の言葉のように退き屈する心の誘惑にかられることがあります。理想や目標の高遠さにたじろぎ心に怯みが生じてきます。これを仏教では退屈といって修行の大きな障害としています。

法華經の中には次のようなたとえ話が説かれています。ある日、大勢の子どもを連れて五百由旬（インドの距離の単位）はなれた宝の山へ遠足に出かけました。それは山道で人通りとて

なく険しく如何にも恐ろしい道でした。子ども達は初めのうちははしゃいで元気に歩きましたが、だんだんと疲れてきてここに腰をおろし先へ進めなくなりました。もう残念だが引返すことにしようと言いつつ出す者さえ出てきました。そこで引率者は不思議な神通力によって三百由旬の所に幻の城を作り出し子ども達に言いました。「見なさい。あそこに立派な城が見えるでしょう。あの城まで辿り着けば欲しい物は何でもあるよ。あの城へ入って体を休めようではないか」と。子ども達は喜び勇んで城まで進み城内に入ったらもう目的地に着いたように思いすっかりよい気分になりました。

ここで引率者は「この城はみんなが余りえらがるから途中で幻の城を作ってやったんだ。目的地はもう少し彼方にある。ここで一休みしたらもう一奮発して歩こう」と呼びかけると、子どもの中には「いやもう歩けません。ここから帰らしてください」と言う者がありました。「しかたないなあ。どうしても引き返したい者は帰りなさい。しかし、帰るには三百由旬あるんだよ。目的地までは二百由旬しかないし、これからの道は平坦だから元気を出して歩こう」と。子ども達はもう一度勇気を奮い起し前進して遂に目的の宝の山に到達し、宝探しを存分に楽しむことができたというのです。

この経典の化城のたとえ話は私達に退き屈する心の誘惑を克服する方法を教えてください。退屈の心を克服するには高遠な理想や目標に達する道程に仮に小目標をたて、先ずその小目標に向って力の限り努力する。その小目標に到達できたら、さらに彼方に中目標をたて次の努力の集中を試みる。これが人生の営み方であると教えています。私はこの法華經の教えを常に自分の人生に生かしたいと思っています。

雑 感

第十六期生文芸学科 岸 上 道 雄

豊かな経済生活と医療技術の進歩等により、正に人生八十年の高齢化社会を形成し、まことに喜ばしい今日であるが、他方高齢化に伴う社会的課題として、寝たきり、痴呆などの不幸な事実も現存する。

高齢者にとって最も大切なことは、心身ともに「健やか」な日常生活ができることであるから、自己の健康維持管理には十分留意するとともに、主体的、意欲的に生きることが殊に肝要であると思う。

体力は高齢になるに従って衰退するものであるが、その衰退のテンポを出来る限りスローにし体力保持に努力する。そのためには、バランスのとれた食生活をするように心がけ、過飲食は慎しみ、規則正しい生活習慣を身につけること。また転倒して骨折しないよう用心する。更に血圧、糖尿などにも配慮することが必要であろう。

そして自己に適した運動を継続して実行し体を鍛えることが重要である。体操、散歩、ウォーキング等の運動によって脳を刺激し、心臓によい影響を与えられている。特に高齢に伴い起る足や腰の老化予防に運動は欠かすことができない重要性を持っている。

高齢者は、努めて頭を働かせ、何か目標を持ち、年老いても常に感動や喜びを失わないことが大切である。それには手軽にできる読書に励み、趣味に生き、多くの友人、知人と交わって語り、笑い、歌うなど、時には議論するくらいの意欲を持ちたいものである。また進んで地域社会の会合や事業等には参加して自己を磨き且つ少しでも地域社会のお役に立つよう努める。

以上思いつくまま記したが、要するに、健康管理には細心の注意を払い、精神面では活力に富む社会生活をすれば、より有意義に生きることが出来ると思う。

私もこれからの人生をできる限り有意義に生きるよう努め、少しでも地域社会の為に役立つことを念頭に置いている。

しなやかに老いる

第十六期生文芸学科 上野 エミ子

最も多感な少女期に、耳も目もふさがれ、戦事色一色に塗りつぶされて、何がなんでも勝つことのみ教えこまれ、何事も我慢し聖戦故に負けることはないと一途に信じて参りました。

今になって思うと、失った時間がつくづく惜しまれてなりません。私達の時代は、嫁しては家のため、主人や子のためのみ生き、自分のために生きた証は何一つとしてなく、がむしゃらに生きてきたような気が致します。

五十二才の時に主人と死別し、三人の子も何とかな並に成人し、自分を取り戻した折に、尊敬しておりました短歌の先輩に進められ、十六期生として文芸学科に入学致しました。本当に自分のために生きた、とても充実した二年間であったと痛感致しております。

私達が世の中を歩むにおいて、知識を学ぶことは大切なこと

だと思いますが、知識を消化して、知恵として成熟させなければ役に立たない場合が多いのではないのでしょうか。人の世を歩んでいくには、知識より知恵がより大切だと思います。知識は頭の中に短時間につめこむことが出来ますが、知恵は長い間の積み重ねから創り上げられるものだと思います。歳を重ねることによって、物事の方向を誤まらず、進むべき道をしっかりと見定めることが出来ると思います。

「老いたる馬は道を忘れず」の諺もあり、経験と知恵を活用して、最後まで生きることが世の中に貢献すると共に、自分自身も恵まれた人生を送り得たことになると思っております。

それにもう一つ、私の好きな言葉に、今更ではなく、今からと、更を、からに変えて、好奇心を失わず、しっかりと時代についていきたいと思っております。

さあ皆様、健康に充分気をつけて、共に手を取り合って、二十一世紀に向けて前進致しましょう。

湖北支部

米原校に陶芸学科等を

第八期生陶芸学科 松下保清

当湖北支部内で幾つかの作陶グループがある。勿論リーダーは老卒業生それなりの窯も保有され、毎年一回程度は作品展を開いて、さらにこの展示作品を即売し、売り上げ金を募金へ寄託している。

これらの活動は、それぞれの地域でも高い評価を受けつつある。またこのリーダーは今だに北の果てから、在校当時の「碧水」へ通い続け、自己練磨と同時にグループはじめ地域同好者のため惜しめない努力をしている。

ところが「悪事千里を走る」（北夢瓊より）とやらか……。

因みに米原校ができるとき、「草津校の陶芸学科」の代りに「米原校」には「スポレク学科」を設けると聞いていた。ところが間もなく「草津校にスポレク学科」も増設されているが、

「米原校には陶芸学科」は増設されるに至っていない。

陶芸への高い志望者は湖北支部のみならず近隣支部関係の皆さんにおいても同様とします。さらには平成六年レイカディア大学同窓会定例総会で、次の決議を経て学校長あて要望をしているが、「梨の礫」です。

十期生までが三十余名だった湖北支部も米原校誕生のお陰で今では二百三十余名の県下八支部二番目の大世帯と大盛況、かつて、念願の支部独自の会報も皆様格別のご協力ご支援で創刊できました。

この喜びも束の間であってはならない。せっかく「米原校」ができたのに、南高北低は避け難いのか残念でならないのは私一人だけでしょうか？

是非早急に実現してほしい。

記

- 米原校に陶芸学科の新設と施設の整備
- 米原校に園芸学科の実習地の設置
- 米原校にレイカディア淡海塾の開催
- 同窓生の増大に伴う事務局の要員措置と事務の円滑化

生かされている喜び

第十一期生生活学科 藤 森 篤 子

朝が来た。目が覚めた。起きられた。ああ今日も元気で、有難い。よくも元気でこの年まで……と生かされている喜びに、心から「おかげさまで、有難うございます」と、手を合わさずにはいられないこの頃です。両親とも早く亡くなり、遙かに年を越えている。妹二人とも亡くなり親友も亡くなった。(長寿社会といっても必ず長生きするとは限らない)。「私の分まで病み、私に命を頂いたんだ」と思えば、うかつな日暮しでは勿体ない。一日一日を精一杯生き、悔いなき人生を送りたい。

幸い主人も今年傘寿を迎えたが、至って元気で、雪が積れば「よい運動がさせてもらえる」と除雪に張切っている。三月には、息子のお膳立てで、二人揃って長崎と雲仙の楽しい旅をさせてもらえてよかった。昨年は、高山を訪ね中村久子さんの遺品や遺稿を見せてもらい、お話も聞いて、両手両脚のない不自由な身でありながら、着物を縫い、洋服を編み、詩を作り、すばらしい字を書かれ、ただただ感動するばかり……。その上苦

悩の中から立ち上り、「ある、ある、ある」と自分の身のあることを喜ばれたことなど、とても凡人の私なんか脚下にも及ばない。努力すればあれほどまで出来るのかと感心しました。そして益々恵まれている自分、何かせずには……とかり立てられ今、精一杯頑張っています。

更生保護婦人会のお仕事(次代を負う青少年が健全に育ってくれるよう非行防止活動)

福祉センターへ、デイサービスのボランティア、独居老人宅への友愛訪問、お弁当配り、交流会また公民館の行事参加、聞法会等、いろいろ参加させてもらい、多くの仲間、いろんな人達との出会いの中、あれこれ学ばせてもらい本当に有難いです。これからも感謝の日暮しと共に、地域の人たちと手を携えて、明るい地域作りに頑張りたいと思っています。

第三の人生スタート

第十一期生文芸学科 馬 淵 尚 之

教職二十数年、社会福祉協議会勤務八年。この三月退職。六十八才。

肩の荷を下ろし春光^{ほしまま}恣

この句は、退職時の心境です。

そこで、第三の人生に向け今実践していることや、考えていることを二、三紹介します。

一、先ず健康であること

老化は足からと言われているので、私は毎朝六時三十分頃から約三十分。三島池からグリーンパーク山東一円にかけて歩くことを日課としています。勿論ゲートボールやグラウンドゴルフなど老人のスポーツにも親しんでおります。

二、趣味に生きること

父や叔父の感化を受け文芸の道に興味を持つことが出来ました。微力ながら三島文芸の講師をしたり、時には句歌会の選者を勤めたりしています。あちこちの句歌会に出向き雅友と歓談するのも楽しみの一つです。

三、夢をもちチャレンジすること。

幸い夫婦とも健康に恵まれているので国内は勿論、海外旅行をして、行く先々で珍しい風景や感動したことを句歌や俳画に表したり、おいしい料理を味わうことです。これが実現出来たらどんなにすばらしいことでしょう。夢を持つだけでも楽しくなっています。

自分の幸せは自分でつくる。絶えず前向きで、後ろを振り返ることなく、今を精一杯生きることが幸せに通じるものだと自分がいい聞かせ、これからの人生を意気込んで歩んでいる昨今であります。

杞 憂

第十一期生園芸学科 田 辺 一

オーストラリアのある島に、二十四羽の兎が放たれた。天敵もないので、その数はどんどん増え、島一杯になった。

そのピークになったとき、食物はすべて食べ尽くされ、やせ衰えて、病気になって、あるとき突如として、ほとんどの兎が死んでしまった。

宇宙船地球号の現在の人口は六十億人ほどである。今世紀後半になって人口は急激に増加し、とどまるところを知らない。

先進国は子供の数は少なく、自然と家族計画が進んでいるが中国では、一人子政策をとっているにもかかわらず、それでも人口は増加の傾向にある。開発途上国では、爆発的に増加しているらしい。

地球で生産できる食料でまかなえる人口は、およそ百億人程度といわれている。この数に達するのに、それほど年月を要しないであろう。

それに一方では、公害問題による環境悪化が追い討ちをかけている。科学者や為政者は、この悪化を必死で食い止めようと努力している。

過日、我々の利用できる淡水量は、あと三十年で枯渇するというショッキングな記事を読んだ。水は空気と同じく、我々の死活問題である。

食料も水も枯渇し、あるいは環境が極度に悪化した場合を想像すると、身の毛もよだつ。某宗教やノストラダムスの予言もこの時のことをいっているのであるうか。

地球上で人類が永遠に生き永らえるためには、これらすべての問題を一つづつ解決しなければならぬ。一つでもおろそかにはできないのである。

地球脱出も一つの方策で、宇宙船や他の惑星で生活する実験も、すでに行なわれている。現在生物の存在が確認されていない惑星でも、水や酸素を得る方法も研究中であるとか。

しかし、地球を脱出できる人間の数はどれほどになるであろうか。

こんなことを、あれやこれや考える毎日である。

陶芸の楽しみ

第十二期生陶芸学科 坂口淑子

老を卒業させていただき、早くも五年の歳月が過ぎました。引き続き碧水荘の陶芸教室で月一回学んでおります。

とても明るい先生のご指導のもと、多くの陶友達とみなで和気あいあい、楽しく数時間を作陶に専念し帰途に着く時の充実感。遠方からの往復も少しも苦にならず、次の研修日がはや待ち遠しい有様です。

また、地域の老人クラブ陶芸部に加入し、「陶芸は指先を使うのでボケ防止になる」などと冗談を言いながら楽しい時間を過ごしております。先輩の素晴らしい作品に感動し、自分の未熟さに情ない思いをすることが一歩ずつの前進につながると思ひ、自分なりの努力をつづけております。

拙ないものでも自分の手作りの味わいは格別、壺に花を生け茶碗で抹茶を点て、皿や鉢に料理を盛り、器のゆがみも世界にただひとつのものと愛着が湧き日々の暮しが何となく心豊かな

ものとなりました。

喜寿を過ぎても健康で、同じ趣味を持つ多くの友と楽しみながら、老いの道を歩む幸せを感謝し、やっと咲き始めた湖北の桜に心を和ませつつ毎日を送っています。右は新編を片づけた



高島支部

今津ボランテニアと私

第十二期生生活学科 弘部 ふみ

昭和五十七年六月県主催によるボランテニアスクールが開かれ、私達は五名受講致しました。稲葉光一先生の講義を聞き大変感動し、このまま解散したのでは意味がないと、その後直ちに「私達にも何か出来ることがある！」と意見がまとまり発足となりました。

内容については何回となく話し合いを重ね、翌五十八年一月十二日ようやく七名の同志を得て出発致しましたものの、心ばかり先走り予算もなければ材料もなく、以前から蒐集していた古切手の整理を手始めに、また民生委員の方の声を聞き現状を把握し、各自の発案を参考に検討しました。

第一回は大津小鳩乳児院を慰問見学致しました。その折、院長様の御要望により綿製のリュックサックを、また怪我をしないうように布製玩具をとのことで、持ち寄った服地等で大小三十

匹余のぬいぐるみワニを作り子供達に喜んで頂きました。そして若い頃のお召や銘仙、綿などを提供してくれる人もあって、子供用夜具の幾重ねかをお届けしたこともありました。

こんなことを何年かやっている時、町の福祉課からこの力を町内にとの申し出があり、活動の方向を町内保育施設に変え、次いで独居老人を対象に加えました。最近では若い人達は町外へ出て行き田舎には老人が残るといふ状態がめだち、高齢化の進む現在では独居者も増えています。今津町にも七十余人の対象者があり、その上次第に増加の傾向にあると聞きますので、私達もグループの増員を考え、現役退職者に声をかけ只今では十七名のグループ仲間が出来ました。毎月第二、第四水曜日を定例集会日と定め、心ある人の出役をお願いしてたゆまぬ活動を続けております。

冬には衿巻や足袋カバー、膝かけ、座布団など。夏には造花くす玉、風鈴などと、年二回程度の作品を考案してヘルパーさんを通じてお届けすることになっています。反応を次の作品の参考にさせて頂くことになって出来ることならお望みの物を提供したいと考えております。

このような次第で我々「ボランティアいまづ」のグループは限定された団体でもなく、あくまで自主的活動ですので、それ

ぞれの知恵を持ち寄り話し合いの上で作業を進めます。楽しい雰囲気の中で十年余り活動を続けておりますが、地味な活動ながら今津町に認めて頂き、ある程度の助成金も頂くようになりました。町内の清風荘、清湖苑等の施設からお声をかけて頂き、益々活動範囲も広がって発足以来年々発展を遂げている次第です。

やがて私達も通らねばならぬ道、そしてお世話になるであろう地域の人に、自分の元気なうちに貯金をするような気持ちでボランティアに励むこの頃です。

姓

第十五期生園芸学科 万木 伸

世の中には、どうしてもまともに読めないむずかしい読み方の姓がある。例えば東海林。子供の頃新聞のレコードの広告に東海林太郎の名がよく出ていたが、私はこれを「とうかいりんたろう」と読んでいた。また、近年新聞紙上に時に登場する学者に「暉峻」なる名にお目にかかるが、スムーズに「てるおか」と読める人は果して何人いるだろうか？

ところで、私の「万木」も随分雑誌の部類に入るのではなからうか。今は生まれ育った高島の地に住んでおり、これを「ゆるぎ」と読めない人はひとりもおらず、何らの不便も痛痒も感じることはない。

しかし、これが一步外へ出ると全く話が違ってくる。私は長い間故郷を離れて京都や大阪で暮らしてきたが、むずかしい名字ゆえの不便さは数限りなく経験してきた。

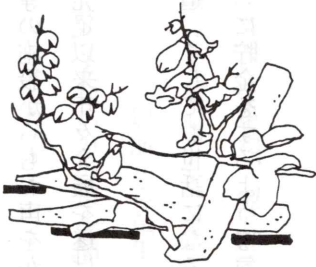
例えば、初対面の人に「ゆるぎです」と口答で自己紹介をしても「どんな字を書くんですか」と問われるし、名刺にふりがなをつけたらつけたで、「ほう／＼珍しい名字ですな。どこのご出身ですか？」など余分な質問にも出くわして、わずらわしい思いをしたものだ。

また、銀行や郵便局の窓口で呼ばれるときも必ずと言ってよいほど「マキさん」とか「マンキさん」で、いちいち訂正を申し出るのも面倒なので、たいてい「はい」と言って、そのまま用を済ませていたものである。

常時マスコミに登場するほどの政治家とか芸能人などの有名な人になれば、いくら雑誌でもその名は全国津々浦々にまで知れわたるが、「万木」については、かなり有名で人名録に掲載されているほどの偉い人もいるにはいるが、まだまだ世間一般に

通用するには程遠いように思う。

無名のままの人生を送ってきた私にとっては、これから先、猫でも杓子でも難なく読めるようにとびきり有名な「万木」が出てくれることを期待したい。



「日本新聞」編集委員のついで、演説会を目的に三朝新聞「翼」のついで、

「日本新聞」編集委員のついで、演説会を目的に三朝新聞「翼」のついで、

「日本新聞」編集委員のついで、演説会を目的に三朝新聞「翼」のついで、

「日本新聞」編集委員のついで、演説会を目的に三朝新聞「翼」のついで、

「日本新聞」編集委員のついで、演説会を目的に三朝新聞「翼」のついで、

「日本新聞」編集委員のついで、演説会を目的に三朝新聞「翼」のついで、

「日本新聞」編集委員のついで、演説会を目的に三朝新聞「翼」のついで、

「日本新聞」編集委員のついで、演説会を目的に三朝新聞「翼」のついで、

「日本新聞」編集委員のついで、演説会を目的に三朝新聞「翼」のついで、

大黒支店

史跡探訪

と対話して歴史の経過を語り、宣傳の歴史に努めていこうと、

共に「スボレク」の実技に励み、或は「スボレク」の歴史を語り、

「スボレク」の歴史を語り、或は「スボレク」の歴史を語り、

「スボレク」の歴史を語り、或は「スボレク」の歴史を語り、

「スボレク」の歴史を語り、或は「スボレク」の歴史を語り、

「スボレク」の歴史を語り、或は「スボレク」の歴史を語り、

「スボレク」の歴史を語り、或は「スボレク」の歴史を語り、

「スボレク」の歴史を語り、或は「スボレク」の歴史を語り、

「スボレク」の歴史を語り、或は「スボレク」の歴史を語り、



合巻

大津支部

有意義な人生を送る為に

第十五期生文芸学科 小泉 信 恵

平成六年レイカディア大学を三十人の方々と共に卒業させて頂いて以来、充互会が生まれました。会員の親睦を図るため集まっております。昨年暮には一泊で朽木温泉へ高島グループのお世話でくじ引き等をし、また皆で歌を歌ったり、とても楽しく過ごさせて頂きました。二月は近江八幡グループの会でお二方がマジックを披露されましてプロ顔負けの素晴らしい演技を見せて頂きました。老人ホーム等へも慰問に行かれるそうです。次回は四月坂本の寺院庭園めぐりを計画して頂きました。昭和五十九年大津に参りまして、何かお役にたつことをさせて頂きたいと思っております。

卒業後、介護の講習を受け、初級、家庭介護、地域リーダーについて学びました。平成六年六月介護者を支える会に入会して社会福祉協議会において勉強会を月に三時間程度行っております。

ます。

また電話相談の活動の中でお困りの方々にお話を聞いてさしあげております。昨年十月には障害者の方々の運動会のお手伝いに参加して、競技が終った瞬間の喜びの笑顔が今も目に焼きついております。お手伝いしてよかったと思えました。

電車の中、道を歩いても小さなボランティアが沢山あります。ある先生のお言葉の中で、「自分のことは後にして人のためになることを先にしなさい」と言われました。幼い頃母もよく言っておりました言葉で、「人様が喜んで下さることは進んでさせてもらいなさい」と教えられました。

今までの活動の中で生活実態をよく知り、生きる意欲を引き出して、お互い信頼関係をもち、人間の価値観を尊重することも大切かと思えます。

これからも一日一善の気持を持ち続け、ボランティアに精進したいと思っております。

合掌



ボランテァ活動に参加して

第十六期生スポレク学科 竹村秀雄

懐しの「レイ大」を卒えて第二の人生を有意義に過ごしたく
思いスポレク学科のボランテァに奉仕活動として参加し、幸
せに思っています。

ボランテァ活動に出役して、先ず先生が学生諸氏の学習実
技が効率よく進めていかれるために、出来る限りの負担が少
しでも軽くなるよう活動の手伝いを行っています。教科の「ダン
ス」の時には、レコードプレーヤを操作したり黒板に曲名を書
き込み「踊り」の時には学生諸氏がお互いにペアを組もうとす
る時点に相手が見つからない場合は、そのパートナーになつた
り「クラフト」の場合必要に応じて各種の教材やその他の準備
及び配分を行い「リズム体操」の時には用具の鉢巻、手旗等を
配り回収して学生諸氏の学習、実技がスムーズに運ぶように努
め、更に先生や学生諸氏に支援し、機会のある時には学生さん

と対話して意志の疎通を図り友情の強化に努めています。また、
共に「スポレク」の実技に励み爽やかな汗を流して皆さん達と
の出会いを大切にしてください。途中で意義深い語らいを喜びあつて感
謝し、日々充実して過ごしている今日この頃です。

今後においても「レイ大」で学んだことを糧にボランテァ
活動に参加したり、地域社会に貢献して二年間の学びが無駄に
ならないように微力ながら頑張っていきたいと思っています。



近江八幡支部

かんや目地蔵尊について

第十三期生文芸学科 古川 理 信

近江八幡市金剛寺町宮ノ後三一九番地に鎮座されている「かんや目地蔵尊」について不思議な御縁で今回の御堂修復事業に関係致しまして調査したことを誌上を借りて報告し、御縁のある方々の御協力を得たいと思います。

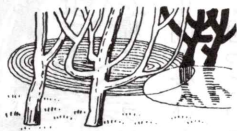
私は、この地蔵尊は当地出身の岩田太兵衛氏が全国の各観音霊場を巡拝し、地蔵尊建立を発願されたものと聞きおよんできました。

建立以来約百四十年余りが経ち御堂も老朽化が進み、重なる風雪害により損壊が進み、このままでは倒壊の恐れが生じる心配が出てきました。そのため町内有志が集まり「かんや目地蔵堂および池」の修復計画が話されるようになりました。特に、「かんや目池」についてはこの地蔵堂が建設された時に前の土地を掘り下げて土を盛り上げたところそこから一体の自然石の

地蔵様が出てこられ、下から泉が湧き出て池になり、この清水を汲んで供え、その水で目を洗うと眼病が治るといい、また幼児の疳虫にもご利益があると言いつい伝えられ「かんや目池」「かんや目地蔵」と言われるようになったと聞いています。

この信仰の厚い地蔵堂や池がこのままでは消滅する恐れがあると心配して関係者が集まって修復の方法等を相談している時に偶然町内の岩田宗平氏宅から安政二年九月八日の「カンヤメ地蔵大菩薩寄進附目録」が発見されました。

当初、心配されていた募金の計画が全町に呼びかけが出来るようになり、誠に世の中には不思議なことがあると身をもって知った次第です。



友愛活動

第五期生生活学科 松本とみ

我が国の総人口に対する六十五歳以上の高齢者の比率は、十四名を超えて、国や地方自治体においても、いかにして高齢者が安心して暮らしていけるかといったことに努力されています。私達も尚一層健康にと心がけねばと思っています。

私は、昨年度から八日市市南部地区の友愛活動推進委員として、社会福祉の向上に及ばずながら微力を尽くしております。旭町老人会の方々と、毎月の例会には色とりどりの食品で珍味なお弁当を手作りして、病弱な方や一人暮らしの高齢者の方々の訪問し、お届けしています。「どうしておいでですか」「お変わりありませんか」と、ねぎらいの言葉をかけ、ひとときのお話をしています。また、今年の二月九日には、南部地区の老人世帯、独居老人の方々を南部公民館にお招きして、ささやかな昼食会（ミニ宅老）を四名の推進委員と共に実施致しました。

足の悪い方は車で送迎をし、お一人で来て下さる方は、それぞれ足どりも軽く多数参加して下さいました。また、身体が不自由で来られない方には、お弁当をお届けしました。参加の皆様は、うちくつろいで、談笑のひとときを過ごしていただいたり昔なつかしい「ふるさと」「赤とんぼ」「どんぐりころころ」等の童謡を参加の皆様と私達も一緒に大合唱をして拍手喝采し幼い頃の思い出話に花が咲きました。

このように、会員の協力により一つのことを成しとげることができました。私自身も高齢ですが、達者な間は、これからも積極的に高齢者の福祉活動に取り組んでいきたいと思っております。長寿社会となった日本は、病弱な方、寝たきりの方、独居の方もまた増加し、介護援助が待たれる昨今です。社会の弱者に愛の手をさしのべて、心身共に充実した老後を生きることに、また、私達の社会参加であると思う今日この頃であります。

歴史探訪

第八期生園芸学科 竹村善二

去る三月十六日(土)「滋退教」八幡、蒲生支部主催で歴史探訪

がありました。

十時より近江八幡市立資料館の見学、近江商人が天秤棒を肩に全国津々浦々にまで、その足跡を残したとはいえ一時期とは言いながら日本の経済界に大きなインパクトを与え、日本を代表する商業集団として、わが国の経済史の中に名を留めた。当時の遺品が会場一杯各コーナーに分類して展示してあった。

次に隣りの西川利右エ門家旧宅を見学しました。部屋数二十余室の旧西川家の住宅、その造りは京風で統一してあり、一見華奢な感じに写るが各所に落ちついた風雅と剛健な趣を残している。また土蔵が三階建であることで、全国的に見ても珍らしく、往時の西川家の隆盛を偲ばせる立派な建物でした。その後白雲閣の見学をしました。

午前中の最後の研修地、かわらミュージアム本館入口の通路は瓦で美しく敷きつめていた。入館してびっくりしたのは、大きな手造りの鬼瓦が館内狭しと陳列してあった。瓦で常設展示の町並の魅力を紹介、空間メインとして、さらに視野を広げて日本および世界各地の瓦、瓦屋根の連なる町並の景観の多様性など実物写真などで紹介していた。

昼食はびわ湖が一望できる坪清でとる。

天下の奇祭として知られる八幡祭。観光客一杯、約十三基前後の左義長奉納、赤い炎を赤いテーマで広げ、その下に各区より左義長の顔といえる存在、今年の干支などをモチーフに趣向を決め作られていた。豆、寒天、ひじき、するめ、穀類、野菜等を素材として立派に作りあげていた。踊り子によってかつがれ、前後の綱は町内の子供が引っぱっていた。また総神役や警固の役員がつき踊り子達は「チョッサ、ヤレヤ」と言って囃し拍子木の音が響き左義長の巡行は、市内へと流れていった。

木地師のふるさと

第十一期生文芸学科 河 並 一 郎

木地師とは

輻轡ろくろを使って椀、盆、駒、こけし等を作る人或いは杓子や木の曲げ物、また漆器を作る人達のことをいい、特に輻轡師達は良質のトチ、ブナ、ケヤキ、サワラ等の木地材を求めて深山に入り、数戸の人達が共同して家族と共に仕事をし原木が尽きると他の山に移るといふ漂泊の生涯を送る人々をいいます。

木地師の発祥と奥永源寺

全国の木地師の多くは自分達の先祖は小椋谷（奥永源寺お池川に沿った谷）から出たものであると信じており、また木地業の職業神として小野宮^{これたか}惟喬親王を祀っている。惟喬親王は五十五代文徳天皇の第一皇子として生れながら不幸にして帝位につけず、流離の末小椋谷に入り出家されたのだが、読経している時経軸から連想され轆轤を思いつかれ、木地を挽く業を村人に教えられ小椋谷の人々は木地挽きを生業とするようになり全国に散らばっていったという。

これは他にも例のある貴種流離にちなんだ伝説のひとつであるが、それにしてもこの谷に由緒が生まれる何等かの事実があったのではなからうか。

行程案内

時期としてはもみじの季節の混雑を避けて五・六月の若葉青葉の頃か、もみじ前の九・十月頃が適当と思われる。

永源寺からダム湖岸を遡ること約八キロで銘茶所政所に着く。ここから愛知川源流お池川に沿って小椋谷を辿る。箕川から蛭谷へ約三・五キロ数戸の小字であるが、ここに筒井神社、帰雲庵と木地師資料館が隣接してある。さらに二キロ峠を登りつめるところに惟喬親王御陵と筒井千軒と言われる集落跡に辿りつく。往時を偲んで散索する。車を引返して最も奥地の君ヶ畑へ

四キロ、ここには大皇木地祖神社と高松御所「金竜寺」が祀られている。四十戸足らずの字であるが、往時を偲んで屋敷跡を散策し村人の昔話に耳を傾けるのも楽しい。

〔資料館、社寺等事前申込要（町役場を通じ字区長宛）〕

ボランティア活動

第十一期生生活学科 浅原 ツタエ

十五周年記念おめでとうございます。月日の流れるのは早いもので米原校が出来た時の初めての入学生で、また米原校第一回目の卒業生です。記念すべき年でした。現在はレイカディア大学になりました。いろいろの知識を得て卒業を待っていたように老人会の婦人部長の命を受け、能登川町の婦人部の行事として女性リーダー研修会、寝たきり老人関心等の友愛運動、ボランティア活動でなければ出来ないことと思えました。

現在では「ボランティアグループ友の和」と「ボランティアであい」の両者に入り、人のため自分のために思い加入しています。「友の和」の方は町内にある施設「能登川苑」車椅子で生活しておられる人が多いです。私達のボランティアは第一月

曜日は集まって話し合いや小物作りをして計画を立てる。二月曜日は能登川苑へ訪問して歌に合せて軽く手足を動かす運動をしてもらいます。また年二回ほどは着物をつけて踊りを見てもらいます。江州音頭の総おどりをしてお年寄りの心が和むようにしています。施設に入っておられる方々はこれが一番喜んでもらっています。「ボランティアであいい」は公民館で二ヶ月に一回、小学校低学年対象で学校の休みを利用してアニメ映画を上映しています。こちらは子供が小さいので親同伴して下さいます。また一人暮らしのお年寄りも見に来て下さいます。ピラ作りからまたピラ配りを手分けして配布。私も出来る仕事に責任をもってさせてもらいます。会員の皆さんと力を合わせて社会のため、福祉活動にボランティア精神がなければ全う出来ないことを経験しました。

昨年の阪神大震災の災害にも多くの犠牲者の方々はお気の毒なことです。ご冥福をお祈り致します。古稀を過ぎた私達にはどうすることも出来ず直ちに義援金を集めてお届け致しました身体の続く限り何かのお役にたちたいと思います。

OBの皆さん、いついつまでもお元気で暮らして下さい。

ボランティア

第十四期生芸学科 水谷 志津

月二回月曜日はグループで（十名程）ボランティアに出かける。殊に二月曜日は老人ホームへ出向く日である。玄関に入り集会場をのぞくと車椅子が並び私達を待っていて下さる。元気な人は入口まで出迎えて手を握り嬉しがって下さる。

この能登川苑は重度の方が多く、寝たきりや車椅子が殆んどで自力で歩ける人はごくわずかで手伝うことはいくらでもある。風呂の着脱の手伝い、ご飯をスプーンで口へ運ぶなど……。都合で今日は欠席という訳にはいかない。責任をもって手伝わなければご迷惑をかけることになる。

一年間試した結果、話し相手や遊び相手という所へ落ち着いた。三十名位の方々と午前中を一緒に過ごしている。初めはお手玉を作ったりもしたけれど、この頃は手や首を動かして軽い体操のような運動をして後は童謡や昔なつかしい歌を歌ったりおしゃべりをして過ごすことにしている。軍隊におられたお爺さんはやはり軍歌で「ここはお国を何百里……」は最後まで大

声で後のみんなも一緒に大合唱となる。昔までお祭りを見ても

年中行事の一つとして、盆と年の暮れにプログラムを組み、演芸大会をしている。会員の中にはその道のベテランもおられ踊りや民謡など衣裳を着けて披露することになっている。その他大勢の私達は江州音頭や炭抗節などの特訓を受けて、入所者の元気な人達も一緒に輪になり、しばし楽しいひとときを過ごすことにしている。

このボランティアがいつまで続けられるかわからないが、私達のグループ「友の和」が一年でも長く続けていけるように健康に感謝しながら頑張っていきたいと念じている。

友 愛 活 動

第十四期生生活学科 河 瀬 千 工

戦後五十年が過ぎ、高齢化社会となり、高齢者同志お互いを助け合う時代となりました。

そこで老人クラブ会員が、独居病弱障害等の高齢者に対する友情活動を推進することにより、高齢世代間の連帯意識を高め相互助け合いの絆を深めると共に、生きがいの高揚と社会参加

活動の促進に資することを目的として、友愛活動が実施されましたことにより、私も平成三年友愛活動協力者として、何回かの講習を受けシンポジウムにも参加して他の市町村の活動を勉強して参りました。

富山県の井波地区へも研修に行き、感心させられました。

さて、自分達は何から取り組めばよいのか、不安と戸惑いばかりでした。同世代の仲間が、何らかの手助けを必要とされていないか、その人達はその地区で楽しく自立していけるようなお手伝いができたらと念じつつ、声かけ運動から始めました。

「今日は、お元気ですか！」一人暮らしの家なれば、朝雨戸が開いているだろうか、夕方になれば灯りがついていいるだろうか、ちょっととした心遣いが必要だと思えます。私達の地区では足の不自由な人、病弱な方、家にこもりがちな人達を公民館にお連れしてお楽しみ会をしております。茶話会をして楽しくおしゃべりをしたり、食事を一緒にしたりして喜んで頂きます。

「次は何時来て下さるの」と要求もされます。三月三日の雛まつりに友愛協力者が集まり、桜餅を作りメッセージを添えて独居老人、寝たきり老人、家にこもりがちな人、夫婦でおられるも、どちらかが何かの傷害を持っておられる人達、民生委員さんの手の届かない方達にお届け致しました。大変喜んで頂き

ました。こうしてお世話させて頂ける自分は、この上ない幸せと感謝しつつ、今後も友愛活動を続けたいと願っております。

ボランティア活動

第十六期生生活学科 中西 春子

四年前から、私は町内のリハビリ教室のボランティアに協力させて頂いております。

今日も明るい顔で、みなさんと出会うことを祈りながら、粉雪の舞う中を自転車で健康センターに走ります。

センターの玄関では、元気な顔で嬉しそうに手をふりながらバスから降りてこられます。私達は手を添えて案内をしますがどの人も、この日が待ち遠しいようです。

室内に入ると、保健婦さんの血圧測定が始まり、リハビリの体操や、リズム体操など、とても楽しく運動をされます。お互いに童心に返って、笑顔をかわしながら、またたく間に三時間余りが経ってしまいます。

それぞれに、次回の日まで別れを惜しみながら、帰途につかれます。私達ボランティアも、この幸せそうな様子を見てい

ると、心からボランティア活動の喜びを感じ、「どうか来週も元気で来て下さい」と祈らずにはいられません。

私は、ボランティア活動に参加することを「生き甲斐」と考え、また人様のお世話を出来ることを幸わせに思い感謝しています。健康な老人は、ボランティアの重要さを十分に理解して老人らしい社会奉仕を一日も長く続けていきたいと考える今日この頃です。



湖北支部

通勤は運動靴で

第十一期生スポレク学科 影山 治市

人はみな三度の食事がおいしく、元気で生活できることを願っています。しかし家庭や社会で起る問題や病気などで悩んだり苦しんだりすることが多いものです。私は週に四日、長浜から京都に通動している。小さな職場であるが、ここも小さな社会、いろいろな問題に直面する。そのたび前向きに取り組むこと、弱気にならないことを心がけています。

最近、力強く勇気づけられる本が出版されました。この本は「脳内革命」という本で、著者は医者の方山茂雄氏。

人間は常にプラス発想していれば、脳から出るホルモンが生き方を変えるものである。

その一 病気になるのはおかしいというプラス発想、人は年をとっていけば病気になるって当然と思っているのは間違っている。

いつも明るく前向きに生きていけば脳の中のホルモンが出て若さを保てるものである。

その二 最低一日五千歩歩くこと、歩きながら楽しい発想をすること。過激な運動よりストレッチ体操とか歩くなど軽くて持続的な運動をすることにより脂肪を燃焼させ、筋力をつけることができる。

その三 平均寿命が八十歳になって人は、「長生きできるようになった」と言っているが、人間の寿命は本来もっと長いもので、百歳はらくらく超えて生きられる。これが生物としての普通の寿命なのである。

というようなことを、病院長として臨床的な経験から書かれている。これは健康上のことだけではなく、生活のすべての基本だと思います。マイナス思考になりがちな我が身を省りみて明るく感謝の心で、常にプラス発想を続けて、元気で長生きしたいものと念じています。

大義の士 石田三成公

第十三期生文芸学科 北澤 清太郎

今、長浜は秀吉博で湧いている。NHK大河ドラマ「秀吉」にあやかってである。

その秀吉の家臣で豊臣家に殉じた石田三成は長浜出身である。

●四十一歳で殉じた三成公

永禄三年（一五六〇）石田の村長、石田藤左衛門の三男として出生。十五歳の頃、秀吉に仕え、以後二十六年間、秀吉の天下統一事業の影の企画、推進者として尽瘁。秀吉歿後、豊臣家存亡の関ヶ原合戦で、西軍の大將として奮戦、味方の裏切りで敗れた悲運の武將である。

●三百年余、歴史上から抹殺

勝利者であれば豊臣家の柱石天下統一の功労者と賛えられ英雄扱いされたが、敗將、しかも戦いの相手徳川家が以後天下を牛耳ること二百七十余年。その間三成公は奸佞邪智の人物として捏造され佐和山城、墓石まで破壊。徹底的に歴史から抹殺されてきた。

●明治末期、名誉回復

明治四十二年、朝吹英二氏等の肝入りで、東大史料編纂室長の渡辺世祐博士が徳川時代に埋もれ歪曲されていた人物として足利尊氏、石田三成等の史実を調査確認し、稿本「石田三成」で、偉大な人物と正當に評価し、郷土史家中川泉三氏、近藤元県知事等も滋賀県の偉人は僧最澄、小野妹子、石田三成、井伊直弼であると顕彰された。永年史上抹殺されていたため文書、

遺跡の資料が殆んど影滅されていたが、その後の三成公顕彰会

活動で公の風貌、輪郭がつかめ、全国各地から石田家子孫を名乗られる人が出てきた。不十分であるが以下、

●三成公の事蹟等を記す

十五歳の頃横山東麓の名刹観音寺で修業中、立ち寄った長浜領主羽柴秀吉に三碗（温）の茶で仕える。

□長浜時代四百石で宮川（大通寺付近）を領有。豪將渡辺勘兵衛を同禄で家臣とする。

□秀吉の近習、伝奏役として中国地方に転戦。大谷吉継を秀吉に出挙。

□二十五歳頃賤ヶ岳の合戦で秀吉大垣進出時、先兵として北脇往還沿いに兵糧調達。擬装兵で柴田勢を欺き、秀吉の大返して功あり。敵を敗走させ「三成は百万の力」と秀吉より賞詞。

□説得、和議で秀吉天下平定の礎をつくる。

□二十六歳の若さで五奉行筆頭塚、博多奉行として秀吉の天下統一事業の企画、推進で貢献。

□太閤検地の総奉行として全国各地の検地を推進し天下統一の礎を作る。

●三成の人となり

□ 旗印「大一大万大吉」の吉祥紋を掲げ、民に愛され明るい政治を心がけ九ヶ条、十三ヶ条の掟より民主的に治め三成死後も慕生まれ各地に三成地蔵として祀られている。

□ 己に厳しく民や家臣を大切に重用（島左近等）大谷、小西、佐竹等の友情を大切にした。

● 広く文化人と交遊

海北友松、書の是齊、高僧、澤庵、円鑑、木食上人、茶人、宗室、宗庵、儒学者と交わる。

● 宗教心篤く各地に寺院

高野山奥の院に経蔵（重文）大徳寺一三玄院、妙心寺に父のために寿聖院、佐和山一母のために瑞岳院（焼失）等を建立。

● 和歌にも長じていた文人

春ごとの頃しもたえぬ山桜よも霧島の心ちこそすれ（巖島）

散り残る紅葉はこといとはしき秋の名残はこればかりぞと

筑摩江や芦間に灯す篝火とともに消へゆく我身なりけり

（佐和山城）

ボランティア活動の出来る喜び

第十三期生スポレク学科 中川 しげ子

昭和五十五年日赤奉仕団役員さんの呼びかけで十五名が日赤長浜病院でボランティアをはじめてから十七年が経ちました。

ただ今では総勢四十四名が一ヶ月に各々二、三回出勤して、朝八時半から十二時まで汚れたガーゼや包帯の洗濯をしている人が二十一名。ボランティアが来るまでは使い捨てにしていたのが再利用でき、経費節約と資源愛護になると大変喜ばれております。また、動けない患者さんの入浴の介助をしているのが九名で、暑い時、寒い時はなかなか大変な仕事です。私がやっておりますのは玄関で受付事務のお手伝いで十四名です。初めて来院された方に申込書の書き方や次の診察日の予約、見舞客の案内、車椅子の手配など休む間もありません。その都度わからないことが出て来て職員さんを煩わす始末です。

超スピードで高齢化が進む今日、老人即病気とは限りませんが、若い人に比べ比率は高いと思います。以前から介護のセミナーやシンポジウムは度々開催され啓発されていますが、なかなか進んでいないようです。私も今、出来ることを少しずつでも確実に実施し、微力ですが常に元気でボランティア活動に参加できることに喜びを感じつつ精励致しております。

大津支部

塞翁が馬

第五期生文学学科 村川 増治郎

既知のお方は、過去を回想して下さい。始めての方は余生の人間訓としていただくと望外の喜びです。私は日頃辞書を傍にしていますので参考までに、手元の辞書ごとに挙げてみました。

旺文社標準漢和辞典

塞翁が馬 人間の幸・不幸は前もってわからないというたとえ

― 人間万事塞翁が馬 (一一九)

― 人間 人間万事塞翁が馬

人生の運不運は定めのないものだというたとえ 禍福はあざ

なえる繩のごとし

故事 国境の塞とらで近くに住んでいた老人の馬が逃げたが、その馬

が良馬をつれて戻ってきた。やがてむすこがその馬に乗り落馬して足をくじいたが、そのために徴兵をまぬがれ戦死しないですんだという。淮南子えなんし

三省堂広辞林第六版

塞翁が馬(連語) (淮南子人間訓にある。塞翁は昔中国北方の辺境の地に住んでいたという老人でその禍福が持ち馬をめぐる転々と変ったという故事)

人間の幸・不幸や運命のはかり知れないたとえ「人間万事」
角川新装版国語中辞典

塞翁が馬(「淮南子」人間訓)

人生の幸・不幸が変りやすいたとえ。とりで近くに住む老人の馬が塞外に逃げたが、やがて北方の良馬を連れ帰り、その子がこれに乗り落馬してびつことなり、それがまた幸いして兵役を免れたという故事による「人間万事塞翁が馬」とも

角川国語辞典

塞翁が馬 (昔中国の北境のとりで近くに住むおきな飼っていた馬が逃げそれによって、さまざまに幸いと災いが起ったという故事) 人生の禍福の定まりのないことのとえ「人間万事」
― 以上

何れの辞書も似た説明となっていて、人間訓として大いに参考になるものと思ひ貴重なる紙面をお借りしました。

人間万事 ― 塞翁が馬のたとえを大切に余生たのしく参りましょう。

老いるとは

第六期生文芸学科 橋本明枝

卒業後早くも十余年を経て、私も八十歳の坂を登り始めた。本年は殊の外大雪に見舞われ老いの身にはひとしお辛い毎日である。庭の老松も大雪によく耐え凜として青い葉をつけ、赤く実った南天も地を這うようになっていたが、また頭を持ち上げてきている。例年なれば実南天を目当に小鳥がやってきて、アッと思う間もなく食べ尽くすのに、本年はまだたわわに実をつけている。寒いので小鳥も里に下りて来ず、じっと身をひそめているのか、或は小鳥が少なくなってしまったのだろうか。早起き雀の鳴き声が聞えない。

阪神大震災の後遺症、薬害、住専、宗教問題等々騒がしい中老人は如何にあるべきかを考える昨今である。

身近な人が怪我をして入院された。同年の友人が亡くなったと聞きながら八十路の身には、足、腰も弱りはじめた今、遠出も思うにまかせず、心ならずの失礼をしていて、まこと怪我の一日も早い快復を、また冥福を遙かに祈っているのみで何の役にもたてない自分が恥しい。

昨年大津市立伝統芸能会館が誕生し、京都の観世会館のような立派な舞台もあり芸能の館としてまことに嬉しい限りである。

私も未熟ながら新年の謡曲会にその末席に臨んだ。老人には声を出すことは健康にもよく爽やかな満足感を得る。やがて桜も開花しはじめる。三井寺の鐘を聞きながら窓の花をめようと六期文芸つせんの会、有志で久方ぶりに小会を持ち、お互いの無事を確かめあいたいと思っている。

今後の課題は平凡ながら一番大切なことは、

一、怪我をしないように、

一、命の終るまで自分のことは自分でする努力を。

家族に迷惑をかけないで終着駅につつがなく到着したいものと願ってやまない。

大雪に凜として耐ゆ老の松実南天雪に赤きを隠しおり

野球

第八期生文芸学科 吉田歳末

生来、スポーツ競技特に野球を見るのが好きで、十代の頃大阪の船場で奉公していた時、よくサボって喫茶店で早慶戦のラ

ジオに熱中していた。

戦前、戦中はずっと武庫川尻にあった（当時は兵庫県鳴尾村）海軍系の川西航空機に勤務。毎日甲子園口から甲子園球場の前を通って自転車で通勤していた。春、特に夏の高校野球大会には、会社の休暇をためて連日の球場通いで真っ黒になったものだ。やがて戦時色濃く野球は禁止。あの頃勤労働員で会社に来てきた若林監督率いるタイガースの選手達の野武士的な風貌が今でも目に浮かぶ。

鳴尾本社も疎開先の宝塚工場（現在の阪神競馬場）も爆撃を敗戦直前に受け全壊。住居も被害を受け、仕方なく妻の在所の岐阜に移り住み、以来三十年間暮らすことと相成った。附近に野球の名門岐阜商業があり、OB達が中心となって用具不足の中、素早く野球復活。荒れたグラウンドへよく練習を見に行った。その甲斐あって、都市対抗では何回か優勝した。岐商出身の選手がドラゴンズに入団した。後援会の皆さんとナイターバスでよく中日球場へ出かけ、勝っても負けても帰りはビールで乾杯であった。この選手は現役の後、先年まで監督をやっていたが鳴かず飛ばずで退任した。

プロ野球のテレビ観戦で、好きなチームが勝てば気分が良い。なぜ好きなのか、いろいろあるが監督の人柄が大きな理由だ。

テレビではベンチで監督が一喜一憂する様子を克明に写し出す。それを見るのも楽しみの一つで、さすがと思ったり、たいした男じゃないなとか、良い勉強になる。やはり下積みを永らく体験した人間味豊かな監督のいるチームが私の性に合う。

生れは愛媛、大阪に三十年、岐阜に三十年、そして今、大津に二十年、気の合う友人と語り、本を読み、大津絵を画き、嫌なことはやらす、好きなことには精を出し、出来るだけ外の空気を吸う。マア こんなところ デスワ。

三月二日の想い出

第八期生陶芸学科 田 辺 博

毎年三月三日になると苦い想い出がよみがえって来る。顧みると五十三年前、即ち昭和十八年三月一日ラバウルを出航した八隻の輸送船は当時戦況不利になってきたニューギニア戦線の友軍救援にダンピール海峡を西に航行していた。三日目今日上陸という三月三日早朝グラマン百機の急襲を受け、あつという間に海中に投げ出され、気がつくやうに筏にすがりついていた。あたりには輸送船団の姿は既になく、海上一面筏や木片につかま

って必死に泳いでいる将兵の姿があるばかり、その時また二回
目の空襲、今度は海面すれすれに飛んで機銃掃射を浴びせられ
逃がれるすべもなく全く生きた心地ない阿鼻狂乱の光景を呈し
ただ運を天にと漂うばかりだった。やがて静かになった海面に
は、まだかなり浮かんでいる姿が見られた。やがてどこからと
もなく「海ゆかば」の歌が聞えてこれに合唱した時は正に悲愴
そのものであった。その時私の脳裡に浮かんだのは、今日は三
月三日だ。この日は長女の誕生日。生まれて六ヶ月目に別れて
二年。もう大きく育っているだろうと思うと不覚にも涙が出て
きた。昭和十六年七月十五日召集を受け伏見の工兵隊に入隊し
た日、母親に抱かれて見送ってくれた吾が子がちょうど宮門を
くぐろうとしたとき、急に大声で泣き出し、その泣き声を背に
征途についた。その泣き声が聞えてきたのである。何時間こう
していたらどうか。誰かが友軍の駆逐艦だと叫ぶ。いったん退
避した駆逐艦が三隻救助に来てくれたのだった。思わず万歳の
声があがった。收容されて気がつく腕が痛い。爆撃のときや
られたらしい。治療を受け、ラバウルに引返すとすぐ野戦病院
に入院させられた。当時南方地域では風土病である Deng 熱、
マナリア熱が猖獗し患者も連日四十度を越える状態が続いた。
高熱が下がり平熱に近いときは、誰が口ずさむか「誰か故郷を

想わざる」の歌が流れていた。この時の情景が、毎年桃の節句
が来ると苦しい思い出としてよみがえってくるのである。

ちなみに私は、昭和十六年七月二十日、京城郊外水色におい
て編成完了した独立工兵第二十三聯隊に属し、開戦と同時にマ
レー半島シンゴラに敵前上陸、シンガポール攻略戦、比島バタ
ン作戦、コレヒドル島攻略戦を経て満州へ転戦し船舶工兵第八
聯隊に編成され、再度南方戦線に参加して敗惨。

山ゆかば草むす屍と死の淵をのぞみしわれやようやく八十路
海ゆかばの歌に偲ばるみんなみの海に沈みし戦友らの武勲

小さな盃と徳利

第九期生陶芸学科 藤 井 孝 一

各地を旅行した折に、土産物というより、むしろ記念に盃を
買ったのがきっかけとなり、いろいろな盃が集まりました。そ
れがいわば日本各地の焼物の見本という所です。盃のいいこと
は小さいことと手頃な価格、しかも各地の土地柄が出てあり、
集めてみると楽しいもので、買った當時を思い出す。そのなか

ら晩酌の時に適当に選んで飲んでいますが、手酌でやるせいかな、どうしても大振りのものを使ってしまう。いわゆるぐい呑みです。

手にもった感触と、唇にふれる感じや、酒の色も楽しむのは、薄手の白磁の方が良いのですが、そんな盃は少し改まった時のことで、あまり使いません。

普段着の感では、民芸調でその方が落着きます。四季折々の風情にあわせて、ガラス、塗物、金属の盃を使います。今もつとも使うのは、萩焼の乳白色に少し赤味の模様になった、厚手のもので酒が入った時、バランスがなんとなく良く、つい口に運ぶ盃です。

徳利は備前焼で酒がしみこんで、程よい照が出るようになり夕餉の伴侶になっています。温かい日本酒を差しつ差されつつ気の入った盃で飲むというところを見直して欲しいと思います。また、そんなことが大切なことではないかと思っています。

大学を卒業して

第十期生園芸学科 神戸 一重

平成元年九月二十五日卒業証書を頂いて七年、本当にあつと言つていいほど日の過ぎるのが早くて八十四歳を迎えました。お陰様で病気をすることもなく日々元気で過ごしております。学友もお一人だけ亡くなりました。在学時から若いのに体がお弱く本当に早く旅立たれ淋しくなりました。

大津市を中心に東西南北からのお友達とご一緒に勉強が出来幸せでございました。先生にも今だにご厚誼を頂いております。クラス会も年二度園友会の集いとして各地域でお世話してもらい久方ぶりのお話やら思い出やら時間の過ぎるのも忘れます。

大学でゲートボールを教えてもらい、その楽しみを続けて毎日毎日練習に行っております。支部に六チームあり、その二チームが女子で試合にも張りきって出ています。

初音聞きタッチボールの空高く

一人暮しも淋しかろうと知り合いの方から犬の赤ちゃんをもらって太郎と名づけ、朝夕の散歩も一時間ぐらい自分の運動にもなり、彼氏が待っているからとバァバァの言うこともよくわかってくれ楽しい日を過ごしております。

犬と吾靴音しかと今朝の霜

沢山の友達に恵まれて幸せな日を送り感謝しております。

ひとり居に重きが嬉し賀状かな

またその土地の名所拝観等も何よりの勉強になり至福のひとつ嬉しゅうございます。この三月十九日五個荘町で園友会のお招きを頂いており楽しみにして待っております。若い頃から植物が好きでそれも山野草、自然の花が大好きで松の十センチ位の苗を植えたのが回り三十センチ、栗の実を土に入れて何十年か、これも回り一一八センチ家の屋根よりも高く育ちました。

落栗や瓦を叩く音たしか

県の植物同好会に入れてもらい月一回の勉強会、先生、友達とご一緒して県内県外へと行っております。

若狭路や近江にあらざ雪見花

廃家あり倉に神社に山桜

無駄のない人生

第十期生園芸学科 平田正善

今日の若い人の生き方を見ていると彼等は何を考へ何を目的に生きようとしているのか、そのことが気がかりです。彼等は戦後に生まれたのですから戦争の怖ろしさや敗戦の苦しみを知らずに大きくなりました。戦争以前に生まれた親達は自分の受

けた戦争中の苦しみや、物質的にみじめな暮しだけは子供に味わせたくないという親心から、我が子が望むままに出来るだけ自由に甘やかして子育てをしてきました。そのかわり親は我が子に向って有名校に入学して偉い人になれ、沢山お金の入る職業につけと教えました。私の育った昭和初期は不景気な時代で満州事変から日中戦争と第二次世界戦争となり、庶民の生活は決して楽なものではなかったのです。従って家庭生活においても母親から物を粗末にしてはならない、お米はお百姓さんが汗水たらして作られたものだから有難く押し頂いてから食べるように教育されました。着物は正月とかお祭り以外は新しいものは着せて貰えなかった。昭和の初期は学校も小学校は義務教育でしたが、田舎では中学校や女学校へは金持ちの子弟が行くところで、殆んどは小学校を卒業すると男子は店員、女子は女中奉公に行くのが普通でした。その頃は物質的には貧しかったが、男子は立身出世を夢見て希望に燃え、女子は嫁に行くための資金を稼ぐことに精を出しました。男も女も一日も無駄なく働いたのであります。私達は老人になっても社会人として自分の選んだ学問を土台に、更に目的を大きく持って仕事を通して理想の実現をはかる生き方をしてこそ、この世に生れてきた甲斐があると信じます。私は仏法を信じ家業の傍ら各種団体の小使役

を奉仕して自分の信念に向って生きたいと思います。和讃に「本願力にあひぬれば空しく過ぐる人ぞなき」とあります。

合掌

齡七〇は古来稀なるや

第十一期生文芸学科 門馬三郎

今年七〇歳になる。私の子供の頃は、日本人の寿命は今ほど長くはなかった。六十まで生きていることは珍しかったから、その歳になると「還暦」と称して大騒ぎをして祝ったものだ。今の六十歳の人は、現役のバリバリで、人生の区切りとか、隠居するとうような気には到底なれないだろう。

ましてや七十歳まで生きるのは大変な長寿だったから、「古稀」つまり古来稀だと称した。男性の平均寿命が七十六歳となった現在、齡七十は「古稀」と言えるだろうか。

年齢が四十・五十・六十と年代が変わる時には、体調・人生観・家族・仕事などに変化があるので、このような代変わりの時には注意をしなければならないという。特に六十代から七十代に乗るのは通常の加齢とは少し違う。今まで、私が見てきた先輩・同輩諸氏の様子では、六十九歳を乗り越えることは難し

さを伴うようだ。だが、七十代に入れば、また順調に人生は過ぎて行く。

若い頃は、七十歳の人は、たいそう老人に見えた。今、私自身はその歳だが、周囲の人々は「大変な年寄りだ」と思っているのだろうか。今や私は古来稀なる存在なのか？

自分では、まだまだ若く発らつとしていたつもりだ。年相応に老成したとは思えない。まだまだやる気も闘志もある。世間に対し欲気も色気もある。昔、自分が見た七十の老人とは大違いだ。そういう点では、私はまさに「稀なる老人」と言えるかもしれない。

冗談はさておき、自分の感覚では、今の年から十を引いた年齢が昔の人のそれに当たるような気がする。だとすると今の私は六十歳ということになる。果たしていつになれば、枯れた人々から尊敬を受けるような、いわゆる「古稀」の好々爺になれるのだろうか。

(昭和三十年頃の話。義兄は医療関係者だった。足の小指の横のタコになった部分をはさみで切っていた。「切らずにおくと、靴ずれになる。タコが体内に出来る」と癌だ。私は癌で倒れる可能性が大だ」と話した。当時は癌は今ほどの普遍性はなく気にもせず聞き流していた。また定年後、人生七十の坂を越え

ることの困難さを語っていた。それらは冗談でもあったが、予測どおり六十九歳で癌系の病で亡くなった。この記憶が本稿を書くと下敷きとなった。

一 狐裘三十年

第十一期生文学学科 小澤 進

中国のその昔、春秋時代の齋の名臣、晏子の故事『一狐裘三十年』は『礼記』を出典とするそうであるが、私は、『十八史略』で知った。それによると、彼は極めて節儉力行の人だった。それで、『一狐裘云々』は儉約の模範を示す言葉にされているという。

さて、そういうことになる、張りあうつもりはないが、私にだって、三十年以上も経った背広があるし、それなりの苦勞話もあると言いたくなってくる。

私の青春時代は終戦直後で、当時は社交ダンスが全盛であった。私も落ちこぼれないように教習所へ入会した。仕事も十分でない時期だったから、毎日会社の帰りに立寄って練習をしていた。やがて、クイック、スロー、ワルツ、タンゴなど一応思

い通りにステップを踏めるようになっていった。ただ一つ困ったのは、靴の損傷であった。

当時はまだモノが十分に出回っておらず、たとえ新品を見かけても、闇市とあっては高価で手も出ず、結局はき古した通勤靴一足に頼る外はなかった。

そのうち、靴の縫糸がほころびて表皮と底皮の間に隙があいてきた。そんな時は固い底皮に針を通して糸でかがって繕った。かなり手間がかかったが、直さなければ翌日会社へ行けないから修理はいつも夜業であった。次には底も磨耗してきて穴があきだした。これには古い靴の底皮やバンドを切って当て皮とし補修した。そんなことを繰り返すうち、形は次第にふくらみ、底も厚くなって、とても見られないものになっていった。ただ靴であったから、割に人目につきにくく何より幸いであった。孔子は『韋編三絶』といったそうだが、こちらは『靴糸三絶』で苦しんでいた。

さて、困ったのは『ジルバ』であった。あの激しいステップの動きには、わが修繕靴はついていけないのである。あんなのをやるといっぺんで破れてしまうなどと思いつながら、他人の踊るのをじっと見ている他なかった。靴のせいにするのはいささか気がひけるが、『ジルバ』は今もって踊れないでいる。

国会を見学

第十一期生陶芸学科 H・K

お座りするの磨たちお犬様だけかと思っていたら驚いたことに、国会議員もするんだ。

早速いつも肌身離さずの「新知識ノート」に新しい収穫、人間も「お座り」するとメモった、磨たちよりずっと上手に整然と、黙々と「お座り」しているのを見て思わず笑ってしまった。こんなにおとなしい議員なら磨たちの「大議会」に推薦したいくらいだ。いつも議員のおしゃべりに苦勞されている総統に教えてあげたらきっと喜ばれるに違いあるまい。しかし件のセンチイがた総統推薦を受けてくれるだろうか。「けん会」は「国会」よりも格下げなどと怒鳴り散らされるのではないだろうか。

しかしあんなに唯唯諾諾と幹部連中に従う議員なら二つ返事かもしれない。何しろ狼の親戚筋に当たる磨か、犬の「ケン会」というだけあって総統の言うことなど少しも聞かない「一匹犬」ばかりだから、否それだからこそ羊のようにおとなしい、まるでお地藏さんのような議員なら総統への格好の土産になるっていうもんだ。

なにしろ議会というところはケンケンゴウゴウの議論をするところだと我々は教えられてきたものだ。暇があればまあ一度磨が「ケン会」を傍聴に来られるとよい。磨たちはさすがに犬だけあって議論の成りゆきによっては、ワンワンギャンギャン口角泡を飛ばして咬みついたり吠えたてたりはする。それはそれはやかましいことこの上もない。

しかしそれが言論の府というものだ。それにひきかえ人間共ときたひにや……いやもう言うまい。

住専問題に思う

第十二期生園芸学科 島田岩治

昨年来相次ぐ信用組合の破綻に始まり、わが国主要金融機関が母体となっている住宅専門会社の破綻が浮上した。その内実には誠にずさん極りなく世の常識では考えられない状態である。

そして、この破綻処理になんと財政資金(六八五〇億円)を支出する新年度予算案が発表されたため、野党は勿論、国民からも「私企業の破綻処理になぜ税金を」と不信・不満の大合唱となり、マスコミは日夜この問題を取り上げ、政界・財界の混

迷・狼狽ぶりが国民の前にさらけ出されている。

世論は借り手責任・貸し手責任・行政責任、或いは母体行責任と、それぞれの責任を追及する声もかましい。また、私企業業の破綻になぜ税金を充てるのか？ 国民が納得できる説明ができていない。(農林系金融機関救済の政治的配慮が色濃い)

それにしても関係金融機関の融資に対する姿勢や常識が地に墮ちている。通常、融資の審査は、その資金が多額で長期ともなれば、相手が一流上場会社であろうと、それなりの債権保全策をとるものである。またその資金の使途が把握され、かつ回収の見込みが立ってこそ実行されるべきものである。

さらに重要なことは「放慢融資は放慢経営を招き、果ては借り手を倒産に追いやる因となる」のであって、融資の審査にあたり「ノー」と言える見識と勇気が求められたものだ。

しかるに易々諾々として危険分散を怠り、大口で目先有利な運用に目が暗み果てしなくのめりこんでしまった関係金融機関の所業は、まさに自らが掘った墓穴と言わざるを得ない。

今回の住宅専門会社破綻の責任は最終的には、その母体銀行と農林系を含む関係金融機関にある。と言いたい。また、わが国景気回復ということで、かつて経験したこともない超低金利政策がとられ、預金者は今や利息はないに等しい状態で我慢さ

せられている。しかるに意外や近時の金融機関の決算予測では軒並みに莫大な業務益金が出るという。そしてこれが金融機関が抱える不良債権の償却に当てられるとなれば、我々預金者はなんら関係もない墓穴の穴埋めに、既にもう身を削られていることになるのではなからうか？

関係金融機関の不良債権はあくまで自らの責任で償うべきで公金を充てる実績・事例は今後のためにも残すべきではないと考える。(平成八年三月記)

有難い不思議

第十二期生園芸学科 中川文弥

一九四〇年十二月現役鉄道兵として、中国蘆溝橋の傍、長辛店という田舎町の連隊に入隊した。厳寒の猛吹雪と黄塵の中で軍人精神なるものを叩きこまれ聖戦完遂と青島、台湾を経て敵潜水艦を避け比島リンガエン湾に上陸。マニラからジャワ島と転戦を重ね再び中国魔の黄河において、砲煙弾雨の中、多くの戦友を失いながらも三〇〇〇メートルの架橋を完成し、試運転列車の通過に涙した日の記憶も半世紀経た今も脳裡に深く焼き

ついでに、野戦鉄道司令部勤務のあと、朝鮮半島出身者の教育を担当していた時のことである。

有難い不思議その一

一九四五年七月米軍の戦爆編隊機による猛銃爆撃を被わり、駅構内の車輛機関車は壊滅状態に破壊され、防空壕にも直撃弾を受け将兵九名が戦死した。私も当然そこに退避する筈であったが、背中の鉄帽がないことに気づきあわてて宿舎に取りに行っている間の出来事で危く戦死を免れた。

有難い不思議その二

一九八七年幽霊ビル爆破のニュースで地元は大いに揺れ、対策委員会が結成された。周辺企業その他関係者全て爆破解体反対であった。所有者より英国技術と関係資料提示しての再三再四の説明会もかみあわず、またビル爆破解体は国内初で保安基準がなく、許認可に時間が必要であった。そんな中、学歴地位財産など一切関係のない私が、地域の利益代表者に選ばれてしまった。バブルの絶頂期で金、物と自己中心の時代はなかなかまとまらず、家族の反対をおしきって南アフリカヨハネスブルグへと、素人ながら安全の確認を肌で感じとることにした。その結果、騒音振動よりも粉塵が特に気がかりで連日ひそかに祈り続けた。

爆破解体時は、不思議にも西風が吹き、粉塵公害は住宅を避け、尚その直後にもわか雨となり附着した粉塵をぬぐい流し天は大きく味方してくれた。

喜寿を迎えた今、健康の有難さと感謝で、出会いと交わりの積み重ねの中でボランティア活動に入っている。

思いのまま

第十二期生園芸学科 小野 次 夫

記念誌作成にあたり原稿を募集されました。募集要項を拝見しますと募集内容にいろいろと制限があり、大変むつかしく考えられます。私のブロックでも何人かの方々にお願いしたが応じて下さる方がなく苦労しているのが現状です。昨年も会報原稿を募集したが、本年同様応募者なく、強制せざるを得ません。制限もなく、各人随意的な感想文とされたら如何なものか？当初より苦情ばかりで申訳ありません。

さて私は高齢化社会を生きのびるには、今後の同窓会活動、支部活動の活性化等多様にわたり提言させていただきます。人生八十年代の高齢化社会を生きのびるには、各人それぞれ

の目的・希望をもって生きているのである。何はともあれ健康が第一であろう。自分の身体は自分が護り保持せねばなりません。適宜な運動、仲間意識、地域活動等に積極参加努力せねばなりません。要するに「老人は老人らしく」一日一日を大切に送ることが最良の生き方と感じています。

最近の社会情勢たるや我々の想像に絶するものがあります。各報道機関を通じ世情の変化に注意せねばなりません。特に私は「天声人語」「声」欄を愛読する一人です。健康的に私は、「晴耕雨読」をモットーとし留意をもって日々を送っています。

尚同窓会活動の活性化について一言ふれさせていただきます。今日の同窓会は名目上のみと思われれます。昨年一回の総会で同期生が一緒になって達者な存在近況を確かめる程度のもの、こんなことを書いて執行部役員の方々には申訳ないと思われませんが如何にすれば活性化出来るか日頃考えているが名案が浮びません。私見として組織の構成が第一です。今の状態であれば大きくなるばかり細分化の方法は如何なものかと思われれます。未短かい我々は十年、二十年の計よりも今四年、五年の計画が多年の苦情解消に連なると思われます。思ったままのことを書き、これを私の小策とさせていただきます。

戦争と私

第十二期生生活学科 中川 夕 力

昭和十九年の夏からB29の東京空襲が始まるなか、京都に住む兄が列車のキップの入手もままならぬ時代に上京して、疎開を強く勧めてくれました。日毎に空襲がひどくなり、市内各地で焼夷弾による火災が多発するので、それまで疎開に消極的であった姑もなんとか同意してくれました。ところが疎開するための荷物の発送が一回に行きの大きさを一人三個に制限されているため、すぐに引越とならず、焼夷弾が降るように投下されるなか、死ぬ思いで荷物を発送する毎日でした。二十年三月にようやくのこと京都に疎開出来るようになり勇んで東京駅に行きました。ところが啞然としました。キップはあっても疎開の人が多く予定の列車に乗車出来ないで翌日の昼にようやく乗車することが出来ました。客車の中はちよつとの余地もない状態でトイレの中やデッキも動けないすしづめでした。車窓からの乗降は当り前、私達は大きなリュックを背負い防空頭巾をかぶり、鉄カブト、前日まで使っていたお釜等をもって下車ですので大変でした。足をプラットホームにつけるのにひと苦勞

死ぬ思いでの飛び降り。今思うとどうして事故が起きなかったか不思議です。もっと辛いことはお手洗いです。男性は駅のホーム附近で用を足しておられるが女性は出来ません。我慢のみです。京都は東京と違って爆撃がなく、機関車の焚く石炭の煤で顔も衣服も真っ黒になった私達を、京都の人には異様に見えたことでしょう。寂しくも悲しいことでした。

京都は空襲でも防空壕に入ることもなく安心でしたが、五月に四ツ谷の家が爆撃で丸焼けと聞かされたがどうすることも出来ませんでした。終戦後食物の買い出しに追われ、滋賀県の木の浜にも行きました。その時親切にして頂いたお宅のお名前を聞くことをしなかったことを、滋賀県に住むようになった現在重ね重ね残念に思っている今日この頃です。

卒業後の生き方

第十四期生園芸学科 西川 秀雄

「超高齢化社会」にどのように生きるか。趣味を持つ、健康に注意する、偏食と深酒をしない、適度な運動をする、友達を持つ等々はどなたでもやらなくてはと考えることだと

思います。しかし、高齢者とは失なう時代とはよく言ったものだと感じさせられます。レイカディア大学では人と交わるための基礎知識と条件を与えてもらいました。だけどこれの活用は本人の努力不足によってOBや高齢者の大半が常に問題を抱えているのが現実です。

その一つが核家族化が進み三世帯世帯主中心の住宅環境の中に特に新興住宅地域では隣人の友や、生涯の友を如何にして求めるか、いかに維持していくか大変なことです。現代の風潮のように誰かが、何とかなるでは即孤独に追い込まれ心身に異状をきたすようになります。

大学で習ったこと特に、専科をより向上させる努力と、三がりや即ち、出たがりや、見たがりや、知りたがりやの精神であらゆる場所で人生をエンジョイしながら現在の友をより大切に終生の友となる人を数多く求めることが大切です。

健康を保つには手作りの食事と適宜の運動によって若さを保つことだと思います。先ず惣菜は魚と緑黄色野菜を中心とした家庭料理が絶対の条件だと思います。砂糖は極力控え、それぞれ四季の具の風味を生かすことが最も大切なことです。購入する野菜の大半は酸性土壌で化学肥料で生産されています。このような野菜は養殖魚と自然魚との違いと同じです。すべての野

菜の根は六十糎以上あるので七十糎以上深耕して堆肥を多く施せば化学肥料のみの野菜より甘味のある美味しい、微量要素を多く含んだ野菜を収穫することが出来ます。

このような野菜や、これに近い四季の野菜を食して健康を保つことが一番大切であると思います。百貨店等で高齢者の方が腐食しないように加工された食品を購入されている姿をよく見かけますが果して健康を保つことになるのでしょうか。時間がタツプリある高齢者なのに……。

届いた小包

第十四期生陶芸学科 下村 佐和子

弥生三月のある日、思いもかけなかったあの神戸大震災で失われ、今も西宮の仮設住宅での生活を送っておられる女学生時代の友から宅急便が届きました。イカナゴのくぎ煮を炊いたから召し上ってほしいとの一筆が添えられていました。当時少しばかりの支援をさせてもらったことへの返礼でした。

不自由な生活状態の中で炊かれたであろう彼女の姿を二重三重に想像すると、ただただ有難く、箸をつけるのがはばかられ

るような気持ちでした。

鱈甲色した小さなイカナゴを口に含んだ瞬間、甘く、香ばしく、そして、ちょっぴりほろ苦く、えも言われぬ味わいで、思わず「おいしいね」と言いながら、毎食を楽しく充分に賞味させていただきました。なんだか今年の厳しい冬の寒さが一度に和らいだ感じで、かえってこちらの方が元気づけられた思いでした。今もご夫婦お二人、ひっそりと生活されているであろう友に、心からのコールを送っています。

偶感

第十四期生生活学科 足立 達子

老大の恩師梅本先生の雛まつりの個展を見せていただける機会を得て、大変嬉しかった。会場は華やいだ中に、温かい雰囲気と和んでいた。

小さな小布を、ちよいとつまんで色紙に貼ってある。なんでもないことだけど、なかなか出来ないことである。また同じ趣味をもつ教え子の皆様も参加して、立派な作品が沢山並んでいた。老いても雛まつりは嬉しいもので、ゆっくりと楽しませて

いただいた。またよいヒントを得たので、私も挑戦してみようと、胸のときめきを感じた。同期の皆様には、来年お目にかかる折には是非見ていただきたいと思っている。

次に、地域の方々との交流を大切にしたいと思い、社会福祉協議会の福祉委員として活動をはじめて八年目を迎える。毎月独居老人宅へ、ふれあい弁当を作り配達しているが、学生時代の家庭科の実習のようでもあり、料理のレパトリーも増えるので楽しい。配達では、楽しみに待ち受けている所へのお届けなので、お渡しする時に、その喜びも伝わってくる。

また、母子寡婦福祉のぞみ会の学区会長をお受けして八年目新しい学区での新設で随分と苦労も多かったが、どうやら地域の方々にもわかっていただけになった感じがする。

次に同期の会は、春秋年二回の行楽と梅本先生に干支の貼絵を教えていただくのも年中行事の一つで、時々同期生は顔を合せて元気であることを確かめ、生活の智恵のようなことを教えてもらい、時間一杯おしゃべりを楽しんでいる。年令、経歴、生活環境などはそれぞれ違うが老大で共に学んだ学友として、楽しいおつきあいを続けたいと望んでいる。

健康を第一目標にしているので、規則正しい生活、栄養を考えた食事、適当な運動と目標からはずれないように気をつけて

もうしばらくは前を向いて少しでも社会の役に立つようと、忙がしい日を過ごす覚悟をしたところである。

超高齢化社会を考える

第十五期生陶芸学科 深田三郎

輝かしい十五周年を迎えられたことを衷心よりお祝い申し上げます。

さて、昨年を振り返ってみますと、阪神淡路大震災をはじめオウム地下鉄サリン事件、金融機関の破綻住専問題等、まさにめまぐるしい年でありました。このような中で、高齢化も急速に進んでいます。行政としては今日まで、高齢者対策として各老人福祉施設の整備、充実に努力していられることに感謝せねばなりません。

超高齢化社会を迎えるとなると、今までの福祉における「扶助」の精神から「共助」の精神が必要ではないかと思われまふ。このことが高齢者の社会参加の促進と生きがい対策に結びつくことにもなり、同窓会の活動が社会的に大きな意義をもってくると思われます。

本年は平成八年末広がり年であります。同窓会員の皆さん
ご健康で益々ご活躍を祈念致します。

レイカディアに学んで

第十六期生園芸学科 高山 紀美栄

ありがとう「レイカディア」

六十歳を迎えるのが何となく不安だった私。第二の人生を生
きる第一歩をレイカディア大学で踏み出させていただいた幸福
者です。この学舎に立てば青春の息吹さえ感じさせてくれる夢
の宝庫なのです。級友や諸先生方に囲まれて自分の意志で選択
して学べる楽しさ、何をするにも意気投合し、速やかに行動さ
れる皆様のファイトには感心しました。

十六期生として入学させていただき、嶋岡先生を見習って情
熱と探究心と慈しみに感謝の心を添えて生きぬきたいと思いま
す。先生方ご指導下さいました園芸を通して文学や歴史の後に
顧える人生を探究することの大切さを、また私達は琵琶湖の真
の姿を知りたくて万歩会を発足させて淡海の歴史や自然、万葉
の足跡を訪ねて琵琶湖一周をめざし歩き初めました。豊かな自

然の中、植物を通し私達の生きざまを反省させられます。この
ような楽しく意義ある時を過ごせるのもレイカディアのお陰と
感謝しています。今後私達には楠藤園で学べる楽しみがあり
ます。レイカディアを知らない人々に、レイカディアの楽しさ
を「アピール」し一人でも多くの人がこの幸せを味わえるよう
になればと思います。

勉強など縁のない私が、放送大学や淡海塾にも出席するもの
クラスメートの刺激のお陰と感謝しています。十六期園芸学科
生は一六会を結成し楽しい同窓会を開いております。在学中に
クラブ活動で習っていた民謡を杉原雅司先生のご好意で再び四
月からレイカディアにて始めました。

「豊かな老後と健康のために」参加してみませんか。地域社
会の指導者として、老人福祉に寄与するべく努力し研究したい
と思います。

今後の時間は私達自身のための時間です。自分のための自由
な時を大切に自己実現に努力しましょう。好奇心、研究心、実
行力、友情、淡海の豊かさに感謝しながら、悔いのない生涯を
生きるように月日を大切に努力していきたいと思えます。

ありがとうございました。

健康と趣味に

第十六期生生活学科 井上貞子

二年間大学で得た新しい知識は無為に過ごしていた私を活生し、淡海塾で古典、郷土史の講義は、湖国の歴史を再考し、見学会には神社仏閣に年代をその文化に認識し、自分の古い地蔵にも詳しく調べてみました。

これからの時間を地域のボランティアとして生かすことに努めたいと考えますが、なかなか機会に恵まれません。

健康に自信のない私は心身共に留意し、担当の医師の指導に従い六十歳半ばを過ぎて始めた趣味？の二、三にボケに陥らぬよう励むことにしています。多くの先輩の方々、同級の方々の健康と、今後も親しくおつきあいが頂けますようお願い申し上げます。

雑詠

メタセコイヤに湖等分に区切られて水温む面に鴨の幾百

春吹雪吹き荒びたり薄墨の中に田上の山容が消ゆ

独り寝の夢に出で来ぬ月が瀬に咲きいし梅の川に散りゆく

湖の魚に深き眠りのあるならんライトアップは水面を透きて

琴坂の高みの岩より泌み出て水脈なすあたり苔の色濃き

冷えまさり水仙の香に刻還る古き内裏は吾守るがに

失せて永き木型の彫りの浮び来ぬ父母とたのしみし草餅作り

ふりかへり

第十六期生生活学科 横山ハマエ

湖は春一番が吹くと陽の当りもよく、川面きらきらと春の到来を知らせてくれる。

レイカディア大学に学び、沢山の友との出会い、各講師のご立派な先生方を通し幅広い視野のうちにいろいろと教えを受けることが出来ました。卒業後も郷土史入門講座を受講し、いろいろと勉強しました。三ヶ月の短かい期間でしたが、郷土に残る石造、仏像、墓塔、先日甲賀方面へ見学に行き、滋賀には多くの寺があると聞きました。自分の住む町にも、古く伝えるものがあると思いました。資料を集め、若い世代に伝え残さねばと、私なりに時間と健康があれば、古き文化の町を一つ一つ歩いてみて記録に留め頑張るつもりです。

レイカディア大学で学んだことを無にしないように、いろん

湖の魚に深き眠りのあるならんライトアップは水面を透きて

レイカディア大学で学んだことを無にしないように、いろん

んな分野に挑戦してみたいと考えています。

昨年は天災、人災と驚き人の生命の尊さを知らされた年でした。

夢は果しなく

第十六期生陶芸学科 高野 明子

レイカディア大学の陶芸学科を卒業して早や七ヶ月になる。好きな陶芸の拠点を水口の県立老人福祉センター碧水荘へ移して月二回の陶芸教室通いとなった。

一期生からの先輩諸兄姉が生徒で四班に分かれ、先生二人のご指導のもとに粘土をひねっている。先生にはそれぞれ個性があり、また新しい技を身につけることが出来て更なる喜びを味わっている。先輩の仲間入りをしてつらつら思うことは、老後の趣味一致の仲間なので気負うこともなくお互いにいたわりあう心と気楽さが充ち溢れている。

自由作陶なので作品は千差万別、二年間の基礎実習の賜で個性豊かなみごとな出来栄である。とにかく作りながら笑い、笑いながら作る、よく動く手、よく動く口、教室全体が動いて

いる感じがする。

先輩は積極的にグループを作り県立陶芸の森で、穴窯や登りに挑戦している。魅力ある焼物の世界を知る上にもやはり窯を焚いて割木を燃やして体験することも必要だと思う。

私はまだまだ未熟で皆様の足元にも及ばないが、土を粘って最低三ヶ月はねかす土ねりの仕事が私の手始めの一つ、土の心を知って頑張っている。来客の時は手みやげに、贈物に心のもった花瓶や一輪指しを差し上げているので置場に困ることもない。作品展に出展して成果を問うことも必要だ。種々の作品展で受賞し玉の光の輝き始めた人もいる。

六十歳の人は九十歳まで三十年あると思えば、夢はでっかく果しなく拡がる。こんな楽しい芸術は外にはないのではないかと私は思う。

趣味

第十六期生陶芸学科 木 虎 吉 三

四季の表情が豊かな近江の国に約三十年住み、しみじみとその有難さを実感している。小生は京都で生まれ約三十五年住ん

だ故郷で場所は新選組の屯所で知られる壬生寺の前で、附近は寺と民家の混在しているのどかな地であるが四季の変化や表情は近江の国は優れている。誠に幸せな環境である。

人生として五十年間働きを終え本格的な勤務から放れ非常勤の勤めが残っているが数種の趣味を持ち、無為の日を極力少なくし実行している。趣味として最初は水彩画と大津絵を習い初めてから六ヶ月後にレイカディア大学の陶芸学科に入学し二年半を経過し、現在以降はこれらの趣味を通じ、地域社会に役立てれば幸いと思っています。

昔から「務めたる一日は貴ぶべきの一日、務めざる百年は恨むべき百年」との諺がある。即ち無為に過ごすれば百年の寿命があったとしてもたったの一月さえ生きていなかったのと同然とのことである。

私の残る人生も限られた期間であり、無為に過ごすことのないよう努力が必要と心得ています。絵画も焼き物も習作に際して対象物を個人の持つ感受性で如何にしてとらえ、どう表現するかであると考えてきたが、最近経験を重ねるに従ってこの条件以外に、対象物が感受性をもっていることに気づいた。特に焼き物でその傾向に出合っている。作陶の際粘土そのものが相当感受性が強く、土に少しの力を加えただけで力の痕跡が残る。

即ち焼き土り、窯出しをして作品を見ると加えた力による歪が残っている。土は微妙な素材であり、土に心があり、時として怖しくもある素材でありこれが陶芸家の意欲をそそり、魅力の虜になっている。私も同様に虜になった。特に焼きもので言うことは創造性のある創作ができることである。

私のようなアマチュアは如何なる滑稽な創作でも批判や「こきおろし」に気を止めることなくできることがアマチュアの特権である。前述の趣味とは終生よき相手として、うまくつきあいたいと思っています。

大津に住んで

第十六期生陶芸学科 橋本宏一

六十五歳で仕事が終り、これから陶芸に力を入れようと思っていたところ、レイカディア大学の陶芸学科をOBの方から進められ入学することになりましたが、二年間元気に通学するための体力維持を考え、水泳を始めることにした。

皇子山プールが近いことから週二、三回マイペースで軽く泳ぐことになったが、たまたまレイカディア財団主催の水泳大会

があり、大津水泳協会にお願いして参加することにした。

当日は孫が名古屋から来ており、応援に行くと言ってやってきた。しかし、結果は残念ながら格好のよい姿を見せることが出来なかった。家に帰って、婆さんが孫に「おじいちゃん、どうだった」と聞いたところ、ただの一言「おじいちゃん負けちゃった」で終り。これがきっかけでスイミングスクールに入ることになった。それから、かなりハードな練習が始まり、また今まで泳げなかった種目もコーチから教わるようになった。

スクールには全日本マスターズで活躍されている方々がおられ、年齢は八十歳から三十歳くらいまでの構成で、非常に楽しくグループ活動をしており、仲間に入れてもらうことにした。お陰で現在では出場してメダルをもらって帰れるようになりました。

私は大津に住んで十五年になりますが、レイカディア大学に入学するまで滋賀県の方とおつきあいをすることはあまりありませんでした。ところが陶芸学科では思わぬ温かい人達とのつながりができ、また水泳では年齢に関係なく若い人達ともおつきあいをしていただき、充実した毎日を送らしてもらっています。今になって、大津に根をおろしたことを喜び、感謝している次第です。

湖南支部

かびの生えた旅の話

第五期生文芸学科 川嶋 勇

あれは何時頃だったか、二十歳を過ぎた頃、伊豆の大島へ旅行したことがあった。その頃の私は勝手気ままな独り旅が趣味で、まるで好奇心が服を着ているような時代で、暇があると飛び廻っていた。

ロマン花咲く樅の島、海の中で火を噴く三原山、鎮西八郎為朝の伝説など、大島には特にひかれていた。三原山の登山道には一合目ごとに茶屋があつて、樅の茶屋、鶯の茶屋などと呼ばれていた。髪を手拭で巻いたアッコがいて客に声をかけていた。その日は登山客も少なかった故か、私は五合目の唄の茶屋でアッコ達に捕まって「氷イチゴ」をとらされた。三原山の頂上には、番人がいて見料をとって御神火を觀せていた。火口へ突出した三メートルほどののはしごの先の円い鏡に暗い火口の底が写っていた。番人が拳大の溶岩に白い紙テープを結んで火口へ投げこむと、石は白い尾を曳きながら鏡の中へ吸いこまれていった。やがて暗い地の底で御神がチラチラと赤く燃え上るのが見

えた。太古から燃え続けている地底のマグマを見て感動に体が震えたのを覚えている。その晩、泊った宿屋の名も忘れたが、翌朝は下田へ寄るため早発ちした。

元町の港で船に乗る時、荷物を持ってあげただけの縁で一人の老婆と知り合った。「東京に私と同じ年格好の孫」がいるとかで、すっかり気にいられてしまって、朝食を一緒にと下田へ着くと老婆の定宿へ連れて行かれた。ワカメの味噌汁も干物も親子丼も、みんな温かくておいしかった。代金を受け取ってくれないので困っていると、「いいのよ学生さん、ご馳走になっておきなさい。このおばあさんはネ、テングサの大問屋でお金はドッサリあるんだから」と、宿の女主人が言ってくれた。

あの時、ニコニコ笑って私を眺めていたふくよかな老婆の顔が、八十三歳で亡くなった母親の顔とダブって想い出されて仕方がない。

近頃思うこと

第七期生文学学科 森野三郎

昨夏延暦寺の夏安居があとに参籠？しました。午前一時起床、一時

間坐禅（中堂）般若心経読経しつつ山谷三塔回峯行しながらの小径苦行を験してみても四苦八苦。次のアントロポロジー（ド・

Anthropologie）を感じました。

私は人生の終りを告げるときに備えて私の身辺就中家族及び医療関係者に次のことを実施下さるようお願いします。

一、告知について

私の病が現在の医学では不治であり既に死期が近づいていると診断された場合には、その病の性質によりあとどれ位、どの程度のことができるのかを、それとなくわかるように私に知らせして下さい。

二、尊厳死について

私の死期が迫った場合には、いたづらに死期を延ばすためだけの処理は一切お断りします。但し苦痛を和らげる最大限の措置をお願いします。そのことで私の死期が早まったとしても、それは私の死の尊厳を害つづけるものではありません。

三、安楽死について

私が激しい苦痛に襲われ、回復の見込みがないと診断されたときは、私に告げることなく医師の手により私の生命を停止して下さい。私の安楽死は家族や周囲の関係者に対する私の最後のつとめです。

四、植物死について

私が精神に著しい障害を来し彼我の判別が不能となり、自己を喪失した状態、あるいは全身に著しい運動障害を来し、他人の介助なくしては生命の維持が困難となり、いずれも回復の見込みがないと診断されたときは、第三項と同様とします。

五、脳死について

私が脳死の状態となったと診断されたときは、その時を私は私の死と認めます。そして私の臓器等が他人の生命維持等のために役立つのであれば、遠慮なく提供して下さるよう望みます。生病老死の終着で、どの死を選ぶかは、私の権限に属するものと信じます。ないしは死なしめられる宿命をも含めて、どうかこの私の権限を侵さないように切望します。ゆっくり休めるものと信ずるが故に。

わが世代

第九期生陶芸学科 中村 勝 一

私、大正十五年即ち一九二六年生まれ、首から上がオールド・リベラリズム、四肢がデモクラシーで……、このように自己

を抽象的・観念的に眺める哲学的悪癖をもつ世代でもある。

大正族は確かに古きよき時代の自由とロマンを愛したハイカラ人種でもあり、生まれた時から男子は戦場へ、女子は軍国の母たるべく育てられ、人生二十五年限りしか与えられなかった。

戦後の民主国家建設、経済大国づくりの尖兵であり、自我よりも国家・企業と家庭建設のために生きた猛烈人間集団でもあった。そして大正十五年生まれは、まぎれもなくこの大正族に属し、その殿しんがりを努めた特徴をもち、この国で最後の徴兵検査を受けた。戦後の飢餓時代、極端な物資の困窮時代を生きぬいたたたかな世代でもある。激動の昭和史を駆けぬけ、半世紀という長い歳月が過ぎて気がつけば、クラスメイトは約半分生き残ったようである。人間は尊い生命を享受できた限り、個々の天寿を全うするまで健康に留意し、急ぐことなく自己の生きがいを探索して進みたい。

文中一部 河出書房新社「わが世代」より転写

数々の銅鏝発掘で一躍有名となった「野洲町」。その豊かな自然環境に恵まれた辻町に、身体障害者通所授産施設「にっこり作業所」。この公共の施設の窯を借用しハンディーを持つ方達ともほのぼのと肩を並べ粘土と戯れるグループが私達「陶悠

会」である。他所で極く自然な形で同世代の仲間達が「作陶」を語り合う機会が生まれ、その場所を提供していただいたのが当時の所長であり、その感激は今でも忘れてはいない。もう八年の時間が経過して卒業生・一般の方以上に若い世代の奥様達も多く、華やいだ雰囲気（きょうき）の悠紀（ゆうき）の里で交流の場も広がって行くようです。これも戦後の混乱期を生き残ってきた私達への「天からの贈り物」なのでしょう。陶芸作品はこの作業所運営に協力するチャリティバザーにも提供いたしております。

新らしく同作業所に於て「手づくり工房」によるパン、クッキー販売も五月より開始いたしました。

私の健康法

第九期生園芸学科 野村 要

数年前より老後の健康を考え、私なりの健康法を試み、老後健康で明るい生活を楽しむための、私の健康法を皆様に紹介いたします。

先づ医師による健康診断を二ヶ月に一回受診し、血圧、コレステロール、血糖値等を検査する。この検査結果に基づき、必

要あれば食事制限を考える。毎日五〇〇〇歩以上を散歩し、三上山に毎月一回定期的に登山し、足腰の強化につとめています。その他写真、水墨画同好会等に入会し生涯学習に力を入れ、またグラウンドゴルフを楽しむ、以上の方法で老後健康で明るい生活をするようにつとめています。自分の健康は自分で管理したいものです。

入営の回想記

第十四期生文芸学科 久保 治 夫

終戦から日進月歩、早や五十年が経過した。

昭和十九年九月一日、中部第三十六部隊（現在の敦賀市）に現役兵として入隊。在役丸一年。内地勤務で戦火を交えた経験はない。筋目に当り、その回想の一端を綴る。

第七中隊に配属され、班長から軍装の支給を受ける。娑婆（しやば）で使用のものと、さほど変らぬものでも呼称が違ふ。衣袴（いこ）、襦袢（じゅばん）袴下（こした）、編上靴（へんじょうか）、場内靴（じょうないか）、上靴等（じょうか）。何れも英語使用はまかりならぬとのこと。私物は禪だけだ。

朝六時、起床ラップと共に飛び起き即時、舎前に整理、点呼

を受ける。解散と同時に当番は食堂へ「飯上げ」に急行。帰るや配膳。初年兵の朝食は味噌汁の汁のみで豆腐の木端のみ。

演習、使役等で疲労困憊こんぱいで夕食を済ませ一段落すると、いよいよ古兵さんの説教が始まる。起床から消灯までの初年兵の行動を驚くほど克明に監視し、よく覚えていた。例えば整列が悪い。各人個々に指摘し、くどくどと説教する。

更に消灯後に恐ろしいことがある。週番士官が巡視して銃架の銃を一挺宛引金を引いて廻る。若しも「カチッ」と音がすると、さあ大変。その所有者は引出され「捧げ銃」を凡そ三十分余継続し、精神修養を受ける。

制裁の中で最も強烈なものは、公の物品紛失の際、その犯人が申告しない時は「全体責任」として初年兵全員集合し制裁を受ける。対向し二列横隊となり、「対向ビンタ」を始める。最初古兵さんが上靴で殴り見本を見せる。以後は初年兵同士、交替で頬を殴り合う。古兵さんのけしかけもあり、順次エキサイトし、最後は頬が紫色に腫れ上り、数日間痛みが直らない。

軍隊生活は僅かな期間であったが、想い出は枚挙にいとまがない。原稿に制限もあり以上で閉じることとする。

中国に抑留されて

第十六期生陶芸学科 九 鬼 茂 隆

私の所属した南支航空補給廠は、終戦後漢口飛行場片隅の天幕兵舎で、転進の疲れを癒し元気を取り戻すまで約二ヶ月生活していました。十二月上旬突然楊子江下流の潁城という街に移動を命じられたのです。

持てるだけの被服や食糧を背負って歩き始めたのですが、手に鎌を持ち憎しみに満ちた眼で落伍者を狙っている農民を警戒しながらの行進に加えて、四日目は朝からの雨で疲れ果てた吾々の行進をよけい遅らせ、真っ暗になってやっと目的地に辿り着き、雨の中で天幕を張り雨宿りしたのです。暖かい中支といえ十二月です。合羽を通して濡れた服を着たままつむいてじっと寒さを堪えていました。昼の疲れでとうとうとしていたのでしょう。人声に気がつき透し見ると、中年の中国人が片言のわかる衛生軍曹に、自分の家に来て雨宿りしなさいと誘ってくれたのです。同じ天幕にいた五人が彼の後に従って家の中に入れてもらいました。豊かそうには見えないのですが、かまどの火と隅の棚にポツンとついている灯心の光とがとても暖かく感

しました。やがてかまどの火も燃え盛り、濡れた服から湯気が上り出し、一碗の白湯に人心地が付き、辺りを見廻す余裕も出てきました。この家は豆腐屋らしく大鍋に豆乳が煮え、もうもうと湯気を上げていました。その豆乳をそれぞれがご馳走になり、身体の内、外、心が暖まった頃には、雨も止み東の空がほのかに明るむ時間になっていたのです。衛生軍曹の片言の通訳で、軍医さんが何がしかのお金を固辞するこの家の主人の手に握らせ、一同は通じない日本語で礼を述べ外に出ました。

後年、終戦時蔣総統が全国民に向けラジオ放送した告文の中に、「わが中国の同胞よ既往をとがめず徳をもって怨みに報いることこそ中国文化の最も貴重な伝統精神であると肝に銘じてほしい」というくだりの訳文を読み、この家の主人の心の豊かさは、中国の伝統的な精神であったのだと改めて認識したのです。



甲賀支部

追憶

第四期生陶芸学科 島田寅治郎

「傾けよ基地の地主の冬の声」

ある俳誌（全国版月刊四月号）に、愛知県村上女史は当季集に私の愚か（知恵の少ないこと）な句を拾って推薦してくれていた。

敗戦後半世紀を過ぎ、戦争体験者の国民が少なくなっている現在、まだ苦しむ基地の人々を思う。

私の実弟も旧満州軍に入隊し沖縄戦で戦死。今は摩武仁の丘の近江の塔に安らかな眠りに、ひめゆりや、健児、黎明の塔と共に、烈しい戦を語り合って、静かに静まっているであろう。そんな感慨にかられる日々も、遠い時限の過去となって五十年余り過ぎ、際立って老け頭髮も白く、判断も鈍く、肩腰や体力も衰え、俗に言う年寄の仲間となった。

或御仁『春効』の主宰嚮田進氏は『衣更へて平均余命生くるべし』句を発表したのが昨年である。

私は既に平均寿命をクリアして今女性の平均余命に向って

いる年令である。

去年、月刊俳誌に『すがやかに吐く息白く妻と老ゆ』と投句してと、私なりの心境を語りその場を逃れた。正に晩年である。

さて、どう生きべきかと難題を抱えることになる。私なりの生活を考えて、滋賀県老人大学を卒業後既に十年を経過し、吾が同窓会も十五周年を迎え、記念誌編纂とのこと、拙ない歩みと生き方で締めくりたい。

どのように生きて来たか。蛍雪の歴史とつとめ、退職後目下三十六冊目のコクヨフリーアルバムを使い、生きた証を保存している。次に実在の記録となる写真帳はコクヨ・ポート・アルバムで現在まで百十七冊目にまとめている。これからもだんだんと増えてゆくとと思う。

次は随想日誌『四季』（巻一）こせことし古今年・次ページに、四季たちまちにして去り年来る春秋人に而已短かし

と書く。始めたのは昭和四十六年とあり、最初は四年位かかったが（巻二）から毎年に書き現在も続けている。既に平成八年（巻式拾参）になっている。これは編集者発行者、サンエックスKKで随想日誌四季三六八頁となっている。

目下は滋賀県立老人福祉センター碧水荘での陶芸や表装を習い、町では部落の神社や寺の奉仕に日々を過ごし老を楽しんで

いる。

生き甲斐

第十期生陶芸学科 嶋津 勇之助

老在学中民生児童委員の委嘱を受け、現在十年目になる。

また社会福祉協議会の「よろず相談所」の相談員もつとめ、相変らず地域福祉の一助にもと頑張っている。

私達の仕事は「家族問題」「児童問題」「老人問題」等々、人が生きて社会生活につきまとうさまざまな問題に対し相談を受け、指導し、また行政へのパイプ役もつとめている。

特に増え続ける老人問題は深刻で、行政の福祉施策のみで解決する事柄ではないように思われる。

人は誰でも年をとる。また年齢と共に足腰も弱まり、体力も低下し、また病気にもなる。結果ベッドで臥すようになって「年だから仕方ない」と介護を受けている人と、たとえベッドで横になっても、生きている限り生きようと、活力をもつて前向きに頑張る人とは、結果に大きな差があるように思う。私も現在七十四歳。生きている限り、いきいきと生きていき

たいと思っている。「いきいきと生きる」とは、「生き活きと生きる」ことだ。

長かった冬もようやく春めいてきた。畑のジャガイモも新芽を出すだろう。畑も夏野菜の植付けを待っている。また、新しく買ったカメラも出番を待っている。地域の年寄りも待っていていると思う。非力の私でも、待っていてくれる。私なりに頑張らねばと思う。

学ぶところ

第十一期生園芸学科 服部 稔

私共は多くの人々から、いろいろなことを教えられている。また私共は周りの人々から学ぶことがたくさんある。このことの大切さをもう一度かみしめたいものである。

あの人は若いとき、子供の頃の姿と比較して、すっかり人が変わったと、よく言われることである。お互い自分の長所、短所は自分ではわかりにくいものである。他人のことはそれなりにあの人はどうかだと批判するが、自分はどうかと、ここで自省したいものである。

立派な人と言われる人は、いつの間にか知らず知らずの間に感化を受け、自ら学びとり、発憤してその地位を得られたものである。私共もその環境の中にて、互いに啓発され進歩しているのだと思う。

私も家族に特にこれからの孫達に仲間を大切にし、何事も同調しその中で行動を考えなさいと、老人の好まれざる発言をしている。「アアレマッタ」の反省。

私はゲートボール愛好のため、広くあっちこっち競技試合に参加し、多くの人と対戦し、その後面識も方々と親しく接し話しあうことが多い。

Aさんは私らチームでも困っている人や、昔からの個性そのままや、一つも直らへん人ですわと言われる。なるほどどうなづける方である。

私共老人も家族の中では大切な位置にある。今日の世相の中では家族の繁栄、子供特に孫達のためには教育者とならねばならない。

我が息子が社会の中でどのように思われているのか、社会的地位はあっても人柄はどのように批判されているか、親たる今の老人は考えなければならぬ。地域社会の中で、自分の息子(孫)は能力はあるし何でも出来ると思っているのに社会から

重視されていない。これらは人間的に欠如している何かがある。これは本人が気づいていない。だからこの点をもっと親たる老人は家族に話しかけ、自省し学ばせることが大切だと思う。

私の従軍記の思い出

第一期生園芸学科 今井 博

戦後水害と火災で資料皆無となり記憶で書きました。当時姓名は宇田と申しました。

戦前海軍の機関兵として入団したのですが戦闘には一切関係なく、ただ機械の操縦のみで戦闘状況を安全な甲板で見ることが普通でした。

十六年十二月第二十号掃海艇に乗り組み、第四艦隊十一水雷戦隊の一員として南方に向け横須賀を出港しました。台湾の基隆、高雄を経由して比島方面に出撃中、事故により十二月二十日頃ボーコ島の馬公ばこうで修理、十七年の正月を迎え艦上で餅つき等をしたりして戦争中という感じはないくらいでした。

十七年二月より珊瑚海海戦、ソロモン海海戦と六ヶ月従事、当直中艦上で機銃、高角砲の射つ音、また爆雷の投下の大きな

響きと大変で、機関室にて作業する者は何もわからず、ただ艦橋から指令される速度を出すのみでした。

当直終了後は甲板で戦闘状況を聞き、話するのが毎日でした。インドネシア諸島、ニューギニア、比島、ラポール等各地に転戦し、当時は戦争に勝ったと思った位でした。

十七年八月海軍工機学校入学のため、ラポールで退艦し、八十一警備隊より横須賀に向う。

十七年十一月軍艦竜田に勤務、南方に出撃ラバウル、トラック島を基地に作戦に従事、ソロモン海域で天竜と戦務交替し、トラックに入港後天竜が敵潜水艦攻撃で沈んだことを知る。

その後南方各地を転戦し、艦整備のため呉海軍工廠にて修理中戦況が不利なことを聞く。

十八年四月より九月まで桂島で兵学校生徒の教育や戦闘訓練を実施中、軍艦陸奥の火薬庫が爆発して目前にて沈没する。

十一月南方出撃のため呉工廠にて艦体修理中、当時第四ドックに戦艦大和が入渠していたことを思い出します。また同郷の戦友と食事を共にし翌日出港され数日後戦死された報を聞いたこともありました。十二月横須賀に廻航中四国沖で大時化に遭遇横須賀工廠にて大修理、本艦の作戦も変更かと思う位でした

二月十五日頃船団護衛の旗艦として出港すると、十九日より攻

撃を受け輸送船多数沈没、本艦も二十日午前三時二十分頃魚雷攻撃を受け沈没、翌日午後四時頃救助タンカーで救助され、横須賀から舞鶴へ移送、吾妻で一週間隔離後、新兵教育に二ヶ月従事するも、五月に第二十六号海防艦に乗組のため長崎に、それから南方に出航し、比島を中心に活動すると悪い状態ばかり。

二十年四月輸送船団護衛援助のため、マニラより仏印海岸に航行するも飛行機潜水艦の連日連夜の攻撃で全滅、私の艦は急回転海南島輸林に逃避するが、毎日の空爆で破損大で逃避航行東支那海の香港、厦門等各港に寄港、燃料補給し門司に入港、修理後三十一海防隊に編入され、石川県七尾で終戦を迎えられた。外地で面会した同郷の戦友は皆戦死しているのに、私だけかと思うとその人と会食したことを思い出します。

二十一年八月まで引揚船と掃海作業に従事中、機雷事故で左足に受傷、鎮海病院、別府亀川病院を経て退院、現在まで生活のため頑張りました。椰子の木陰でまた航海中夜上甲板で南十星を眺めながらビールを飲み、また歓談等、走馬燈の如く楽しかったことばかり思い出します。

今は亡き戦友の冥福を祈っております。足かけ六年間南方各地で転戦しましたが、無事生還したことの喜びと官費で南方各地を旅行と想定して青春の多難な思い出でした。

現在は負傷した左足をいたわりながらも、元気に毎日野菜作りや盆栽を勉強しております。

父の死

第十一期生文芸学科 大林源太郎

私の父は、三十六年前（一九六〇年）の三月彼岸に、八十歳でこの世を去った。ちょうど三十七回忌を済ませたばかりである。日頃極めて健康であったが、風邪がもとで肺炎を併発し、あつという間の出来事であった。

風邪が軽くなり、床から起きて相撲を聞いていた夕方、疲れたといって寝た父の呼吸音に異常を感じた母が、肺炎の疑いがありそうだといい出したので、直に医師の来診を受けた。医師は、既に肺炎が進行しているといい、同時に、近親者に急いで知らせた方がよいといった。私はその急変にたまげた。父はその頃、もう声が出なくなっていた。

当時はまだ今ほど電話が便利ではなかったので、電報の助けを借りながら、あちらこちらへウナ電を打った。

翌朝、近隣の人達が、危篤を聞いて次々とお見舞に来て下さ

るし、親戚も近い所から逐次やってきてくれた。父は、それらの人々に笑顔で応えてはいたが、衰えが目につくように思えた。医師はたびたび来て手当をして下さった。

父は、自分自身の苦しみと、周囲のざわめきとで、迫り来るものを自覚していたのであろう。話すことが出来ないのに、紙と鉛筆とを要求した。仰臥したままなので、紙の固定を手伝って、鉛筆を持たせると、渾身の力をふりしぼるようにして書いた字が、「閉会」であった。父は、八十年の生涯を終えることを自覚し、それを宣言したのであった。

その時、父と私とは、「閉会」をめぐる、違った立場から死と対面した。父は勿論自分自身の問題であるし、私には、私の生命を与えてくれた源の生命の終焉であった。私は胸に熱いものを感じた。

医師の適切な治療と、周囲の人々の励ましと祈り、そして何よりも本人の必死の努力により、翌日お昼前に最後の親族（私の姉）が東京から到着するまで、生命は続いた。これで全員揃ったことを告げると、父は、朦朧とした意識をはねのけるように目を見開き、一人一人を笑顔で確認すると、ふとんからやまと両掌を出して万歳をした。最後の意志表示であった。後は大きないびきが二時間ほども続き、万事終わった。

「閉会」の宣言といい、万歳といい、それは八十年の父の生涯の最後に、誠にふさわしいものであった。死が視野に入っている今の私が考えると、あの時、共に万歳をするか、或は拍手をして送ったら、もっと喜んでくれたであろうにと思えるが、当時はそんな余裕もなく、平凡な送り方しか出来なかつたことは、文字通り最後の親不孝であったようだ。

回想記

第十一期生文芸学科 三浦重雄

寺詣りをする年になっても、一向に信仰心がわいてこない。

まだ若いのかも知れないと、人に聞いたら、曰く人それぞれに考えがあるので、それでよいのだと教えてくれた。

いつまで経っても貧乏性なので、バタバタしている。何が肝心のことかと考えて見るけれども、さっぱり要領を得ない。

人生七十六年を過ぎて今だに自分の方向がわからんと思う。誰でも、そんなことを考えて生きているのかとも思ってみる。

みんなの答が自分と同じようなことなら少し安心してよいのだと思う。いつの時代でも、人間は修養しなければ一人前

なれないと言われてきた。

自分を律するにはこの言葉が一番よくあてはまると思っていた。修養することは辛いことである。それを乗り越えて修養したなら何かの役に立つのではないかと考える。

戦争時代は兵隊として何でも辛棒して何かを得ようと頑張ってきた。それでも戦争には負けた。これじゃいかんと思ひ直して日本人は立ち上った。食うや食わずで頑張って日本は一人前の生活が出来るようになった。

今思うと歴史は繰り返される危険性がある。馬鹿なことである。空しい悲惨、後悔、そんなものが残るだけである。一たび戦争となれば、自分も戦場に行つて肉を切られ骨を折つて苦しんだ日々を、姿を経験してみると、戦争は嫌になる。

戦争は絶対反対である。

人間はそれが実行できないので苦しんでいる。

このような時こそ真の修養を尽して人間愛にめざめることである。戦争に出会った者でなければわからないのである。

ブッタの遺言

(一) ブッタの遺言を裏切る

アーナンダよ、お前たちは修行完成者(ブッタ)の遺骨の供養(崇拝)にかかずらうな。どうかお前たちは、正しい目的のために努力せよ。(中村元訳 ブッタ最後の旅)

要約すれば、葬式と遺骨崇拝に心わずらわせるな、遺体を焼いて、骨を拾つたり、供養の対象にするな、なぜなら正しい目的のために努力することだけだ。

その「ブッタ」の遺言を「アーナンダ」及弟子、信者達の悲嘆と愛着と追慕の念から「帝王」の遺体処理と同様になされた。入滅後七日後から火葬に付された、さらに七日後遺骨を八等分し、マガダロ王及び地域の入部族に渡され各地で卒塔婆(塔)を作りブッタの遺骨を安置した。仏舍利に対する供養の始まりである。

帝王の火葬の方法は、まず遺体に新しい布を巻き、更に綿で包む。それをなんども繰り返してから、鉄の油槽の中に入れ香料をふりかけた、薪の上において火葬に付す。「大般涅槃経」に記す。

仏教の葬式の原型、遺体を火葬後その遺骨を墓にて供養すること。

(二) 日本の墓

古代（四世紀）―（七世紀）は前方後円墳、これは首長墓。

平安中期から現代まで、五輪塔形式日本人の発想である。形式は五段にて下方から四角、円、三角、宝珠形で地、水、火、風、空の五大要素または人を模す。下より膝、腹、胸、面、項にて坐して瞑想の姿です。

インドはストウーパ輪円、中国は方形の輪郭です。日本の石柱墓は自然観や感覚が映し出る。石という素材の手ざわり、祖先と一層の近親感を覚える。

墓が出来るまでは、遺体は野山に放置し、河川に流し海に流した。仏教の伝来から穴を掘って墓をたて遺骨の供養をするようになった。これは、徳川幕府の統制、寺請制度による国民皆仏教徒となって、墓が寺に設置されて、寺と墓が同義的になった。現在仏教徒は死人があればその願寺にて葬式する。春秋の彼岸会、盂蘭盆には墓参をする。

(三) ながながと葬式による火葬とその遺骨崇拜の墓のことを書きましたが、これは現在の仏教徒の葬式仏教ではないかと思われま

れます。ブッタは確かに葬儀の必要性を宣言されました。しかしアーナンダ及弟子信者によりブッタの遺言を裏切った。何がために裏切ったということの意味するものは、弱い人間の悲嘆と苦し

みのなかで生きることにて、ブッタの教えを発展する基礎を作るためであった。事実ブッタが死んで仏教が本当に蘇ったのである。

現在寺院の仏教を葬式仏教と嘲笑せず、人間のその死の儀礼を執行しつづけたからではないか。忘れてはならないのは、その葬式仏教は日本だけではない。それはインドにてブッタの死とともにじまった儀式である。「大般涅槃經」に全部示しているのである。

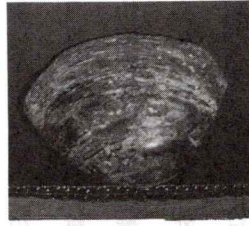
老を楽しく

第十二期生文芸学科 山中 節

お陰様で三人の息子は家庭をもち、それぞれに巣立ちました。主人と二人でゆっくり余生をと思ったのも束の間で、主人は永遠の眠りにつき、その日から、私の一人暮らしが始まりました。それからはみ仏のご加護のもと、生かされている喜びに感謝し、命の尊さを知り、老後を生き生きと暮らしたいと考えてきました。

時折り訪ねてくれる子や孫との出会いを楽しみに、地域の皆

様の友情に支えられながら、老成で学んだ短歌や書、またいろいろな趣味に生き甲斐を見つけて、元気で毎日を送っています。これからも、地域の老人クラブ、仏教婦人会の一人として皆様と共にいろいろな事業にも参加して、意義のある日々であることを念じ頑張りたいと思います。



ズニニコ

第十三期生スポレク科
中井昭二

本棚の片隅から、ほこりをかぶった土の塊が出てきた。すぐに思い出した。これは、私が小学生の頃、隣村の佐山の山で見つけて大切にしていた貝の化石である。土は、この地方独特の「ズニニコ」と呼ばれる岩石である。

甲賀町の地質、土質は、北部と佐山地区と、私が住む南部油日地区の一部が、第三紀層の頁岩けつがんからなり、特殊な重粘土地帯で、当地では「ズニン」「ズニニコ」等と呼んでいる。

この頁岩を乾燥させて砕き、または一冬厳寒にさらして風化させ、腐蝕土を混合し、田畑の客土として、現在も使用してい

る。粘土質の強い当地の土壌には、乾燥した頁岩を入れると空気や水の流通がよくなるのであろう。この「ズニニコ」が、カリ、燐酸を多く含むとして、大豆類を播くと、肥料と手間をかげずに収量の多いことも知られている。

凝灰質頁岩中に、ときには、貝の化石が見つかることがあると聞く。私が採集したのもその一つであらう。太古は、この地方も琵琶湖の底であったのだと、今更のように感慨深いものがある。本棚に忘れ去られていた貝の化石は、ほこりを払って、しばらくは机の上に置くことにした。

教職にあった若い頃は、現在の紙粘土等のよい材料がなかったので、この「ズニニコ」を子供達と山へ採りに行き、それに彫刻の学習をさせた。ところが、この土は、乾燥すると自然に細かくひび割れるので、種油を塗り、乾いたらまた、塗らせたことを思い出す。

私が地域のおちこちに、町の美化にもと、花壇を作り始めて十年目になるが、何しろ、瓦礫の捨て場のような荒地が多かったので、自分の家の畑のように育たない。そこで、今年の冬は、この「ズニニコ」を入れて、土壌改良をはかれば、もっと美しい花を咲かせることができるだろうとは思っているが……。

私と数珠と陶芸と

第十三期生陶芸学科 徳地 弥一郎

私も今年七十七歳の馬齢を数えることとなり、加えて戦後間もなく愚妻と結婚して既に五十年となり、期せずして喜寿と金婚の慶事を重ねて迎えることになった。

この喜びを親類縁者にもと、去る一月自宅にて小宴を催した際の引出物の一つに自作の花壺を使った。一年ほど前から月に一〜二個子供の頭大の円い壺を作り、信楽の穴窯で焼いて貰い漸く二十個余り出来上った。うこん色の布で包み桐箱に入れると結構良い引出物の一つになった。招待客からも心のこもった何より良い記念品と喜んで貰うことが出来た。

自分の作品に少しは自信を得た。私は更にもう一人どうしても貰ってほしい人があった。その人は思いもよらないことで知り合った三十年来の友人である。

参宮線の列車の中は案外空いていたが、私はその紳士にちょっと目礼をして前の席に座った。そしてふとしたきっかけから言葉を交わすようになった。

彼は宗教家であり二見教会の会長であった。いろいろ話をす

る中で、私は浄土宗の信徒であり、とりわけ私はどこへ行こうとも、数珠だけは必ずポケットに持ち歩いている。そして数珠に手が触れる時励まされ、叱られ、正され、勇気づけられ「お前は仏教徒だろう」と常に軌道修正をしてくれる心の羅針盤ですと話していた。そして話は更に弾んでいた。

やがて列車が私の降りる貴生川に近づくと、「どうでしょうか？ 宗教を越えて生涯の友になってくれませんか」と言ってくれた。私も早速同意して列車を降りた。互いに見ず知らずの者どうしが、短かい車中での語らいの中で生涯の友を誓う不思議な出会いであった。

以来三十年、八十歳になるその友が最近足を痛めていると聞き、早速自作の伊賀壺と、お薄茶碗を持って二見を訪れた。彼の喜んでくれたことは言うまでもない。

つい先頃までは数多の役職で多忙を極めていた私も、今では漸く解放されて今日では作陶でもと、のんびり土を揉んでいる時、何だか眼頭が熱くなり、ふと頭に浮んだ三十一文字、歌と言うには余りに幼稚かも知れないが……。

明け暮れを陶に托して生きる吾過ぎたしあわせ土に涙す

老 い

第十三期生陶芸学科 北村政男

思えば三十有余年も連れ添って来た最愛の妻が、平成二年桜の花が咲き乱れるこの季節に、今世紀最大の人類を脅かす癌のために倒れて逝ってしまった。

風邪にしては長びく苦痛に、病名を知らない彼女もなかなか癒えない容体に、幾度何かを感じたに違いない。六十二歳ではまだ早い、この年齢でどのように死を覚悟し、そして死を迎えたのだろうか。

死後六年が経ち、過日七年の法要を営むことができた今、独居老人の最も象徴的な見聞を体験してきた。

本格的な高齢社会を迎えて、いづれ家族に何かの形で面倒を見る義務があるとしたら、看られる側からの視点も重要で、極く自然な行為であるのに、果たして尊厳を保って死んでいくことができるのか。

私は独り暮らしを続けてから、家族の団欒を知らずに彼等と離れて無常の廻り道が続いている。何故か共生ができないでいる。幾度か祈りと可能性を信じてきたが、今だアプローチに至ら

ないのが不思議である。このままやはり無意味と思われる現実が続くとしたら、最大級のストレスと考えている。

そしてそのストレスを乗り切るのは当然、家族的な感情であり愛情であるのではないかと思う。

私達のようなバラバラの住いでは、最も信頼される筈の親子の絆は勿論望みの薄い出口のなかなか見えない永遠のテーマのように思われてならない。しかし現実には家族の構成が維持しているように見えても、家族による老後が保障されている訳でもないようだ。だからといって人間が駄目になった訳でもない。精神的な贅沢もこれまた不発に終りそうだ。

高齢者一人ひとりが、よりよき生の選択と死を迎えるために自らが準備しなければならぬところまで来ているのではないかと私は思うようになった。

私達にも遠からず心の寂しさその日がやってくる。刻々寄せる老化を自分の力だけで生きるにも限界がある。まだまだこのような悩みと、不安を持つ老いた人達を見受けることが多く、正に現在の福祉国家の縮図をみたようで切ない。

私達の町においても、長寿、常楽の理想郷建設を始め、老人施設として、ケアハウスとデイサービスセンターの建設も完成間近かで、うるおいのある福祉の発信基地を目指している。

これからは各市町村にネットされていくであろう福祉に、弱者に対する抜本的なこれらに応ずる手段が求められていくであろうと望みをかけている。

いたわりと優しさ

第十三期生文芸学科 杉江節子

戦後の国民文学者として愛された偉大なる歴史作家、司馬遼太郎さんを送る会が大阪のホテルで行われました。

遺影は生前好まれた菜の花に囲まれ、楚々とした華やかさの感じられるものでした。

この会の参列者には全員、司馬遼太郎さんが小学校六年生の国語の教科書のために、書き下ろしたという「二十一世紀に生きる君たちへ」のプリントが配られました。いたわりや優しさについて書いたメッセージだったそうです。

この記事を読んで、これからの日本を背負って立つ若者にとって一番大切なものを教えて下さったようで大変感銘を受けました。

「自分に正直に生きたい」とよく言われますが、この言葉は

いかにも自己に誠実である如き印象を受けるが、本当に誠実なのか、「自分に正直に生きる」とは言ってみれば、腹が立った時はストレートに怒り、また好きな人が出来たら人の夫でも妻でもかまわず、その人と関係を結ぶということであろう。要するに自分の思い通りに生きたいということなのである。このような生き方が果して真に自分を生かす道なのだろうか。

(三浦綾子の泉への招待より)

私は「自分に正直に」ということは自分勝手な行動をとり、相手に対するいたわりや優しさが欠けているような気がします。これに更に勇氣と決断も共に持つて欲しいと思います。

恋をしなければ心のときめきが、失恋をしなければ心の痛みが、手足を悪くしなければその不自由さが、病気になるなければ病人の気持が、年をとらなければ年寄りの心の淋しさ、行く末の不安さがわからない。これらは皆想像は出来ても、実際自分がその立場に立った時に、初めて本当の喜び苦しみがわかるのです。

愛と信頼をもって人に接し、それらを裏切らないことが、人間として最も本質的に大切なことだと思います。これが本当のいたわりと優しさではないでしょうか。

ひとり一人がこのような気持であればいじめ問題もなくなる

のではないかと思う今日この頃です。

ポケットサイズの電話帳

第十四期生陶芸学科 徳地 幹 夫

机の引出しから使い古したポケットサイズの電話帳が二冊見
つかった。電子手帳を持ち歩くようになってから、お休み頂い
ていたものである。

私は、昭和二十三年水口保健所を振り出しに京都の病院や県
の衛生環境センターで、医療や公衆衛生に関する検査と調査業
務に携わってきた。

引出しの中で休んでいた電話帳は、昭和四十年頃から使っ
たもので、万年筆、ボールペン、鉛筆などいろんな筆記具で
書いてある。丁寧に書かれているものもあれば数字が踊ってい
たり欄外にはみ出ているものもある。机の上、電車の中、場合
によっては立話をしながら書いたこともあり、その名残りだ。

お世話になった先輩、同僚、官公庁や研究所のはか出張先の
ホテルの電話番号もある。役所や研究所の欄に個人名が併記さ
れている場合もある。建物と併せて当時の人達のことを思い出

させてくれる。年代順に眺めてみると、仕事や交友関係の移り
変わりも反映されていて当時が懐かしい。

特に意識して残しておいた物ではないが、さりとして改めて処
分する気にもなれないので、また当分引出しの中でお休み願う
ことにしよう。

お竹如来

第十四期生陶芸学科 井上 謹 三

平成八年三月五日滋賀会館で神社関係大会が催された。大会
には「江戸人から見た娯楽としての神々」と題して、法政大学
教授田中優子先生の講演があった。

講演内容は、江戸の人々の神仏への信仰の有様を楽しく話さ
れた。山の神々、田や川の神々、森の神々、伊勢参り、観音信
仰、お稲荷さん、歴史に消えた武将や、芝居の狐、曾我兄弟の
怨霊、忠臣蔵の忠義を弔う人情を語られた。

江戸の人は、隣の人は神仏の化身ではないかと、信心深く人
情厚く暮らしていたのである。

この話の中で、お竹さんの話が注目を引いた。

お竹さんは、お手伝いさんで大へん慈悲深い人であった。自分の食べる物も減らして、乞食などに施しをしていた。親切な心優しい人だと評判になっていった。

町のある二人の人が、同時にこのすばらしいお竹さんのことを夢で見たのである。二人が同じ夢を見るとは、不思議なことだ、いっぺん見にいこうと、二人は出かけたのである。寝ているところをそっとのぞくと、後光がさしていて朝には姿がなかった。それは、大日如来様の化身だったのである。隣の人が皆神仏の生まれ変わりだと、一層信心を深くするのでした。

* * * * *

私は、川柳が趣味です。老大で教わったボランティア精神で一人でも多く川柳を知って頂こうと頑張っています。

させそうでさせない下女はお竹さん 二二

これは古川柳（末摘花）の句です。今までどうしても解せなかったのですが、講演を聞いてやっと解説をすることができました。

五七五の深い歴史の中の人々の思いを待して、感謝を捧げ供養を申し上げる気持ちで、信仰深く我が趣味川柳の道を進みたいと思います。

二十一世紀

第十四期生陶芸学科 奥村義雄

間もなく二十一世紀。戦火のない平和な世紀を迎えてほしい。けれどもこの思いとは別に、来世紀には大変な難題が待ち構えている。

思えばこの二十世紀、世界は驚くべき発展を遂げてきた。しかしながら今日に至って「生活は便利になった。けれども大量に物を作り、使い、捨てる生活が広まった現代は、地球環境や資源の面で、遂に行き詰まりを見せ始めた」と平成七年版の環境白書が警告するように、この地球上に暗雲が漂い始めた。

しかし、どうであろう。近年消費者の購買力が落ち込むと喜ぶどころか、不景気到来とばかり世界中が右往左往の状態となる。世界は今、明日のことより今日のこと一杯なのである。このような二十世紀の悪夢を引きつりながら、二十一世紀には地球と人類の総決算が迫られる。

こうした二十世紀末の社会を作ってきたのは、十八〜十九世紀にかけて起った産業革命以来、物の大量生産と共に、これに

伴って生まれてきた人口増加によって大量消費が起ってきたからである。人口の推移を見ると、産業革命以前は八億人ぐらいそれが現在五十八億人、そして五十年後には少なくとも一〇〇億人に達すると言われるのである。まさに人類の生態系が狂ってしまったと思えない。

ところで、現在五十八億人が生活するだけで、この地球の生命力が衰えを見せ始め、食糧や水資源等も危機状況を迎える中で、今後発展途上国のアフリカ・アジア・中南米で爆発的な人口増加が起るとすれば、一体どうなるのでしょうか。しかも、貧困にあえぐこの人口抑制は、まことに絶望に近い感がする。

こうした二十世紀末の現況を見るにつけ、来るべき二十一世紀には第一に地球と共生する社会に戻さざるを得ない。第二には、絶望的と思われる発展途上国の人口抑制が至上命題となつてこよう。これらのことは、現代社会や人々の生活の大変革をもたらず、まことに容易ならざる難題となろう。

さて、どうでしょう。こんなことはまだ遠い先の話とし、耳をふさぎ、目を閉じてしましようか。

近頃思うこと

「わて近頃物忘れがひどうなつてついでこの間もどこかの人と道で会つてな、向こうさんは、わてのことよう知つてはって語りかけてくるんやけど、わて顔は知つてゐるんやけどどこの誰やら名前が、どうしても思い出さへんのか、けど途中で、あんなさんどなたさんですかと聞くわけにもいかんし、まあ適当に調子合つて別れたけど、バツが悪うてなあ」

「いや、あんただけと違うで、わし昨日大工しててな、物思ひ出して取りに行つたんやけど、一瞬ど忘れして、何取りに来たんかいなあと思ひ出さへんのか、仕方ないから思ひ出した場所に戻つて、やつと思ひ出す始末や」

「しやけど、思ひ出す間はええで、思ひ出さんようになつたらおしまいやで。ボケ老人になつてその辺うろつくようになるで」

「ほんまやなあ、ボケたらかなわんな」

「あのなあ、ボケ老人になつたら、食べても食べても度忘れしてな、鍋一杯食べるらしいで、ボケて寝たきりでもなつてみい家庭の悲劇やで」

「わしボケて寝たきりになるまで長生きしようない、嫁さん

に迷惑かけんように、その前にポックリいくんや」

「ポックリ行けばええけど、そんなにうまく行けへんで」

「いくいくそう思うてな、毎年奈良のポックリさんにお参りしてらんや、わしは精進がええさかい、仏さんがよう聞いてくれはるわ」と……。

因みに私の母もポックリ寺にお参りしていたが、そこそこの患いで、ポックリ逝かなかった。仏様曰く「逝けへんかったのは、信心が足りなかった」と言われたかどうか知る由もないが、春抄雪の舞い散るゲートボール。練習の合間、ベンチで焚火を囲みながら、老後の不安を垣間見る会話でした。

老後は元気で長生きポックリ逝くのが理想だが、ままたらぬがこの世の常、神のみが知るお年寄の会話、私も思い当る節があり、ボケてはならじと貪欲に知識を吸収するが記憶零、痴呆症の不安を抱えながら明日を生きる。

陶芸を楽しむ

第十六期生陶芸学科 藤田利治

甲西町役場の玄関大ホールの中央に、活花コーナーがある。

甲西町華道倶楽部の人によって、いつも季節の花が活けられている。

ある時花の活けかえに出合った。みるみる花が花瓶に活けられていく。あまりの手際の良さについて、いろいろ話をする事になった。すると先生が、「この花瓶なら是非花を活けてみた」といって花瓶がありますよ」と。この一言は、作陶するものにとって、千金の重みのある言葉に思えた。

甲西町福祉センターに老人生涯学習室がある。これは老人の陶芸教室で、約二十名の人達が作陶出来る。焼成窯〇、三五㎡の灯油窯が設備してあり、釉薬も、鉄赤、織部を始め十六種類もの釉薬が整えられている。

この陶芸教室は、今から八年前に、老陶芸科を卒業した先輩達の並々ならぬ努力によって出来たと聞いている。今でもその人達によって、指導運営がなされ年々盛んになり発展している。現在会員は六十五名。内女性が三十七名で、女性の方が多い。年齢も最高九十一歳だが皆さん元気で月二回の作陶を楽しんでいる。会員が多いので、A、B、C、Dと四班に分け、第一週はA班、第二週はB班と、およそ二十名ほどで作陶をする朝九時過ぎから三時頃まで、ある人は大壺に、ある人は皿に、茶碗にと、楽しく話しながら真剣にロクロを廻す。その間指導

員（レイ大卒）が時々助力を頼まれる。二日で作品が、その班の棚に一杯になる。作品が乾燥すると、素焼をする。次の月には釉がけをして本焼となる。素焼、本焼は指導員が担当するが昨年度の素焼二十七回、本焼三十回で、実に窯の稼動は月五回平均にも及ぶ。窯詰から始まるその世話は大変だが、作品を手

に喜んでくれる人を見ると、何より嬉しいものだ。

私も昨年レイ大陶芸科を卒業しお手伝いの端に加えてもらっているが、会員の誰もが人生の一仕事を終え、無心に土に楽しむ姿を見、中食を囲んで話に花が咲くの聞いて心が和む。この時ほど社会参加の意識と、その喜びを感じることはない。

せっかくの機会を生かし、もっと勉強をし、花を活けたくなるような壺が一つでも出来ればと思う。

奥村家とは次男坊だった父が分家して初代、僕が二代目、そして残念ながら僕は長男、次男を亡くしているので四代目として孫が継ぐことになる。ややこしいようで、家系図を書くとな案外簡単なもの。

僕は奥手

奥村 稔

なんでも良い、随筆ひとつ書いてんか、気安く原稿用紙を置いてゆく友、困らせるものである。

人生わずか五十年、花にたとえて云々……と読経の続きに母



結婚記念日 (昭和26年10月25日)

妻に「結婚したんいつだったかな」と聞いたたら、「あんたそんなこと忘れてるの、みずくさいもんやなあ」と一言。二度と聞けない。古い写真を探し出したら、あった結婚式の写真、幸せなことに写真屋が年月日を入れておいてくれた。助かった。本当に良かったと思う。

生涯学習と嬉しい時代。レイカディア大学も卒業し、淡海塾の郷土史入門講座に参加させてもらった。その終講で

●記憶は書いて残そう

●記載はできる限り編年順に

●写真には日時、場所を書いておく

郷土史刊行の必須項目として習った。

年忌で思い起こした母の人生にも年月が必要ではないか。家系図一つ書いても結婚日の記載が嬉しいではないか。残念ながら長男、次男の没の日も忘れがち。書いて残そう。なるほど大切なことだ。

人生五十年ならもう越えた。今の平均年齢からもうちょっと余生がある。

郷土史刊行など大それた欲望はないが、受講で得た知識はしっかり生かしてゆくつもりである。

近江八幡支部

HIV和解に

命の貴さを知る

第四期生陶芸学科 安田泰三

「人は殺されるために生れて来たのではない」——Hiv（エイズウイルス）訴訟原告の一人である川田竜平さん（二〇歳）が、和解調印式で述べた言葉の一節である。私は新聞でこれを読んで、いくら勝訴となつて、例え何億のお金を積んでも縮められた命は元に戻らないのです。原告の方々にすれば心から喜べる勝訴ではないと思います。

過去を省りみると、どんなに多くの人が殺されてきたことだろうか。五十年前の昔大東亜戦争の戦死者または一般国民の死者、最近ではオウムという宗教の仮面をかぶった集団に、善良な市民が何人も殺されました。些細な争いで殺された人もいます。誰も殺されるために生まれてきた人はいないので。

川田さんの言葉をしっかりと胸に刻んで、お互いの命を大切に思いやっていきたいものです。

妻は逝きました

第六期生園芸学科 小林 嘉蔵

平成八年一月十七日、私一生涯で一番めでたく喜ばしい一日でした。

現在しゃくなげ会理事長であり、あの有名な元滋賀県服部知事時代の副知事でありました諏訪三郎先生の御代行がわざわざタクシーで私宅まで米寿のお祝にと、梅山圓了天台座主御揮毫の色紙を伝達のため御足労下さいました。親族及び会員代表等列席、めでたく拝受しました。

その日、その時、共に祝ってしてくれた妻が十四日後の同じ年同じ月の一月三十一日急に病状悪化し還らぬ人となりました。今まで同じ屋根の下で二夫婦揃って喜びに浸っており、また嬉しい時も、悲しい時も互いに助けあって六十三年の永い年月の夫婦も一挙に夢と帰し悲しくも今生の別れとなりました。如何に諸行無常とはいえ、余りの急変に唾然としております。毎日泣いてもおれず、妻の死によってひとしお仏縁が深くなり、朝夕読経、御文章を拝読するのが日課となりました。

夫、人間の浮上なる相をつらつら観ずるに、およそ、はかな

きものはこの世の始中終、まぼろしのごとくなる一期なり、さればいまだ万歳の人身をうけたりといふことをきかず、一生すぎやすし、いまにいたりてたれか百年の形体をたもつべきや、我やさき、人やさき、けうともしらず、あすともしらず、をくれさきだつ人は、もとのしづく、すゑの露よりもしげしいへり、この有難き御文章を御念仏申している毎日です。合掌

住み良い町

第七期生文芸学科 北尾 正一

老人大学卒業後、老人クラブ活動に従事。役職も務めてきました。平成五年より神社氏子総代関係の仕事をしております。近江八幡市市内には六十二社の神社があります。副総代役を務め県大会、全国大会共に参加致し氏神様の神徳の高揚に尽力致しております今日この頃です。毎年一月六日近江八幡市日牟礼神社にて新年総代会に歌会があり今年も上位入賞させて頂き、老大で教えて頂いた歌が今になり甦りました。ご指導頂いた先生にお礼申し上げます。

私が住んでおります上田町篠田神社についてご案内申し上げます

ます。近江八幡駅南口より約二キロの位置にあり、上田町バス停より東へ徒歩で五分ほどです。

おおくにぬしのみこと

大國主命 他二柱の祭神とし明治以前までは上田神社といわれていたが、その後古い地名である篠田郷にちなんで今の名で呼ばれています。

境内に正長元年、西暦一四二八年を刻した宝篋印塔ほうきょういん一基、市指定文化財があります。

毎年五月四日の夜八時過ぎ当神社の境内で行われる仕掛花火は日本古来の花火製造の技術を受け継がれております。化学薬品は一切使用せず硫黄、硝石、桐灰を調合して氏子皆々様のご奉仕で約一ヶ月余りかけて作られていく。この和火は点火されると一面煙に包まれてしまいが、暫らくすると煙の中から素晴らしい藤色の花火の絵が浮かびあがるのである。実に優雅で情緒豊かなものです。近江八幡の左義長、松明祭と並んで近江八幡の火祭として県の無形文化財の指定を受けております。日本ではどこにもない花火です。

皆様も一度見学に来て頂ければ幸いです。雨天の場合は一
日延期されます。古来の伝承を守り住み良い町づくりに励み務めております。今後とも何かとよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが皆々様の益々のご健康と幸せをお祈り申

し上げます。

元気で長生き

第八期生文学学科 岡田 富治郎

私達は永い間、お上にはお願いするものだという習慣が身につ
いており、今だにそのような考えに支配されているようです。
その最たるものが、生活保護でして、これはお上がくれてやる
という発想から生れたもので、日本の福祉の原型とも言うべき
ものです。だから今でも福祉のサービスを受けることは不名誉
だと考えている人、福祉の窓口を訪れるのもためらう人がある
ようです。

高齢化が進んでいくに従い、老人のためのいろいろなサービ
スが提供されるようになりました。ところがこのサービスが余
り知られていない面があるように見受けられます。これは先に
述べましたように、福祉は与えられるものという考えが、行政
にも受ける側にも今だに残っているように思われます。例えば
小学校への入学などについては、こちらから何も言わなくても
行政から通知が参ります。福祉は申請主義ですから、こちらか

ら言わないと構ってくれませんし、積極的に住民に知らそうという姿勢が伺われません。

次に福祉サービスは主として自治体が主体となっていますので、先進市町村と後進市町村とによって大きな差があることで、今公的介護保険の問題が論ぜられていますが、この保険のサービスが自治体によって大きな差を生じるであろうことが懸念されます。それと介護してくれる人を確保することが出来るかが重要な課題だと思います。

みんな長生き出来るようになりましたが、健康でなければ長生きも喜んでおられません。老人には骨折と風邪が一番悪いそうです。今年は正月の二日から二十日頃まで三十八度前後の熱が出て、風邪の恐ろしさを知らされました。お互いに気をつけて元気で長生きしたいものです。もしも病気になるたら早目に医者にかかり、福祉サービスも受けるようにしましょう。暖かくなりましたので内に引っこんでおらず、外へ出るように努めましょう。

人の運命

第八期生文芸学科 山路 正太郎

人は生まれながらにそれぞれの運命を背負って延々半世紀半を、いやそれ以上に生き延びることが出来る。でも人によってその運命が支配する域が違うと思う。僅かな年令にて終息、二十余年にて他界、両親を落胆、悲しませる不幸な型、大人として、親としていろいろな職種にて経済戦争に活躍する社会人は生活経済的地位にうち勝つため奮闘努力するが、欲望と見栄に敗れ職域の前途を失う型、職責によって前述を失う気の毒な型など、なんの障害もなく前途洋々とエリートコースを進み自信に満ち溢れる幸福型、若い時は親よりの特権による楽天型、若くしていろいろな事情により苦勞する人、受けた運命を歩む人生である。正に楽あれば苦あり、苦しみの後は楽ありと感ずる。戦後経済復興に何等かの協力とその苦勞をした我々の年代、誰か「からの雌雄を知らん」うちに現今のような復興は世界の人が驚いたであろう。高度成長が進み社会は車洪水である。昔のように歩いておれば安全かも知れないが時代の移り変りにより時間的余裕がない。そのため交通事故に巻き込まれるケース、昨年のような突発的震災等により長年住みなれた我が家我が町をことごとく消滅、阿鼻叫喚の巷と化した阪神地域の運命、実に人生には生年あり九星あり千支あり方位がある。正に私はこれを信ずる者です。若い人達の中にはそんなもの迷心だと感

ずる人も多いが、昔より伝えられる運勢は信じ得たいものである。一〇〇%と申さぬ、せめて転ばぬ先の杖として考えよう。方位には吉神あり凶神ありだ。実に複雑な人類の生命、私達老入は戦争と平和、荒廃と繁栄の波瀾万丈の時代を生き抜き、今臨終を畳の上で願うが無理な今はせめてのこと、朝に紅頬ありて夕べに白骨となり、近親に迷惑をかけることなく弥陀の浄土へ帰れる運命を願うものです。

老いを思う

第八期生園芸学科 成田俊三

春とは名のみ気象庁初めて以来観測の積雪記録の今日この頃皆様方お元気で暮しのこととお察し致します。私もお陰様で達者で日々過ごしております。日和の良い日は遊び半分に疲れぬ程度に鳥仕事を楽しみ時間を過ごしながら、また友達とゲーボール場に行き面白く時間の過ぎ去るのも忘れ、頭の体操をと楽しみながら運動に集中するよう心がけている。下手の横好きで趣味の陶芸に余念などなく一生懸命に出来る作品はいつも変わらず下手くそですが楽しいです。

阪神淡路大震災から一年余り復興作業も迅速に進みつつあるなか、今だ仮設住宅で不便な生活の高齢者が沢山おられ、病院に行くにも交通機関の不便さに困っておられる方々の一日も早く心配なく安心して生活できる日々を念じるこの頃です。昨日も駅のホームで電車待ちの時、隣りのベンチに腰かけた文化系の学生でしょうか、三人が竹島領土、住専国会での座り込みやオウム問題など対話に余念がなく感銘しながら聞き、生意気にも私は若者達が大きな翼をはばたき社会のため役立つ人になることを陰ながら応援すると念じる清々しい一日を過ごした。

近頃の世相に思う

第八期生文芸学科 小川常三

遅い昼飯を食べてからゴタゴタしていたら三時過ぎになってしまった。テレビは住専処理の国会中継をやっている。おそらく日本国はまだ当分墮落の奇跡を描くのではないかと思う。何か？ほんとうに国家、社会というものを考えていてくれるそういう政治家がいるように思えないからである。そして国民の側も、私に、私の会社に、わたくしのまちに、わたくしの県

にと言うことで、国のためにと言う発想をしている人は極めて少ないのではないだろうか。

民主主義と言うものは、私が一番大切でよいのだけれども、少なくとも選ばれて政治（町―県―国と）に携わろうと思う人は、一段階はもちろん二段階も三段階も上級の私を考え、それを自分を支持してくれる選挙民に説明し、できれば情熱を持たせるように仕向けなければならない。

そんなことを考えていてくれそうな政治家が皆無に近い今日この頃、菅さんと言う厚生大臣だけが、まだ日本にも政治家と呼べる人がいたと言う感じがもてほっとした。

もちろん薬害によってエイズを移され、発病し、殺された方々にとってはあたりまえのこと、むしろ今まで隠していたことへの怒りで胸が一杯に違うが、この大臣の正直さだけは全く闇夜に一筋の光りと私は感じた。

これとレイカディア大学同窓会の十五周年記念とどんな関係があるのか、と聞かれたら、別に何も言うことないのだけれども……。ただレイカディア大学で焼き物を焼いたり、盆栽の手入れを勉強したり、書を書いたり、洗濯の科学を習ったりして、い間の十五年に、何があったのだろうか思ってみただけ……。公害があって、いじめで多くの子供が自殺し、バブルがあって

それははじけた、オウムが殺人をやり、住専がでたらめをやりかし、薬害でエイズを移された人が何千人も出た。阪神淡路大地震では国も県も被害者の早急な救済ができないばかりか、邪魔をしたこともあった。

こう言うことをつらつら思えば、せんならんこと、他人にまかしておけないことがたくさんあるように思った。日本はこのままで良い国になれるのだろうか、何か大事なところで間違っていないだろうか。偉そうなことを偉そうに心配してみました。どうにもならんことですけれども。

生きていてよかった

第十期生生活学科 富田政尾

私は今、「生きていてよかった」と強く感じています。戦争、外地で体験した敗戦の悲惨さ、我が子の遺骨だけ持ったの引き揚げ、戦後五十年を一生懸命に生きぬいただけに、生きる喜びの感動が人一倍強いのです。七十歳をとうに越した私は心から幸せに思っています。「生きていてよかった」と思う生き方の大切さを今後も持ち続けようと思います。そのためにはどんな

舅姑さんへの遠慮もあり、孫を抱くこともせず顔を見るだけで暇をする長男を抱き裏へ出て母の帰る姿を見て泣いた。今もその涙の続きであたりが見えずその下駄を這い這いする長男にゆわえつけてやりました。

そのまま下駄箱の奥に片付いていました。平成七年二月十七日に、「お母さん、母屋の普請をしようか」と言いました。和の宮様の御通行の折、馬を預かり折針の頑丈な家を亡き主人は心の誇りにしておりましたが、負うた子に教えられの諺どおり首を縦にうなづく。一足の祝の下駄が険しい山容を歩き古い母屋から荷物を運び出す段取りとなり、八日市から高倉夫婦、甲賀郡から河合夫婦、京都から北村夫婦が来て離れ座敷へ荷物を運び入れてくれました。

四月九日大工棟梁小川次夫さん、父太兵衛さん、野田猛さん長男との契約が交され二階建て間口五間奥行五間落棟二間奥行七間、今は内造作の最中、六月二十六日広さ一間の御堂作り仏壇移しをして頂き、七月八日古い母屋の瓦降ろし、十二日棟が落ち十五日整地終り。九月五日城南宮様参り十日長光寺さん地祭り有信法院若様二人に鍬入れ式。棟梁次夫様施主太嘉や川守井上久夫で儀式終り九月二十日基礎にかかられ、十月十日家宝の古い品を燃やす。十月二十日台輸入れ終り家宝燃やした灰を

床下にまく。奏上棟平成七年十月吉日施主安田太嘉也五十三歳、代筆井上久夫謹書、十月二十六日上棟職人十人、親戚八軒折詰め、赤飯、寿司、台引焼物、鯛突出し三鉢つつ二色弁当二千五百円。簡単な祝宴となし祝儀棟梁五万円外一万円。小さい祝下駄は遠い道程を歩み続け百年二百年の棟を上げる。

皆様の文面の中に紛れて一生の思い出一年歩み来し思い出を残させて頂き有難うございます。

健康が何よりの宝

第十一期生園芸学科 佐々木 尚 一

常日頃から、「貴方は元氣や、達者や」と、まわりの人達からおだてられて自分もついその気になって年齢のことも考えずに過ごしてきたことが、今思うと横着にもいろんな役職をお世話していたことが、気疲れと過労が重なり師走になり日頃の動作に変調を感じるようになった。思い余って内科医院で診察を受けてみたが、風邪でもないし、少し疲れているようだと言えぬ。貫えず何だか信じられずに年末の忙しい時期でもあり我慢して過ごしていた。歳末も押しつまって大阪の義兄が急死したので

晦日の葬式の手伝いを済まして本当に慌ただしい感じでお正月を迎えた。毎年のようにお正月三日間は大阪の長男宅で家族みんなで祝賀をしたが、食欲がなくお酒の美味しさが感じられずに、熱があるのか頭が重く、胸が圧迫され息切れがして今まで経験のない状態が続いた。

四日に再度医師の診断を受け念のためレントゲン撮影をしてもらったところ、右肺が真っ白でこれは大変だと言うことになった。翌五日に急拠ヴォーリズ病院に入院することになり、急性の肋膜炎で早速午後から胸水を抜きとってもらいやっと小康状態になった。

当初右肺の影のない写真を見て奈落の底に突き落され大変な事になったと悲哀を感じたが、早速数日間諸検査が始まり、その結果肋膜炎の治療のみで安静の努力によって快方を早めるとの主治医から診断され、家族共々ホッとした次第である。長年に亘り月一回の前立腺治療で通院の際に、時々諸検査を受けて異常のないことを信じてついつい横着になり無理を重ねていたようで、高齢になるほど体の不調な時には抵抗の弱い部分に（私の場合は四十年前の肺疾患）症状が現れたことになった。お陰で先生の熱心なアドバイスと特効薬の効果で副作用もなく、一ヶ月余りの入院で肺影が半分以上も固まって撮影され、

やれやれひと安心をすることになり、月末に退院を許可され自宅にて安静治療することになった。本年は特に厳寒の日が多く三月中は居間に引き籠もって安静と栄養に専心しながら、役職の整理と心身の養生に過ごした。

四月になり先生から軽作業と軽度の運動をするように言われて、逐次普通人の生活に戻るようになり、ここまで快方にして頂いたことは神仏のお陰と感謝している。「鬼の攪乱」と言うのか一ヶ月余りの入院であったが、皆様からいろいろとご心配を頂き励ましのお見舞を受けて、人間の落ち目に温情を受けることは地獄に仏で涙の出るほど嬉しく思い、いろんな方達から親しく仲間にして頂いた幸せに感激をしている。

短期間の入院でいろんな患者の生死の修羅場を見聞して、幸にもこの度は軽度の病状にて退院が出来て、健康の有難さをつくづく痛感した。この度の病気をば「天の声」として、「悔のない生き方が爽やかな死につながる。人生の目的は長く生きることではなく、良く生きることである」と法話で聞いたことがある。神様からのお呼びがあるまで「元気でかわいく老いること」を念願にして悔いのない余生を健康で明るく過ごすよう頑張りたいものである。

八十路の身病魔に耐えて春を待つ

健康の幸せ尊さ今に知り

天の声横着するなと諭される

私の姑さんの昔ばなし

第十一期生生活学科 筒井好枝

私の姑さんは永源寺の奥深い蛭谷という所で大地主の娘として育てられたそうです。昔は結婚も早かったのか十五歳で、まだ奥の茨川へ嫁がれたそうで可愛い嫁さんで近所の子供達とまりつきをして遊んだとか。昔は鉱石も出て百戸位は人家もあつたとか、今でも茨茶屋と言われているそうです。そのうちに次から次へと子供も出来て末子が三才の時主人は急死された。それから五人の子供をかかえて子育てと仕事で大変な苦勞をしたこと、夜もろくに寝ず蚕を飼い、夜の明けるのを待つて腰に道具をつけて男のする山仕事に一生懸命働いて五人の男の子を自分の力で立派に育てたなどの昔話で、いつもいっつもいじめられました。何度も親元へ帰ろうかと思いましたが、自分はいよいよ残された夫や子供三人がどんなに淋しい思いをして一生を苦しむかを思えばとても私には出来ませんでした。

炭を俵に計って伊勢まで背負って行き、帰りもまた米、麦、醤油一切を背負ってまた峠を越えて子供達の待つている我が家へ帰って来る、今思っても涙が流れます。その母の苦勞を子供達は十分知っているので親が口うるさく文句を言っても誰一人口答えをする子はありません。姑さんの手や足を見たら働らいて働らいてこんなになられたかと思うと涙を流さずにはいられません。嫁の私は毎日毎日泣き暮らしました。三男の息子が、「お母さんお母さん」と優しく下の世話までしました。

気ままな姑で、造りが食べたいと言っては毎日御馳走ばかり食べておられました。病院の先生が「こんな親孝行な息子は珍しい」と言い、「私が嫁さんを世話してやる」と言つて病院の事務員さんを世話して下さいました。

嫁さんは御飯とお茶を供えるだけで一度もお経を読まれたことはありませんが、息子は欠かさずお経を上げられるのに感心するばかりです。

いつか新聞社がこられて「一生を僻地で捧げた女」と題して新聞に載り、また今度滋賀県下の湖東、湖北、余呉あちこちの僻地で一生苦勞をされた人の話が出て本が出版されました。立派なお仏壇も買って本も新聞も額におさめられて三人の息子家族に大切に大切に守をもらつておられます。

終戦当時を省りみて

第十一期生生活学科 広田民子

昨年は戦後五十年を記念して国を挙げての多彩な行事をテレビで見ると、国のためとはいえども若く尊い命を戦場の露と消えた多くの勇士の方々及び犠牲者の肉親の方々に対し、心より追悼の意を新たに致すとともに当時に思いを走らせながら、ペンを執りました。

物資不足で悩み、また日々空襲空襲の明け暮れの国内状況に不安と恐怖を覚えながらの生活、そんなある日ラジオ放送で知った「終戦宣言」陛下の声を耳に致した時の驚き悲しみ、五十年経し現在も忘れはしないあの惨めさの一瞬を……。

神代この方一度も負けたことなく月日と共に国の光が輝き渡る「また「日本海海戦」の神風の話等、小学校時代習った国語も空しき夢と消え去りました。また涙ながらに見た特攻隊の映画、生還なきを覚悟の上見送る友に笑顔で帽子を振りながら機上の人となり雄々しく散りし若人の胸中如何だったろう。

青春の淡き想い胸に秘め飛び立つ勇士の姿いづこに
敗戦の色濃くなりし時、何故早く終戦を決意されなかった軍

部に対し憤怒を覚えると共に無謀な軍略が多くの犠牲者を……

尚新たに増したことは確か戦後五十年を過ぎし今日、物資は豊かな平和な我が国ながら、でも戦争の傷跡はまだ数多く残る諸問題を抱える現在の状況、戦争とは多大な犠牲が常に伴うことを忘れず、礎となられし方々の死を無にすることなく、戦争知らぬ子や孫に再度私達のみじめさを味わうことなきよう真実を伝えると共に、真の平和な世界が永く続くことを祈願することこそ、その世代を強く生き貫いた私達の使命と 생각합니다。

楽しさよりも苦しきことのみ多かりし青春時代より五十年過ぎし現在、世代は子から孫へと移り、老いの身となりし私はその頃を振り返る時またまた全ての点で感謝の毎日です。誰がある頃、現在の生活を予期したことでしょう。

何歳までの生命か知る由もありませんが、子や孫の重荷にならぬよう特に健康管理に気をつけ残る余生しっかり歩みたいと思います。

健康に感謝家庭介護を手伝う

第十二期生生活学科 石部 八重子

昔から「暑さ寒さも彼岸まで」と、耳にしましたが、今年は天候不順で今日も冷たい一日、年を重ねるに従って春の訪れを待つ今日この頃です。

隣接のSさんの奥さんが、昨年四月脳硬塞で倒れ入院。左半身不随に後遺症の痴呆が併発、二ヶ所の病院で医師の適切な診察で脳循環と種々の点滴の処置で一応、環境の変化も最適の見解と医師の指導で家庭介護に切り替え、一月二十五日退院され自宅介護のお手伝いに携わりました。

私は病人食の世話と話し相手と献立は糖尿食で塩、砂糖ひかえ薄味で、普通食の私は戸惑い献立表とにらめっこで調理し、今では上達し楽しくなりました。右手で箸がつかめるので食事はSさん自身が口には運ばれますが、つきつきに口一杯に飲みこむことが儘ならない様子です。横からふぼれ落ち見苦しい状態ですが側でアドバイスしながら共に食事をします。

発病後の新しいつきあいで私の名前もわからず、昔の友達は記憶がよみがえって、トンチンカンな話に合わせ対応しながら

言葉は人間にとって有力なコミュニケーションであり、脳のリハビリテーションと考え語り合っています。

Sさんの身のまわりの介護すべてご主人様が夫婦とはいってもその筆舌に表わせないほど本当にいたいたしい献身的な介護の姿を目の前で見て感動し頭の下がる思いです。

ある新聞に「痴呆理解の七法則」 (一)昔の記憶はあるが新しいことを忘れる。(二)より身近な人に対して痴呆症状が強く出る。(三)自分にとって不利なことは認めない。(四)物とられ妄想がある。(五)話したり聞いたことは忘れても感情は残る。(六)こだわりがあり説得否定すると強まる。(七)知的機能が年齢とともに低下してくる。等痴呆と上手につきあっています。早くありました。

年齢と共に身体は老化し、顔のシワも深まりますが、心は、「生涯青春」で健康第一自己管理し、これからもSさんと心の通うお手伝いをめざし、全てに挑戦しご主人様の真心の介護に応えたいと思い御祈念申し上げます。そして健康な老後を送りたいと思います。

友愛活動を省りみる

第十二期生生活学科 伏 西 千代子

例年にならない厳しい寒さでした。風邪を引いてばかりでした。ようやく窓越しの日差しが輝き春暖の訪れとなりました。友愛訪問にも出かけやすくなりました。(寒い日は辛く思います)仲間を誘って今日も訪問に出発する。

お訪ねすると、家族の方が「御苦労様です」との御挨拶をして下さいます。(私達もお訪ねした甲斐があったと喜んでいます)ご本人も喜んでお話をして下さい。お茶をすすりながら少々言語障害がありますが、四方山の話をしていきますと、笑顔を変えながら楽しそうでした。

その反面、二度三度お訪ねも致しましたが、声帯が悪く寝たきりの方です。お話をしかけても、じっと顔を見つめて喜んでおられるのか、うるさく思われていられるのかは、目を見つめていても判断に苦しみます。気の毒な方です。家族の方も大変なご苦労なことで存じます。私も心に打たれました。

私も姑の看病をしたことを思い出します。寝たきりの病院生活二年半余りで、家に帰りたいたいと言いますので、許可を得て退

院することになりましたが、家に帰られてもしばらくしかもちませんよと言われました。退院して四十日余り、この間の食事は流動食で病院へ受け取りに行きます。下の世話から一日おきの体拭きという有様でした。看護とは大変なものです。

私のような者でもお役にたてばと、友愛活動でさまざまなお宅をお訪ね致します。心の安らぎにとなればと手作りの小物を持参して参ります。次の訪問には何がよいかと思案を致します。

先祖のお陰

第十三期生陶芸学科 中 島 湊

日頃より町内でお世話になっている方の熱心なお勧めを頂き県立婦人センター展示ギャラリー企画展に展示することになった。まず、ギャラリーの広さに驚いた。尻込みするしかなかった。喜寿会十四名の陶芸仲間に応援のお願いをすることにする。快諾を得た。十三期、十六期の仲間も応援に参加してくれる。有難いことだ。二十四名の友情出品も快諾を得た。

平成八年十二月一日より十五日までの十五日間、看板作り、運搬、展示、受付係の割付など協力してくれる。一日の午前中

には見事な展示場が出来上った。友の協力で感謝する。テレビ局、新聞、婦人センター、ひまわり広報クラブ等の広報活動、陶芸科、OB、多数の方々の応援活動により雪の多い寒い二月であったが、多数の来館者を迎えることが出来た。来館者の激励のことは、多数の方々からの励ましの手紙を頂き、こんな嬉しいことがこれまであっただろうか。感謝してもしきれない気持ちで一杯だ。十一月には、この仲間達と共に陶芸の森において登り窯にて焼成に挑戦する。もう作陶を始めている。友に感謝し、友と共に語り、この心に泌みる思いを生涯の宝として、この陶展を機に益々精進して作陶を続け友についてゆけるように頑張りたいと考えている。この幸せな気持ちになれるのも、先祖のお陰と喜んでいる。

秀次公に学ぶ地域づくり

第十三期生園芸学科 久郷 泰次郎

近江八幡市の旧八幡町は城下町として、珍らしい碁盤の目に街が出来ており、旧京都市街と同じである。天正十三年（一五八五）秀吉の甥に当たる秀次が八幡城を築いた。そのとき城下

町として新しい構想のもと、琵琶湖に通じる水路交通の八幡堀町の発展のため築市楽座、日本最古の下水道等々、画期的な町づくりをした名君として、現在市民に親しまれている。

私達の習った小学校時代の歴史では、秀次は八幡城を築いたのち、摂政関白になるが、秀吉の不信をかって、二十八歳の若さで高野山青巖寺で切腹をさせられた。一般に秀次は素行が悪かったなどと悪評が強く、摂政関白を殺生関白とも言われたが秀次はそのような人物ではないと思われる。

現在の近江八幡市を考えると先覚者も沢山おられるが、秀次公の人物をしっかり研究して、大いに学びたいと思うものである。秀次公は、信長の天下人としての感化も受け、次のような人物である。（童門冬二先生の講演より）

(一)平和、(二)豊かさ、(三)公平、(四)正しく、(五)自己の向上、(六)パフオーマンス、(七)安定、等を基本として城下町を繁栄させたと言いました。秀次公没後城下町に住む人達の中に近江商人となり全国にその名を知られ、旧八幡町は経済の町として栄えた。

時代も変り町村合併により、昭和二十九年（一九五四）に近江八幡市になり、湖国の中核都市として、着実に発展してきたが、二十一世紀を展望し益々発展させなければならぬと考えらる。童門冬二先生は、近江八幡市に三つの壁があると話された。

(一)物の壁、(二)しくみの壁、(三)心の壁、等を指摘され、市民の一人一人が秀次公を研究し、(一)先見力、(二)情報力、(三)判断力、(四)決断力、(五)行動力、(六)体力、等をもって町づくりをすべきであると指導された。

近江八幡市では、市の総合発展計画により、市民へいろいろ講座が開かれている。市民はこれに参加し、市民の声も反映すべきである。今住んでいる人々が市に魅力を感じ、全ての人が永住したい。また他府県の人々も、八幡に行きたい、住みたいと思われる市にすべきだと考える一人である。

身辺雑感

第十三期生生活学科 高柳治子

二月二十一日、何気なく目を落した朝刊の社会面に、「全盲男性ホームに転落、新快速にはねられ即死」という記事があった。読むうちに、事故は近くの篠原駅の構内でしかも大辻さんとのことであった。大辻さんとは何年前か前、点字図書館の催しで水茎の葡萄園へ同行したことがあった。たった一回の出会いだったが私の脳裏から離れないほど印象深い思い出があった。

その日も話題は専ら彼の生き甲斐であるマラソンの話に終始した。眼が見えないというハンディが嘘のように足どりも軽くさすがスポーツマンという感じの人だった。一日の日程を終え大ききの揃った四房の葡萄をお土産に、帰路に八幡駅の南口から階段を上った。雑踏の中を行くと、遠くの方から手を挙げ、「お父ちゃん、お父ちゃん」と呼びながら走ってくる子どもたちの姿があった。互いに負けじと転ぶように駆け寄って来た四人は、大辻さんの両側から囲むようにして手を取り談笑しながら人ごみの中を通り抜けて行く。近頃余り見かけなくなりもう忘れ去られようとしている光景、大辻さん親子の後姿に強い感動を覚えた。私の子どもの頃と世の中は変わり価値観も大きく変わった。けれども大切な「何か」、大切にしなければならぬもののあることを思った。

後日、人づてに当夜の話を聞いた私は、篠原駅のホームに立って、眼の見えない哀しさを思い、電車に乗る毎に駅の周辺に目をとめるようになった。例えば点字ブロックでさえ、JR各社によって、プラットホームの体裁はまちまちである。アナウンスされる言葉も気になる。

毎日の営みの中でハンディを乗り越え、懸命に一人で街へ出ようとする障害者や、加齢と共に身体機能の低下を伴ってきた

私共にも、今の時代危険が街には多い。ルールを守り、一人ひとりが気をつければ改善されることもある。自分の実感や体感したことから出発して、一人ひとりが出来ることをし、安心して街に出られるよう願っている。

いっ、どこで

第十四期生園芸学科 小 泉 雅二良

五十数年前、突然舞い込んでくる召集令状、そして戦場へ、あげくの果て戦死戦傷、取り残された家族は途方に暮れる。慰めてくれる人はあっても、親身になってくれる人は稀である。こんな事態を今の戦後に育った人には想像もつかないであろう。戦火をくぐりぬける極限の状況での不安とどん底の悲しみはいくら説明しても、大半の人にとってこれを自らの立場におきかえることは不可能に近いと思われる。

そうしたことはピンとこない過去や別世界の出来事ではない。しかし最近ボスニアヘルツゴビナから帰ったりリビチ郁子さんはその極限の真只中に生き、恐怖と悲嘆に直面した末帰国した。

戦場から平和な国へ、地獄から天国へ帰還した思いであろう。この両者の差から何か狂うと誰でもが郁子さんのような目に遇うことの恐ろしさに身震いせざるを得ない。だがこの心の備えを何人の人が持っているだろうか。

現に大半のボスニアの人達は来るべくして来た戦乱を予想していなかったのに違いない。訳のわからないなかで砲弾が飛び交い、人々は逃げまどったのが現実でなろうか。

戦場に生きる民と平和な国の民との現実感はまだ違ってしまふ。わかっていることだが、この現実の距離を縮めることは至難な業と思える。

現に国連はこの国に仮想の平和しか与えられなかった。米国が膨大な武力を背景に本腰を入れて乗り出してきてようやくこの戦乱は終息したのである。

平和の裏側にひそんでいるこの事実は平和主義者にとっては理不尽と言えることが現に平和への秩序をつくりつつあると言ふこと以外に方法はないのが現実である。

この苛酷な現実を我々は卒直に見つめる必要があるのではなからうか。

古稀を記念して

第十五期生スポレク学科 馬場 利

在学中自叙伝について学び、自分のこれまで生きてきた道を短編に綴ってみました。

昭和二年農家の長女として生をうけた私は、十三歳で父に、十五歳で母と死別しました。現在四人の兄弟が父母の年をはるかに過ぎ、父母の五十回忌も無事勤めることが出来ました。これも亡き両親の加護と幸せな社会のお陰と感謝しています。

こうした両親への思いを込め、自分の人生を振り返り、物心ついた五歳頃よりの記憶していることを辿ってみました。現在親子三世代が同じ屋根の下で、何不自由なく幸せな生活をしている子供や孫達には想像もつかないだろうと思います。こうした思いと共に今年四月二十八日の古稀を記念して七十年間の日本の移り変わり、また私の過ぎ去った人生を綴り、兄弟、子供達に配布しました。

尚今年十二月、結婚して満五十年になり夫婦生活五十年を思い出して綴ってみたいと思っております。

良き友を得て

第十五期生スポレク学科 西川 久子

東京でのクラス会の一泊旅行で夜更も忘れて語り続けた御縁により、私にとっては主人の一周忌に大切な宝物が出来上がりました。

それは「南無阿弥陀仏」のお軸です。大阪の友人も四年前にご主人を亡くされ、同じ環境で話はずみ、書道の仏門入門をされて、「平成丙子歳の書き初めは、六字の名号を書くのよ」と話されたのがキッカケで、私も早速にお願い致しました。

約束事の固い友は、年末に書道具一式を送付してくれました。亡き主人の初めての越年で、空しく淋しい心の私を書き初めにより、勇気と光明を与えてくれました。今年は大変よく雪が降りましたが、しんしんと降るこの静かな雰囲気、筆を運ぶのに気持を落ちつけてくれました。常に背後に主人が見守ってくれることを信じ、生前中より望んでおりました書の書ける幸せをかみしめながら一枚一枚書きました。

先づ一週間分を送って添削頂き、また送付を繰返しました。そして友人宅でも一泊させて頂いておけいこしたり、その翌日

は先生が御出張下さって、先生の前で筆を運ばせながらの御指導も頂きました。私は本当に有難く温かい親切な心に胸が一杯になりました。私は特別の生徒で厚かましいでしたが、主人の一周忌に間に合せたい願ひも含めて御指導頂いたので、短期間の仕上げで充分ではありませんが、先生も『私の願ひ』を叶えて下さって表装までお世話になりました。印も高野山で修業なさった方が彫って下さったそうで、引首印も上手下手は別に私の熱意（心）に感動頂き押印下さいました。

本当に良き友のお陰で、亡夫に思いもかけぬ一周忌のプレゼントが出来たことを感謝しつつ、今後も交流を深めながら、与えられた余生を意欲をもって精進していきたいと思ひます。

良き友の励ましを得て夢叶い床の間の軸安らげく見ゆ
弥陀の軸捧げし亡夫の春彼岸

螺子が止まりそう

第十五期生生活学科 岡田 静枝

ある日、何気なくテレビをつけてみると、僻地の小学校の卒業式風景が写し出されていた。一人の児童の巣立ちに、二人の

在校生。式場には温かい師弟愛がみなぎり、卒業する児童、保護者は勿論のこと、出席者全員の感激の涙、涙……。

この学校は、今年限りで廃校になり、在校生は、新学期からから遠く離れた本校に通学する運びになっている。本校への不安と期待が交錯しながらも、喜びに胸ふくらませている様子が伝わってきた。

それにひきかえ、ある有名国立大学の卒業式は、私のような昔人間には想像出来ないくらい情けないというより悲しくさえなってしまう、ただ、ぼんやりと眺めるだけ。儀式には縁遠い学生達の服装や態度にあきれながら映像を見つめていると、一人の男子学生は、どこかのコンサートと間違えているのではないかと思われるような奇抜な「ファッション」さらに、卒業証書を頂くとき、学長の前に進む態度に、またびっくり。厳粛な筈の式が……と目を疑わせ、しばし沈黙。

新聞誌上を賑わす「夫婦別姓」「男女同権」も、またしかり。再認識の必要性を痛感させられる。自由とは、本当に有難い言葉。しかし、それは自由奔放のことではない。人々の考え方や生き方は、時代の流れや進歩と共に変わるものでいくらあがいても追いつけない自分が情けなく心が沈みそうになる。

この急激な時代の流れに即応できない自分に、ますます「老」

を感じさせられる昨今。これが時代の移り変わりとはいえ、何か淋しいやら、悲しいやら複雑な気持ちにかられる。若者に追いつけなくてもいい。少しでも視野を広げたいと願う反面、めまぐるしい時の移り変わりに一瞬、回転の螺子が止まりそうだ。「一体、何を、どのように理解していけば、いいのだろうか」「もう私も駄目なのかなあ」と悩みつつも、のんびり今日も日向ぼっこ。自由と健康に恵まれた、この有難い現実に感謝しつつ……。

この年で考える

第十六期生生活学科 塚越 幸子

停年退職して六年、無意味に過ごしていた私に突然頼まれ、老人ホームに勤務して一年になり自転車で二十分余のデイサービスに席を置いております。月に十日ぐらいの勤めですが、デイサービスは看護はないということがなかなか理解できず半年経ってやっと分かりかけてきた。週一回来られる方は一日ホームを利用されるのですが、この日を楽しみに待っておられ体温、血圧の測定に異常がなければ入浴ですが熱や血圧が高か

ったりすると取りやめることがあるのですが納得出来なくて服を勝手に脱いだり計り直してほしいと訴えます。感情は細やかで自己主張もなかなか。けれど大体が穏やかで物静かで食事も好き嫌いなく大方の人はきれいに食べられます。何でも分かっているのでもいつも感心しています。午後からはボランティアの方々の造花や花瓶作り、寮母さんらと歌を歌ったり、ぬり絵をしたり、私も共に楽しんで働いています。二時になればおやつ
の時間、三時には朝と同様それぞれのお家に送り届け、「また来週まで、元気でね」とお別れします。

ディーでは寮父、寮母がおられ看護婦と寮母、どこまでは私の仕事かと思いましたが、今では立場でお互いの領分を侵さず仲良く働いております。最初はデイサービスとはという本を読んだ行ったのですが、なかなか奥が深く、これで十分ということが出来ず、行きたびに何をしたらよいのだろうと思いつつ利用者の話相手に重点をおくのがよいか迷っている今日この頃です。そして私に再び働く意欲を出させてもらい生き甲斐を与えて頂き身体も元氣になれたことを心から喜んで感謝しています。私も六十八歳でいつまで働けるかわかりませんが、利用者
に看護婦さんが来てくれて嬉しいわという人がたくさん増えるように頑張りたいと思います。

ディーサービス事業とは

さまざまな障害をもつ高齢者が自宅から送迎バスを利用してディーサービスセンターに通い日中各種のサービスを受けるもの。

戦後五十年を省みて

第十六期生園芸学科 富田利一郎

昭和二十年八月、悪夢のような戦の幕は閉じられました。

ちようど私は熊谷航空隊におりました。連日の空襲、特に艦載機グラマン戦闘機の攻撃は筆舌に表わせない光景でした。直向から急降下で向ってくる機に射程距離の短かいラインメタルという機関銃で応戦しても機関砲による攻撃には恐怖が先立ち成果は上がらない。来る日も来る日も地獄の絵巻の繰返しでした。そして戦は終りを告げました。気のゆるみと疲れが一度に全身を襲う。民家の人達と顔を合せても申訳ない気持で、つい隠れるような始末でした。勤続年の多い者より復員を命ぜられ名残を惜しみながら互に再会を夢見て別れたのはつい昨日のようです。東京に出たが、一面焼野が原、立木の焼け残りと押し

つぶされた残がい、これが東京の都かと思われました。その町に夕方だったためか、どこへともなく消え行く人々の姿がひとしお寂しさを感じさせられました。駅は焼けて屋根はなくなた線路だけが無事でした。幸いにして箱車に乗ることが出来てホッとして真暗な死せるが如き都を後にただ夢遊病者の如く生家に辿りついたのが八月も月末でした。

あれから五十年、走馬灯のように時の流れは過ぎ総てを変えてきました。無蓋の列車で煤煙で真黒になっての復員いまま思えば残酷そのものです。夢が夢を呼ぶというか、現在の変わり方は到底測り知ることは誰一人として想像しなかったことと思えます。「朝に米」「夕に米」と生きるためには食を求めての日々その苦しかった頃のことか今は昔の語り草となりました。時の流れと共にラジオがテレビに、鈍行が超特急に、ペンがワープロに変ってきました。その半面環境汚染は日増しに総てを滅亡に追込む様相に変わりつつあります。淡海の宝琵琶湖も洩れなく将来が案ぜられます。果てしなき発展の陰に地球破滅の魔手がしのびよる底知れぬ恐怖を抱かざるを得ない今日この頃です。大切な我々安住の地緑の大地が永遠に護られてこそ人間を含む生物の総てが幸せに生き得られることと思えます。誰しもが念ずる気持は変りなきものです。最後に緑の大地よ永遠たれ。

笑顔で友愛活動を

第十六期生文芸学科 中島 すぎ

レイカディア大学を平成七年九月に卒業させて頂きました。

それより半年前、老人会に余りお役にもたない私ながら金田学区の女性部長として、大任を受けることになり、市の学区の女性部長さん並びに各町の女性部長さん方に助けられ辛うじて責任を果たさせて頂きました。共に出来る限り老人福祉のため勉強致しております。また子供達ともふれあうよう金田学区第一回福祉祭(昨年八月二十六日)には、炎暑の中をいとわず子供達に折紙、お手玉、匂い袋など教えながら楽しく遊びました。また老人会と子供達でゲートボール等をして楽しみながら、ふれあいの場を持つようになりました。

最近では老人クラブに友愛活動の支援を啓発するいろいろの行事や会が開かれております。去る二月二十七日に長寿社会福祉センターへ市連合会の老連の方々と在宅福祉を支える活動の内容を聞きに参りました。

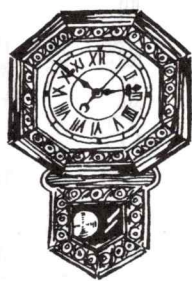
助けあう内容は、

(一) 話し相手

(二) 日常の生活援助
(三) 外出援助

等活動の取組方について学習をし、明日の友愛事業に向っての指導を受けました。早速翌日近所の二十年近く家に引きこもっておられる女性の老人を訪ねいろいろお話し喜んで頂きました。また当市の老人クラブ連合会もモデル地区として国田氏より発表がありました。

内容は市の一部の地区で実施されている友愛活動の輪を広げることとございました。今後は老人クラブの役割を理解し、また活動を活発にし、老いが老いを支えお互い協力しつつ地域の友愛活動の充実、拡大に向けて前進を続けていきたいと存じます。



落の臺によせて

第三期生生活学科 森 キミ

厳しい寒さの合間に、珍らしくやわらかい陽ざしが窓にあたり嬉しくなって裏庭をのぞいてみると、残雪の間から落の臺がたくましく芽を出していた。こんなに心にゆとりをもって外を眺めたことは久しぶりで、気にもとめなかった裏庭の狭い所にいくつもの落の臺が芽を出すとは嬉しい驚きだ。

平成元年五月、結腸の手術をしがん性であると告げられてから今年で七年目を迎える。昨年暮れ主治医から「もう大丈夫ですよ。油断は出来ないが六年過ぎても再発の兆候は今の所ありません」とにっこり笑われた。私もほっとした。思えば入院を繰返しながらも、少しずつ良くなってゆくのが自分でも感じられる。時には時間外に病院へ飛びこんで先生を驚かせたこともたびたびあったが、「もう大丈夫でしょう」の一言に世の中が明るくなって、足元の雑草さえいとおしく思える。十数年続けている同好会も休みがちだったが、昨今は休まず出席している。生かされていることのすばらしさ、春はもうそこまで来

ている。

有難い後継者

第三期生陶芸学科 佐生 正二

県老人大学陶芸科第三期生として卒業以来十数年、卒業時二十名の同科生は（転出死亡）現在十一名となった。

その間会員相互の連絡や親睦を目的として、会報発行。昨年十二月（第四十八号）を以て発刊中止の予告をしたところ、野洲の米田君より「後は僕が引受けた」と思わぬ申し出に「ああ有難い、会報継続に明るい前途、縁ありて県下志を同じくする三期生今後連絡の火を消さずバトンタッチが出来た感激。嬉しい報告と米田君に心より有難うと御礼の言葉とします。

このごろの私

第五期生園芸学科 猪田 正臣

老を卒業して十二年目。最近になって体力はまあまあだが

足が多少弱ったように思う。先日も駅の階段での昇降時に殊にそれを感じた。それでこの頃は歩くことに努めている。近くの用事は必ず歩いて出かけるようにしている。

また、二か月近くなるのだが我家の犬が、午前二時頃になき出すので、隣近所の迷惑を思い一時間ほど散歩に出る。毎日夜中の散歩が常となってしまう、そのお陰で毎日歩くことで、少し眠いのだが体調は馴れたせいもあって非常によい。だが夜中では困るので、早朝に逐次変えるようになってなんとか考えて続けたと思っていますこの頃です。

近い川沿いに、バイコロジ「遊歩道」があつて、朝夕散歩する幾人かの高齢者を見かける。全身運動が出来るので、この方法が健康には一番と、私は歩く運動を毎日続けたいと思っています。

また、私が趣味で長年続けている謡曲と仕舞は腹から大きな声を張り上げ、扇を手に動く仕舞などは、体のバランスをとる運動にもなるので、高齢者には適した運動が出来るように思います。近頃は謡い仲間の友人達と集まって稽古をして楽しみながら体調をととのえる運動を自然に出来るように頑張っています。皆さん方も如何でしょうか。おすすめしたいと思っています。

海戦の一こま

第六期生園芸学科 山脇善一

昭和十九年十二月二十三日、巡洋艦二隻、駆逐艦数隻の艦隊が礼号作戦に参加、旧仏印東岸のカムラン湾を出港した。

当時、米軍は比島奪還のためミンドロ島サンホセに上陸。その機動部隊や港の艦戦を殲滅し守備友軍の援護のためである。

南の海面は無気味なほど静かで、夜光虫が浮遊し、物でも落とすと淡い光を放つ。もちろん航跡も光って見え、闇夜でも艦の位置がわかり、我が艦には不利である。

二十六日突入の日、薄暮の頃より敵機の襲撃を受ける。暗くなった第二波の襲撃で味方の駆逐艦一隻が被爆炎上沈没。近くの艦に多くは救助されたようだ。その夜月影はなかった。夜襲に闇夜を選んだのだろうか。

ミンドロ島に近づくと、敵機の襲来の波が早くなる。爆音は聞えるが機影は見えない。敵機の銃弾は全部曳光弾で、弾の後部が桃色に光る。我が艦の二十五耗機銃は三発に一発で、弾着確認のためだ。しかし、相手に自らの位置をも知らせることにもなる。曳光弾の出ている所が敵機の位置だ。敵機が射れば味

方の艦からも一斉に発射する。光の筋が右から左から、上から下からと交錯する。十二・七センチ高角砲の弾丸が炸裂する。時々照明弾が敵陣を照らす。戦争でなければ、素晴らしい光景だろうが、生きるか死ぬかの戦である。我が艦、四連装の魚雷発射管も活躍、港に停泊中の敵船団を攻撃する。我が艦隊は被弾を避けるため、指令に従い規則正しく蛇行しながら、各艦の砲火がひっきりなしに発射。敵機が火を吹きながら海に突っ込む。敵もさるもの墜落するなら敵艦めがけてと、我が艦後部マストをかすめて墜落するもあり。双胴のロケット戦闘機が火を吹きながら落ちて行く。「ざまあ見ろ」と怒声が飛び出る。どれくらい激戦が続いたか、午前一時過ぎ頃カムラン湾に引揚げる。我が艦の戦果、魚雷で敵船二隻撃沈。敵機数機撃墜。我が艦の戦死三人。負傷者はかなりあった模様。夢のようなひとときであった。

生きがいを求めて

第八期生園芸学科 溝井常夫

豊かな老後を送るために生き甲斐を持つことが大切だと言わ

れています。仕事を持って社会のため貢献しているという意識が生れると楽しい生活が出来、また別に多くの趣味を持って楽しみと交友を多くすることだと思います。「明るい気持ちでいつも笑顔と朗らかに」この言葉こそ周囲を明るく親切にする言葉でしょう。

高齢者が自分の生き甲斐を発見し、また学んだことをきっかけに社会参加の道を開く生涯学習の必要性がそこにあるのでしよう。

老大で植物についてくわしく説明を教わって今までとは見方が変わり興味が倍増して観察するようになり、良い友達が出来、また趣味が同じで一層話があい親しみを深くしました。

園芸のノウハウを学んで現在はこの経験を生かし、町公民館の園芸教室、老ク連寿大学で高齢者に花づくりの手ほどきを教える昨今です。年末には松竹梅の寄せ植え、また青竹筒を使って和洋折衷の寄せ植え作りを学習しました。大勢の参加者は素晴らしい優美な自然を表現した作品が出来上がり、新年を明るく楽しく迎えられました。花は人と人を見えない糸で温かく結び、心をなごませて美しく素直な心を教え、生きる喜びを与えてくれます。この喜びの輪を広げて、公民館のポーチの一角にまた我が家の玄関に一年を通じていつでも何か花が咲いている

ようにしたいものです。しかも四季咲きで年中花の咲くものより季節が来ると咲くものがうれいではありませんか。月順に表を作り、花木・草花・鉢植え・野草などというようにバラエティに富んだ組合せ種類を拾い出し、種子や苗を入手する手立てを手がけたいものです。

年をとってからの友人は大切にしたいものだ。老を人生スナップのバネとした活力ある発刺人生・それと同時に健康であること・記憶が悪くなっても古いこまめ努力と、異性を感じ色気を忘れず人生経験で身につけたものを少しでも役に立つよう社会に対する恩返しのため微力を尽したいと希望しています。

追　　憶

第八期生文学学科　安倍　勉

奈良の二月堂のお水取り終り彼岸も過ぎ、比良八荒も終り湖国の春の到来と言われていたが、今年に限りこのジンクスが変り、いつまでも寒い年で、四月上旬になっても雪の訪問。一ヶ月気象のズレがあり、桜の花も開花が遅れ四月下旬にやっと湖国の桜もほころびかけた。コタツも電気毛布も不要となった。

三十年ぶりに湖西線が近江今津まで趣いた。日本一高いのろの運転という汚名で知られた江若鉄道を買収して新線の湖西線を整備された。幸かなこれが地元と会社等この交渉の窓口として参画した。

山の手を走る軽快な音は周囲の発展の夢を乗せて地域の開発は過去の姿を一変して発展する現状を車窓より眺めて感無量でありました。

新線に対して補償や従業員の配置更にルートの決定、駅舎の設置等なかなか難問が多かったが出来る限り地元要望の実現に努められた当局の配慮に敬服した。

地域の新興発展はなんといっても社会資本の充実が最重要であり、就中交通体制の整備こそ優先すべきであります。この新しい町づくりのモデル的な交通体制の整備がこの湖西地区の発展に役立ったことを感激しながら車窓より展望して痛感した次第であり三十年前の思い出を呼び起しながら近江今津駅に淡い積雪の町を眺め感慨にふけりました。



私の青春時代

第九期生文学学科 田井中 元 一

昔から軍隊は運だいであるとはよく聞いて来ましたが、今考えると全く私の軍隊生活は、運のよい軍隊生活であったように思います。徴兵検査の際、最初海軍通信兵甲種合格と命ぜられますが、陸軍にして下さいと申し出たとたん、検査官は折返し、何だお願いとは、申ししてみると、私の顔をにらみつけた。

申し上げますと大きな声で、二十三歳までに除隊して官連の試験が受けたいから陸軍にして下さい、と、検査官はよしわかったとす。陸軍通信兵合格と言ひ渡され、復唱した覚えがある。これで私の運命が決ったかと思う。

今考えると、ようもこのようなことを言ったことか今更ながら思えてくる。数ヶ月後村役場より入隊通知が届き、通信隊へ入隊したところが、近衛電信一連隊一中隊に編入された。入隊してみると、九割までが幹候有資格者、よい家のボンボンで我々百姓生まれの高小卒と比較にならない。ところが私は電信技術を入隊前に獲得していて電信隊では鬼に金棒、有資格者で都合上々、兵隊では選抜されて星の数も順調よく、しかも近衛

連隊通信隊で軍指令部付、初年兵でも楽な通信所勤務、軍属の女の子（徴用で入隊してきた女学生）の通信教育係、モールス符号を教えて男に代わる通信所の仕事をしてもらう訳。

終戦となり我々電信隊の当時の戦友会が結成され東京で三年毎に催される集いに、必ず参加してくれる。可憐なお嬢さん達がやってくる。現在はよいお婆ちゃんになっているが、当時を忘れず「班長さん、班長さん」と懐かしがってくれる。

もし海軍通信隊で入隊していたら、今のこの命はとてもないと思える。我々には青春がなかったように思えるが、今改めて考え直すと、軍隊は運たいかな？と、今日あるこの命を大切に感謝の日暮しをしたいものです。お陰様でよい方々との出会い、ふれあい、健康体を維持する百姓の手伝い等、思いのままを綴ってみました。

「がん」を制す

第九期生文学学科 奥井芳郎

胃がんの切除手術を受けました。町のがん検診で発見したのです。早速精密検査を受けたら「やはり」がんです。ほんの

初期ですから手術をすれば大丈夫です」と告知され、くわしく
図解をし説明して下さいました。

その日から「がん」との闘いが始まりました。十五日間毎日
毎日検査の連続でした。手術の日が決まり、妻と一緒に沢山の
レントゲン写真を見ながら、細かい説明を受けました。

当日午後一時頃手術室に入り、術後意識が戻ったのが七時頃
でした。その間に担当医から家族に手術の経過の説明があつた
ようでした。私に気がついたので家族は安心して帰りました。

ところが、当人にとっては、それからが本当の「生きる」こ
とへの勝負の始まりでした。

私は戦時中二回も乗っていた輸送船が撃沈され、一回目など
は六時間も泳いでいました。けれど、少しも怖いとか死ぬとか
思ったことはありませんでした。その時の状況は今でもはっき
り覚えています。しかし、今度ばかりは「生きる」ことの大変
さをつくづく感じました。

術後十日ほどして初めて食事をしましたが、なかなか食べた
物がおさまらず、嘔吐するばかりでした。看護婦にその旨を言
うと、「そら胃がないからね」とのこと。おかしいなあ、家の
者に聞くと、「胃は半分あるよ。だって、手術後切り取った胃
を見せてもらったら、その位の大きさだったもの」。回診に来

られた担当医に尋ねたら、「五分の一は残っています。私が手
術したんだから間違いありませんよ」。看護婦は胃の働きから、
家の者は見た目で、担当医は胃の容積から……。どれも正しい
のかなあ。

今も月に二回通院しています。食事もうっくりとれば戻すこ
ともなく、体重も徐々に増えています。先輩は五年は注意する
ように忠告されます。担当医は、「すっかりよくなりましたね。
では、いつもの薬を……」

早期発見のお陰だと思っています。皆さん、どうぞ定期検診
を必ず受けましょう。

かわとうみ

第十期生文芸学科 西崎 文枝

水郷の名にふさわしく、わが村にはびわ湖はもとより、水の
流れる所が沢山ありましたが、琵琶湖開発によって南側のかわ
とうみが埋められ、ひろばが出現しました。子供の遊び場や、
ひろびろとしたグラウンドでは運動会や、ゲートボールの大会も
出来、桜が咲き、時計塔からは爽やかな音が響きます。

その昔、岸につながれた田舟に乗って洗い物をしたこともあ
るし水浴びをする子が溺れたことなど思い出はさまざまなので
すが……。

千鳥鳴く佐保の河門の清き瀬を馬うち渡しいつか通はむ

(巻四 五二八)

明日香川河門を清みおくれ居て恋ふれば都いや遠ぞきぬ

(巻十九 四二五八)

と万葉の昔より河門の言葉があり地名にもなっていたのでし
た。大昔には千鳥が鳴いていたのかも知れません。

かいつぶりの浮いている景色もはるか遠くなってしまうし
た。今ゲートボールをしている頭上には白い飛行機雲が斜めに
幾筋か見える青空です。

かわとうみのひろばで駈けまわる子らがどんな将来を迎える
のか、それは誰にもわからないことです。

思 い 出

第十一期生園芸学科 塚 本 次 郎

昭和十九年十二月十三日、青空の広がる屋下がりだった。警

戒警報とともに、米軍のB29爆撃機が来襲、三菱重工業名古屋
発動機製作所を爆撃した。工場は無数の直撃弾を受け、壊滅状
態。建物の鉄骨はむきだしになり無残な姿をさらした。ヒュー
ヒューという爆弾の落ちる音は今も忘れられない。

学徒動員の生徒をいち早く防空壕に誘導し息をこらして敵機
が過ぎ去るのを待つ。次から次へと来襲する。なかなか治まっ
てくれない。思わず近くに着弾したのであろう。砂煙りと共に
防空壕が大ゆれにゆれた。とたんに頭に大きなショックを受け
た。ようやく治まり学徒を壕から出す。みんな無事でよかった。
しかし半分以上の壕はスッ飛んで影も形もなくなっている。こ
れは大変だと、思わず叫んだお陰で鉄かぶとに穴があいただけ
で済んだ。一命をとりとめることが出来た。軍の指示で死体の
収容に追われた。崩れた防空壕の中で息絶えていたり、爆風で
遺体が吹っ飛んで屋根に引っかかっていたり恐ろしい光景だっ
た。当時製作所では従業員をはじめ女子挺身隊や学徒動員など
合わせて四万人ほどが働いていたが、この爆撃でいかほどの犠
牲者が出たことか。この跡地にナゴヤドームの建設が進められ
ている。跡地に建つのも何かの縁、平和な時代の象徴として見
守りたい。

桜さまざま

第十一期生園芸学科 武久 四郎

暑さ寒さも彼岸まで、とはよく聞く言葉ですが、今年は何年
に比べて異常気象のためか、四月になっても雪を見る珍しい年
です。

ちょうどこの時期に桜の開花前線が北上する季節でもありま
す。今年はやさうだ、少し遅れるなどと花の便りが気がかりな
季節でもあります。桜といえば花の散りぎわのよさをもって、
大和魂の象徴のように考えられ、特に戦中は桜にまつわる言葉
が随所に氾濫し、人の心を潤わせたり、時には大衆の士気の高
揚に一翼を担うなど、日本人と桜との接点をこれからも大切に
してゆきたいものです。

花が終わり新緑から深緑になる頃には、涼を求めて桜木立に
入ろうものなら、木々の随所で毛虫の行列に出会い肝を冷やす
こともあります。紅葉の南下に伴いいち早く色づき始め、食い
荒された葉が秋風に散ってゆく姿にも一抹の寂しさを感じます。
桜は花だけでなく、他も用途が広く、木は加工しやすく、ま
た歪みも少ないため床柱や敷居にも使用され、ちょっと贅沢な

建材です。家具には建具の枠や機に使用され磨きをかければ、
素晴らしい光沢が出ます。樹皮は小箱の外装に使われ、タバコ
のケースなどによく見かけます。花は塩と梅酢に漬けた花を湯
に浮かべた桜湯も特有の芳香をもっています。結婚式の控室で
お茶代りに戴くこともあります。次に葉は桜餅に使います。米
粉の皮に小豆を包み塩漬けにした桜葉で覆い蒸籠（セイロ）で
蒸したものです。桜葉特有の芳香で味わうことができます。

桜は日本の国花で、古代から詩歌に詠まれ、また絵画の題材
として多く取り上げられ、国民生活と深く結びついてきました。
桜には一つの無駄もなく、樹木、花、葉、樹皮に至るまでそれ
ぞれの用途に応じて生かされております。

私の体験から思う

第十二期生園芸学科 備前 龍三

中支浙江省から転戦してビルマへ、峻嶒な山越え、その上に
飢餓とマラリア、赤痢などの悪疫の闘いも乗り越えてのインパ
ール攻略に参戦。我が方に制空権のない空からは、銃砲撃と爆
弾の嵐をほしいままにされ、地上では、比較にならない砲弾は

て親睦を重ねてきました。

そして去る二月十七日に第二年度の学習が終り、盆栽、植木技能二級の終了証を全員に受けることが出来、三月上旬香川県分寺町の錦松発祥の地への視察を行ない一区切りがついたところです。

その間には、レイカディアの教室を借用したこともありましたが、殆んど嶋岡先生の楠藤園にて、庭園の大樹の植え替えや公民館の松の剪定、鈴鹿の山歩きも大原ダム周辺、永源寺の奥御在所と再三にわたり、万葉集に詠まれた山野草や花木等を観察し、我々に大変身近かな所にある鈴鹿山系にも、これほど多様な植物が自生していることを知り、改めて自然環境保全の大切さを痛感したものです。

引続いて八年度からも、日程を縮少しながら学習を続けてゆくことになっております。

以上のような学習の成果も自分だけのものとせず、OB会員各々の地域の中で役立ててゆくと同時に、私達OB会員のもつ情報連絡網を通じて、いつまでも深い交際をもち続けてゆけることを念じております。

限りある人生を

第十四期生生活学科 西岡 虎男

昭和の初め農家に生れ、物心がついた時には戦時中、社会は激動の時代であり、何かにつけて変動がありました。戦後は民主主義を身につけ、物の生産と物を大切にし、生産増強に日本の復興に力を入れて来た。そんな時代を私は、県に奉職し職場と家庭を行ったり来たり、四十年近くの生活でした。

いざ退職をすると、一体自分は何してきたのだろうか、これから自分の生き方、趣味の選択など考えることも出来ないうちに地域の役職が当たり、今まで以上に老体にむちをうち地域のために頑張っている今日この頃ですが、若い時のように無理は出来なくなり、思うように身体が動いてくれない。それだけに今までの自分が培った経験と知恵を生かして努力していくより他はないだろう。健康に気をつけながら地域発展のため、命ある限り地域づくりに努めたいと思っています。

最後に二十一世紀は高齢化社会、高度情報化、国際化の時代を迎えます。価値観の多様化時代の今日であり、生ある限り社会の変動に取り残されないよう、健康に気をつけ一日一日を大

雨霰のように着弾して、陣地はたちまち掘り返される。今朝は木立に覆われていた陣地が午後には草木のない畑のように、当然味方の損傷は計り知れない。

世にいう辛酸をなめた苦難などと、それとは比較にならない生き地獄を味わい、奇蹟のうちに生を得ている者でなければ計り知れないことと知っている。

敗戦となって復員！

戦後の日本は全ての物資不足の時代を迎えていた。この中で我々の年代の若者は、力を合わせて必死で復興に努力をしたことはみんな心の中で誇りに思っているのではないだろうか。

気がつくとそばに孫がいる。この子達にあの地獄の思いをさせたくない、させてはならないという心配りで必要なもの、必要でないものまで与えている。勿体ない、物を大切にと育った私達。かわいさの余り今は孫を甘えさせているが！

よくないこととわかっていながらどうしようもない。でも反省の毎日を過ごしている余裕だけは失っていない。

初陣で、不意に敵襲に遇って狙撃を受け、頭の上を銃弾がすすめたとき、身体中がふるえてしばしの間顔を上げることができなかったこと、「武者震いというものらしい」馴れるまで二、三日かかったように記憶しているが、それから五十数年を経る

ことになる。苦難、貧困の体験や過去の人達の努力が実を結んだことなど、これからの若者に伝え、平和な日本を永く築いてもらえるように導くことも私達の責務と思っている。

同期の絆いつまでも

第十四期生園芸学科 岡本幹雄

平成五年九月園芸学科を卒業して早や二年余りが過ぎました。私達同期生は、湖西新旭町から大津、湖南、近江八幡、甲賀蒲生と広範囲に分れており、最高齢者八十三歳から六十七歳までと年齢差も大きく、過ぎ来し人生経験もいろいろと多様な組合せではあったが、二年間の在学中に培った友情は大変深いものがありました。

互いに高齢になるに従い、実際の出来る範囲が狭められてゆく時、良き友とめぐりあうことの出来た喜びを、いつまでも永く保ち続けようと、誓い合いました。

卒業生三十二名のうち、二十八名で「十四期生OB会」と名称を決め、卒業と同時に発足し在学中に学んだ基本をもとに、木や草花を育てることを通じて、愛情、生命の大切さを心とし

切に残された人生を送りたいと思っております。

地域に生きる

第十五期生園芸学科 小西 実

鏡山のうた 大賞 竜王町長賞

□伊吹山も琵琶湖も見ゆる御幸山に根上がりの松の

青く茂れり

□男の子等がとがろい祭り鉦太鼓

この二つのうたは、私たち鏡の里保存会が、鏡の里のすばらしい自然と文化財の保存と伝承に目をむけ、後世に伝え残そうと考えたものです。

その十周年を記念して募集したところ、県下各地より、百二十余の方が、四百八十余点にのぼる短歌や俳句のすばらしいうたをお寄せ下さいました中の作品です。

鏡の里は、古くから街道によって拓かれた里でもあり、すぐれた自然と、天日槍、聖徳太子、伝教大師による雲冠寺、西光寺の三百、五百余坊の跡、また義経の武人の出生の地でもありその他数々の史跡、文化遺産が残されております。

先人たちが断続的ではありませんでした偉業を継続的な伝承と保存にと心がけてきました。

麗峰鏡山は、平安の世より、天皇をはじめ文人、宮人たちのうたに歌われ、その数は百余首句わかっております。最近、近江百人一首にも二首選ばれました。また謡曲近江八景には、

「洞庭の月には鏡の山をたとえたり」といわれてきました。

このような鏡山や里を、現代の人々からみたらうたを頂戴し、鏡の里のよさを再認識したいと思いつたのです。すばらしいうたを頂戴し、会員一同大変喜んでいるところです。

私たちは十年を契機に、さらに竜王町の緑と文化のまちづくりや、県の提唱される近江文化の創造にも添えればと、鏡の里のまちづくりにも今後精進し、地域に生き続けたいものです。

灰になるまで

第十五期生スポレク学科 平井 博

レイカディア大学のスポレク学科を卒業後地域の老人会や老人福祉施設等でフォークダンスやレクダンスの手ほどき程度のことをやっていたが、ちょうどその頃、市で「まちづくりリー

「1ター養成講座」が開催され、それに参加した。講座で新しい知識を得るとともに新しい仲間が出来たことが何よりの収穫であった。また講座修了者に対して「生涯学習指導者養成講座」の通信教育を受けて勉強してみないかと勧められて受講することになった。

最初は生涯学習ボランティアコースという大きな課題に取り組んで、果してやりとげることが出来るだろうか、不安であったが、担当の先生方の温かい励ましのことばと、市内の同じ通信教育受講生仲間でも月一回の学習会をもつことによって互いに励ましあいながらなんとかゴールに辿りつけた。

月一回の学習会は私達の仲間意識を倍増させ、今後の地域での活動の大きな力になるものと思っている。

地域活動も最近では自信をもってできるようになってきた。それは生涯学習の基本的な理念を学び、さらに実践の方法、社会施設の利用法、地域における生涯学習の展開等の課題について勉強できたお陰である。

これらを生かしながら年を重ねても出来る学習やボランティア活動に励んでゆきたいと思っている。出来れば灰になるまで学び続けたいものである。

余生の花道

第十五期生園芸学科 桂 田 正 美

終戦から五十年、それこそアツという間に過ぎ、人生の終着駅に近づきつつある今日、昨今の世情の乱れには目を覆いたくありません。自分におかれた境遇に満足することなく欲に欲を重ねて生きている。欲を持っているから生きられるのであるが、しかし物事はすべてほどほどでなければいけない。

人生には山あり谷ありで決して平坦な道程ではない。昔から言われているように楽の後には苦あり、苦の後には楽ありで、人生みな平等に適当なチャンスにめぐりあっているが、ただ本人が気づかないだけである。人生には三度のチャンスがあるといわれている。しかしこのチャンスに気づかず逃してしまうのがほとんどのようであるが、私もラストチャンスにめぐりあうことが出来、幸いにレイカディア大学に入学させて頂きお陰で種々の生涯学習を学び、その上二年前まで全く知らなかった多くの人達と出会い、皆それぞれ素晴らしい長所を持って温かい心で接していただいたことを、この上もなく幸福に思っております。卒業後もいつも声をかけあって心のふれあいを深めさせ

て頂いていることに深く感謝し終生の喜びとしています。

人生は、やり直すことは出来ないが、反省することは出来る。自然や地域社会に感謝を忘れず、自分だけで生きているのではない。幸い平穩な毎日が送れていることに感謝し、これからの余生を健康で過ごしたい。

(一) 金もうけより命もうけ。無理は禁物。何事もほどほどに。仕事も、食べることも、遊ぶことも、飲むことも。

(二) 仕事以外に多くの趣味を持つ。気分転換、ストレス解消になり、大勢の友達ができ、張りのある人生を送る。

(三) 早寝早起きが基本。太陽と共に生活しましょう。

強いて言えば、常に新しいことにチャレンジし、夢を追っかけ、一生涯青春の情熱を持ち続け、これから先みんなに支えられ、励まされ、助けられて生き、苦に負けず、何事にも頑張っ
ていこうと思います。

私の晩年の歩み

第十六期生文学芸学科 宮川 浜

滋賀県レイカディア大学（湖の理想郷）第十六期生として、

昨年九月二十一日に卒業させて頂き、早や半年が経ってしまいました。地域において、私に何が出来るのでしょうか。今考えていますことは、昨年二月から始めました通信講座の書道をもう少し頑張つて、書道で何かのお役にたちたいと、大それたことを思つて、目下張切っております。

三月十一日、レイカディア大学同窓会能登川分会総会に出席致し、大勢の先輩諸兄姉（実は私より年下の先輩も十名もおられますが）にお目にかかり、私は錚々たる皆様方と同席させて頂いたことに感激致しました。

昭和四十六年姑の没後、四十七年以降、地元婦人会幹事（一年）同支部長（一年）新発足の町日赤奉仕団委員長（四年）保護司（十五年）同時に町更生保護婦人会幹事（二年）同会長（十年）老人クラブ連合会婦人部長（一年）等々、お断わりが通らず、お引受けした福祉に係る諸団体への奉仕でした。

（人様のお役にたつことに奉仕したい気持だけは旺盛でした）この後は書道もですが、高齢の夫を助けつつ、共に楽しく年を重ねていきたいと思う今日この頃でございます。

心楽しく趣味に生く

第十六期生文芸学科 杉 沢 成 子

学舎の窓より眺めておりました。花水木の蕾もそろそろと膨らむ頃かと思えます。レイカディア大学を卒業して、早や六ヶ月が過ぎました。卒業後の友情の輪を大切にしていきたいと、月一回の短歌教室を続けております。その名も「鶴里会」という熟年にふさわしい名前を頂き、山村先生の熱心なご指導と豊富な知識・経験をお話し下さる講義に二時間が瞬く間に過ぎる思いです。他学科より二名の方が参加下さり十五名が在籍しております。前学科長さんが細かく心遣いして下さいますことに皆感謝しております。

町では、生涯学習の一つとして公民館の絵画教室に入会致しました。四十数年忘れていた絵筆を握り、琵琶湖の畔まで出かけ、四季の移り変わりや、また郷土に連なる鏡山、雪野山、田園風景等を楽しく写生しております。偉大な自然の前では上手に描こうなどと思えず、ただただ素直に、ありのままにと無心に時間の経つのも忘れ筆を走らせ、色を塗っております。

「継続は力なり」とか、短歌も絵も余裕をもち自然体で続け

ていくことが老後の生き甲斐にもなり、また健康につながっていくものと考えております。これからも機会ある毎に参加して参ります。

私の居間には、在学中に頂いたポスターが大事に貼られています。

「新4Sでいつも元気」

スリープ（ねむる） スマイル（わらう）

スポーツ（うんどう） スインギング（うたう）

時々眺めながら、なるほどと納得し日常生活を続ける上に心がけております。

私の健康法

第十六期生園芸学科 深 田 恒 次

日本人の平均寿命もいよいよ八十歳代に突入して、老後と言われる期間も随分長くなりました。この老後を如何に充実した幸福な生活を送ることが出来るか否かで、その人の一生の幸福度が決まるのではないのでしょうか。それには何と言っても、健康で暮すことが一番だと思います。

私は現在七十三歳ですが、二十数年前健康診断で糖尿病と診断され、以来薬を飲み続け、一年余り前より毎朝一回のインシュリン注射に切り換え現在に至っています。別にこれといった自覚症状はありません。医者 of 薦めもあり、体力低下を防ぐためにも毎日歩くことを決意して、今年の一月より降らない限り毎日歩いています。距離は八千歩から一万二千歩位、平均一万歩位です。歩く速度はかなり早く一時間に約五キロメートルです。歩き始めてから三ヶ月余りにしかなりませんが、気分は爽快で、体調もよく、何より気力の充実するのを感じます。

数年前に老人クラブの講演で「高齢者健康十訓」なる健康法を教わりました。

- (一) 少車多歩 (二) 少肉多菜 (三) 少糖多果 (四) 少塩多酢
- (五) 少食多齧 (六) 少衣多浴 (七) 少怒多笑 (八) 少煩多眠
- (九) 少言多行 (十) 少欲多施

つまり、乗り物に乗るのを少なくして出来るだけ多く歩くように心がけ、肉食は少なくして野菜を多く食べ、甘い菓子類は少なくして果物を多く摂る。塩分を控えて酢の物を食べ、食事は腹八分目にしてよく噛む。なるべく薄着して出来るだけ戸外に出て日光によく当たる。腹を立てずに笑って暮らす。くよくよしないのでよく眠り不言実行を励行して何事も欲ばらず出来る

だけ社会に奉仕する。ということです。

これぞ自然の法則に叶った老人誰でもが出来る健康法です。私はこれを紙に書いて見える所に貼り実践するよう心がけています。これからも健康で生きがいのある充実した老後を送るため、健康十訓をよく守り、一日一万歩を目標に頑張りたいと思います。

趣味を活かして

第十六期生陶芸学科 若井正次

高齢化社会が急速に進んでいると言われる昨今、私達高齢者は如何にして健康で社会に奉仕出来るか。このことを考えながら、お陰様で健康（十分とは言えない）で暮しております。

そこで私は竜王町老人クラブ連合会の陶芸教室で頑張っております。仲間を増やしていきたいと思い、大勢の方々に声をかけていますが大方の人は不器用だから、そんなこと出来ないと言っただけは進みませんでした。つい先日四名ほどの方が参加してくれました。私は幸いレイカディア大学で学んだことをいろいろと話しながら共に勉強しています。

では陶芸とは何か、粘土を紐状にして積み上げて、形を整えて仕上げるので総て手作りで作者の個性を作品に表現することが出来るのでおもしろい所があるのです。現在はワープロ等の普及で文字等はきれいに書くことが出来ますが、習字を習って個性のある文字を勉強しておられる方や水彩画で風景等を写生しておられるのもみな同じように、その人なりに個性を表わすということでは陶芸と同じです。

老クの教室では、形そのものが歪んでいても、それが雅味として引出されていればおもしろい作品と言えます。教室の友人と語りながら、次は何を作ろうか、また素焼きがすんだら、どんな釉薬をかけようかという頭を使いながら指先を動かしているのとボケ防止によいと聞いています。

つい先日私達が小学校当時のクラス会を開いた時、二十六人いた友達が十人しか集まりませんでした。都合の悪い人は三名で、半数の人は他界しておりました。半分の内の一人として亡くなった人の分も合わせて社会に尽さなければと思いを新たにしたところです。

今後は趣味の陶芸を活かして大勢の仲間をつくり、よりよい老後が、健康で明るい人生づくりに励みたいと思っています。

短歌に生きる

第十六期生文芸学科 村田 四郎

平成七年レイカディア大学を卒業して早や六ヶ月が経過しました。卒業後すぐに東京書道教育会に入会して短歌書道を習いまた十二月からは誘われて愛知川町の公民館において短歌を学友達と共に習っております。

私自身ももっとも勉強をせねばならぬが今年四月の新年度から地元市辺の公民館にて短歌倶楽部を発足させて頂き、地元愛好家の皆様と共に老後を楽しみたいと思っております。

短歌五首御笑読下さい。

法話果て手押車の老いの身は夕闇寒く家路急ぎて

霜月の日向に老いの立話笑ひの中にも淋しさにじむ

吹雪く日に湖東平野かたこと寒さにふるう暮の終電

北風の激しく雨戸叩く夜湯気上げ我を待つ湯とうふらまし
刈り終へし田起しをするトラクターえさを求めて烏舞ひ来

る

彦根愛犬支部

思いのままに

第一期生園芸学科 浅野実誠

世の中、そらごと、たわごと、まことあることなく、そうしたら、何がまことか？ 私は念仏だと思えますが……。

国会をはじめ、中心にならなければならぬものが何がよいかわからない。みんな自分を中心に動いている世の中だと思います。私そのものも、私を生かされている、生きているもの、そのもの自体が口にするものの、生きようとしているものの生命を奪って、生かされていることを知る。

何か良いことをしたいと思ってもそれがみんなに喜ばれることばかりではない。春・夏・秋・冬と季節の廻りと共に老人となり、何もしないで年を取ってきた。

他人が決めてくれたことに従う方が楽だ。忙しくなりそうになると適当にこなすか、逃げる方法を考える。失敗したことより、一回の成功したことをはつきり覚えて自慢する。自分の性格についてもあまり考えたことがない。こうした私は園芸新知

識によって毎日毎日を畑で過ごすことが多いのである。

何かせねば人として生れてきた甲斐がないと思っても、過去の軍隊生活やシベリヤ行きも、戦友も悪友も良友も、苦しかった生活も今は薄れて懐かしい思い出ともならない。友、遠方より来る楽しみも、私の方から求めない性格が災いし、日常は孫達に追い廻されている現在で、反省の日々を送っている生活です。

私の五十年

第三期生園芸学科 辻 幸夫

本庁から大阪管区へ転勤し今日までで五十年になる。大津の公務員宿舎の管理人として大津での生活二年を終え、退職して十五年目である。東京、大阪、彦根、舞鶴、米子、大津とそれぞれ変化のある単身生活であった。東京勤務中三月の大空襲に会い、身をもって味わった貴い経験であった。

県の老人大学にお世話になり伊香高で一年間聴講生として主として土と果樹の育て方を学び、町の公民館長二年、彦根市の交通安全指導員として二年間将来のある小学生を迎え挨拶と交

通信号を見ることを教え、私は若い人達に何をお返しすべきかを切に考えた。四十七年我が家を新築、五十三年に前庭五アールに埼玉県の三波の庭石四十個購入し七人の庭師に我が家で二泊してもらい完成した。庭木は米子で集めた木で今では庭にも馴れて見頃になり毎日を楽しませてくれます。

私は第一に先づ健康、自分の体は自分で守ることが鉄則である。何事も目標をもち創意工夫すること。それに合ったリズムを大切にしている。

老大に学んだ思い出と所感

第八期生文芸学科 渡 辺 博

昭和末期の第八期生として学んだ二年間は楽しく意義深いもので、また思い出多く心に残ることが多々あったと痛感しております。

生涯学習の盛んに唱えられている今日、JRを利用して往復約二時間を要はしましたが文芸科生として短歌と書道を月数時間、短歌では朝日新聞選者伊藤雪雄先生指導のもと懇切丁寧な添削等万葉集や古今和歌集等のご講義また書道を大津の三原研

田先生が指導され、書の歴史その字源は動生物の絵画に始まったこと等、また中国の書聖の臨書師匠のお手本に基づき添削指導を受け年一回開催される一人一人が作品展をめざしお互にベストを尽し自筆の出来栄を競い懸命だったことなど懐かしい思い出となっております。

一方学年合同で行なわれる講師諸先生の有意義な講座に耳を傾け二宮尊徳、西行法師、良寛和尚など史実に基づき、その生い立ちや思想その背景、教訓など微に入り細に亘り切々と語られわが心に刻み込んだものでした。

一方全校生合同のスポーツ大会に加えアトラクション等盛り沢山にそれぞれ趣好をこらしたことなど楽しく今でも思い出します。また一、二年選抜で行なわれるゲートボール大会、幸いと申しますか所属の文芸チームが優勝の栄に浴し杯を手にしたときの嬉しかったこと今も記憶に残る思い出となりました。

レクリエーションで江田島の旧海軍兵学校を見学。当時の生しい訓練の様子、資料、写真など目の当たり見て、つわもの達の夢のあとに接し感慨にむせびしばし眼頭の熱くなったことはよき思い出です。

顧みて、わずか二年間でしたが、得た知識と経験を活かし、来るべき二十一世紀に向って一つ新しい高齢者像づくり、二つ

明るく豊かな地域づくり、三つ保健福祉の推進役という三つの役割の担い手になるうと思ひます。幸い小生クラブ会長を十年余り務め今日に至っております。

余命の許す限り「健康・友愛・奉仕」の三大運動の推進をはかり県行政のレイカディア構想と市政の目指す花のあるゴミのない住みよい町づくりに取り組み健康で明るい生き生き心豊かな長寿社会づくりに貢献したいと念願しております。

戦争回想記

第十二期生文芸学科 寺本信一

昭和十五年金沢師団に入営、翌年三月南支広東着、同四月海南島にて台湾山砲隊に配属、福州作戦にて敵前上陸後太公鎮作戦の功により軍より感状を戴く。同六月広東に復帰、十二月大東亜戦に突入、同時に国境突破、香港に敵前上陸、入城後直ちに比島バタン、マニラ、コレヒドル戦等の後、ミンダナオ島ダバオの邦人救出に向い無事救出を終え、同六月残留隊二百を残し三百余をもって赤道を越えニューギニア島ギルワに上陸。南海支隊の隷下に入りモーレスピ攻略に参加。攻撃せしも糧秣、

弾薬の補給途絶えやむなく元来た道をブナ、ギルワ附近に退き補給を待つも沙汰なし。ソロモン沖海戦にて友軍惨敗し連合艦隊司令長官戦死の噂あるもデマだと信じる。だが食糧不足に堪え難く草木虫等全てを口にし、一時を凌ぐ有様。加えて後方より艦砲空より爆撃、前より野砲の三面攻撃に身のおきどころなき有様だが敵接近せし故か三面攻撃も漸時やみ機銃や小銃音のみとなるが我が二万余の将兵は完全に包囲される。医薬品は皆無、負傷兵や赤痢、マラリヤ患者続出。野戦病院とは名ばかり軍医や衛生兵も次々と倒れ患者の死体は山積みそのまま蛆や蠅が黒山の如き惨状は言語に絶するに余りあり、あたかも地獄絵を見る如し、日毎死者百人余と聞く。この旨司令部に報告するも陛下の御為、死守せよの一言、ようやく三ヶ月目の一月二十日速かに撤退せよの命下るも各隊共に歩行不能者多数ありこれら將兵には手榴弾を渡し、きつと迎えに来ると涙ながら別れ後方に急ぐ。途中死体累々と列なすなか屍を越えること幾日か後、救援隊のもとに着く。七十名集まる毎に潜水艦に乗り七月目にラバウルの兵站病院に入り、同十七年三月台湾行輸送船に乗り内地行きと心弾ませしも束の間敵艦に撃沈され三日三晩板にすがり意識不明のところ駆逐艦に拾われパラオに収容、またも病院船にてマニラ陸軍病院へ、療養の末、残留隊に復帰、生還者

四十一名と聞く。その後残留隊と共にビルマにて幾度か激戦を経て奇跡の生還をしたお陰で今日に至る。

合掌

ひもじさに戦友の屍が肉に見ゆ嗚呼餓鬼道に我れ落ちし日々

老いの日々を樹木と共に

第十二期生園芸学科 中村健蔵

私は老大の十二期生として米原校で学び、早や四九年の月日が経ちました。この間、園芸学科で辻与左衛門先生のご懇篤なご指導により園芸の基本ともいふべき内容を学びました。

紙面の関係上、その多くを語り得ませんが、この二九年の修業中で一貫して教えていただいたことは、先づ第一にそれぞれの樹木をよく観察してその特質をつかみ、環境を整えてやることまた、いつも木々からの声なき声に耳を傾け、心からの愛情を注いでやるのが大切なこと、こうして育った草木からは私達に精一杯の美しい緑や輝かしい花々を咲かせてくれることを知り、今更ながら人と樹木との深い関わりや自然の営みの偉大さを学びとることが出来ました。私達のOB会は二十三名でその名も愛樹会と名付けて、毎年二回会合を持ち、お互いの友情を

深めながらそれぞれの地域における社会参加の様子を発表するなどして励まし合っております。

次に私事で恐縮ですが、私は去る昭和六十二年四月に彦根市シルバー人材センターに入会させていただいて以来今日まで市内民間の希望に応じて庭木の葉刈り作業に従事致しておりますが、園芸学科で学んだお陰で一段と樹木への思いを深めるようになりました。一本一本の木の特性を生かすために、枯れ枝、立ち木、交叉枝、徒長枝、平行枝、さか枝それにひこ生えなどを剪定することで風通しも良くなり、幹には日がよく当り、病虫害も無くなり丈夫な木に育つことを学び、現場で実施致しております。

燦々と輝くお日さまのもとで木と語り合いながら作業出来ますことは何にも増して幸せなことだと喜んでおります。

これからも学んだ愛樹の心を胸に腕を磨きつつ市民の皆さんから喜んでいただけるシルバー会員として更なる奉仕を続けたいと思う今日この頃でございます。

七十路を緑の中で作業する幸せこれに優ることなし

う。

室内に飾る季節の花々よりも、それを活かしてくれる人の心づくしを余計に思うものである。卒業と入学・退職と入社など、「袖すりあうも他生の縁」という。別れは同時に出会いであり縁は大事にしたい。これを限りと思うことは悲しいけれど、その覚悟があつてこそ互いの心も通いあう。人は人を相手に生きていくものならば、何が大事と言つても人間同志の関係ほど大切なものはない。我々は仕事でも遊びでも、せつせと人間関係をつくるために生きていると言つても過言ではない。

利久と秀吉は悲劇的な出会いをしたのかも知れないが、今生でただ一度の出会いが悲劇であつても、二人は互いに孤独の深さを知っていたと思われる。利休翁は「一期一会」の何たるかを自己の人生で具現していた。

人と人との輪の中で生きている我々も、いま一度己の孤独をかみしめて「一期一会」の尊さ、有難さをじっくりと味わい充実した日々を送りたいものと思う。

歩くことの楽しさ

午前九時頃掃除洗濯が終る。身仕度を整えて一日の本格的な始まりです。急な坂道を登ると愛知川の堤防に出ます。琵琶湖に向つて四キロメートルを六十分かけて歩きます。その日の体調に合せ六年続けています。

歩くことを生活に取り入れるようになった動機は、定年退職後何となく生活に張りがなく健康面でも風邪を引きやすく、血液検査で中性脂肪が高くなつていと言われたのが始まりです。三日坊主になるかも知れないと思いましたが、とにかくやってみることにしました。

最初は三キロメートルの道程を汗をかきながら歩きました。何か挫折感に見舞われたこともありましたが、ひたすら歩き続けて気持ちに余裕も出来、朝日の登るすばらしさに思わず立ち止まり感嘆の声をもらしたこともありました。またいろんな人との出会いもありました。春になれば、すみれやたんぽぽが河川敷に小さな花の絨緞を敷きつめてくれます。雪で押しつぶされても時がくれば確実に生を歌い始める花に、思わず語りかけたくなるような優しい気持がこみあげてきます。

老年期ともなれば、病の苦しみや心の悩みがたくさん生じてきますが、歩くことにより心身共に爽快となり、くよくよと思ひ煩うことも吹きとんでいき心も安定してきます。それにより

積極的に行動しようという意欲も湧いてきます。

老いてもいつも心に、みずみずしさを失うことなく残された時間を大切にしながら、しっかりと自分と向い合って生きて行きたいと思います。

生きる幸せ

第十四期生生活学科 小林成子

平成五年九月老を卒業させて頂き早や二年六ヶ月が過ぎ去り早いものでございます。良き先生方にご指導を頂き、また良きお友達に恵まれて二年間、今更ながら懐かしく学んだことを感謝致しております。同級生の方々にはそれぞれの立場と趣味を生かされておられ何よりと思っております。

生活科卒業生十八名のクラス会が催されるたび参加致しておりました。皆さんと共に楽しい出会いでした。一昨年春、盛岡さん、岸さん、私の三人で計画し彦根城、博物館を見学のため桜見の方は満開とまでいっておりませんでした。花見の後甲良町一休庵で楽しい会食でにぎやかに久しぶりの出会いでお話の花が咲き時間の来るのも忘れてのひとときでした。湖東三山西

明寺へ参拝でしたが二、三の方が登られないので私も一休庵で休みをとっておりました。

一昨年予期せぬヘルニヤになり四ヶ月半の入院となり辛い日々でありました。お陰様で今は完全に治して頂きその後一年ほど通院致しました。病気を通じて私も地域のボランティア活動にめざして今では町社協の指導を受け愛犬地区愛の里ホームに三十名ほど利用者がおられます。訪問のため二ヶ月に一回手作りのお菓子を作ることになりました。豊郷町にも昨年の十月豊栄の里が立派に建設されて大きな入浴場が出来、町内の方お年寄りが昼食や入浴、おやつ等を頂かれ送迎バスを利用されておられます。私も豊栄の里に月何回かいろいろな行事、ボランティアにと積極的に精一杯老いの身ではありますが自分に出来ることを頑張っております。区の老人憩の家に週一回集まって六十五歳以上八十五歳位の方が寄りお茶を飲みながらいろいろ語りあい皆さんと楽しみにしておられます。朝九時より午後四時頃まで、お弁当持ちでこられる方もあります。その間いろいろの手芸をして楽しんでおられます。私もボケないように梅本先生にお習いしたことを思い出し手先を動かし一生懸命に残された人生を楽しみ朗らかに老後を送れるよう頑張っております。地域の皆様と福祉活動に参加出来ることを何よりの生きる幸せ

と思っております。

第十五期生スポレク学科 山田 佐太郎

いぶき会の集い

第十五期生園芸学科 曾根 理

私達第十五期生園芸学科を卒業した十七名で作られた会です。卒業してお互いの園芸技術の向上と、いつまでも親睦を深めるため年間一、二回の研修会を行なう。申し合わせに基づき、昨年十月三十一日に自分の家で観菊会を兼ね講師の辻先生にお越しいただき、研修会を行ない久方ぶりの再会で楽しい一日を過ごすことが出来ました。このようなすばらしい機会が持てたのも良き講師と良き学友との出会いのお陰と喜んでゐる次第です。私も毎年菊を百鉢余り作り、今では盆栽も百余鉢となり、四季を通して折々の花や、樹姿を眺める楽しさを味わっております。これからも盆栽を自分の生涯の生き甲斐として、愛情こめて培養管理をしてゆきたいと思っております。

私とスポレク

『天真瀾漫』私の一番好きな言葉です。最近では『現役』とか『停年』とかいう言葉がよく使われるが、それらは何を意味するのでしょうか。現役とは、昔は兵役に服している人のことを指したが、今では職場で働いている人のことを言い、また停年とは一定の年齢に達して長年勤務していた職場を退くことであります。しかし退くといっても、何も働くのをやめるということではないと思う。

私も七十年の人生経験を得てきましたが、今だに何一つ完成したものはありません。ただ自慢出来ることは、今日まで病いとは縁がなく、健康な体であります。それは長年続けている朝の体操・縄飛びと、物事には余りこだわらない天真瀾漫な性分（人から言われる）かも知れない。それ故にレイカディア大学スポレク学科を選考したのであります。

今では、地域老人クラブを始め、ボランティアで週に二回、地元保育園老人デイサービスセンターや、特別養護老人ホームへ出向き、利用者の方々と簡単な体操やゲームにクラフト等で数時間楽しんでいますが、その時のお年寄りたちの表情はいきいきと真剣で明るく、出来た時の喜びは格別でとても筆舌では

表わせない。

また月に三回、老人ホームの入居者と市内のスーパーへショッピングに同行、車椅子のお手伝いなどしています。菓子や果物類など自分達の好みのものを買う楽しさは幾つになっても変わらない。

平成五年より毎月十五日に、町内老人会々報を編集発行していますが、やはり自分の得手から、健康とスポーツに関する記事が多くなる。でも会員の皆さんに納得していただき喜んで貰っていることが嬉しい。

我が国では高齢者が年毎に増加し、二十一世紀には約三千万人と予想され、その対応に全国老人クラブ連合会では『二十一世紀プラン』を計画推進中です。

人生百年時代は決して夢ではない。先づ心と体の健康づくりのために、私とスポレクは二人三脚で二十一世紀に向けて走り続けたいと思っています。

私の行く道

第十五期生 スポレク学科 山田 愛子

五十年前の私達は、「娘ざかりの花ざかり」男性三人に女性トラックに一杯とも言われ、好き嫌いも言えず親の言いなりに嫁入りしました。国のため家のため、姑に仕え夫に仕え、子のため孫のため、為々に生きた。人生でしたが、老いてレイカディア大学を卒業させて頂きお陰様で地域で頑張れる身の幸せを感じ謝しております。

日本人の気質は、長いものに巻かれ、見もせず、聞きもせず、確かめる力もなく、黙々と生活し暮らしてきました。若い人と話もせず、聞いてもくれないと、だんだん頑固になり、身勝手になり苦労してきたのだから病気になるのも嫁が介護するのは当たり前と思いきや、こんでいるのは無理なこと。いろいろと悪い所が出てくるのだと。自覚が必要。どのように老いていくか、大きな問題です。一生懸命人生を歩んできたのだから最後の死に方こそ人生の修行だと思っても急に出来ることはありません。その良薬は何か。「相手の身になってみる」と「回りの人達に心を通わすように日々の心がけ次第だ」と思います。

今は元気なつもりでも、最後は嫁の世話にならなければ生きられないことを十分自覚し、介護する側の精神的な苦勞、このことを忘れず、本当に心からすまないと言に出る日々でありたいと念じます。母として、祖母として言うべきことは言える、

勇気ある、明るい人生総仕上げを祈願しています。

韻会近況

第十五期生文芸学科 野上雄三

「韻会」とは米原校文芸学部十五期生のクラス会の名称である。在学中、旧校歌の一節『韻きあいつつ明日をひらかん』から頂戴して学級誌の名前として以来、卒業句集の題名ともあり卒業してからも交流の絆としてクラス会の名前も自然にこれに決まったのである。

さて、韻会の活動は、月に一回とまではいかないがそれに近い頻度で集まっている。集まっておくことの一つは俳句会である。入学時殆んどが初心者であったものが、何とか俳句らしいものを作れるようになったのだから卒業後も続けたいと、中川いさを先生のご厚意で引続きご指導頂いているのである。しかし、俳句よりも顔を合わせておしゃべりをするの方が楽しいと言う者が多く、たいして上達の様子は見えないようである。という訳でもう一つは俳句をタブーにした単なる「あつまり」である。この日はたいがい名勝か御馳走つきで、大学時代に戻

ってわいわいとおしゃべりに日を過ごすのである。話題は大学で学んだ書道や俳句のことから政治経済まで。また各地域で自治会や老人会、民生委員等で活躍している者が多いので、自然そういう場での愚痴から改善策までの研修会となることもある。お酒が入ればカラオケも飛び出すこと勿論である。

と、こんなわが「韻会」であるが、楽しく無駄口をたたいているようでも、会名の如く韻き合って成長していることは確かである。その成果の一端を紹介すれば、書道では今年の「湖北書初展」で、清水さんが特選。

また竜王町「鏡の里の歌」では、俳句の部で瀧沢さんが特選の外、五名が入選、短歌の部で小西さんが特選と他に二名入選。入学時二十四名だったクラスが、病死と傷病退学で卒業時は二十二名になったけれども、幸いにしてその後は一人も欠けることがなく、それどころか、中途退学のMさんも俳句会には郵便参加で仲間入りしてもらっている。いつまでも元気で、楽しく韻き合いなから「韻会」を続けたいというのが会員みんなの願いである。

想いのままに

第十五期生生活学科 辻 みち子

戦後に、かつての封建的な日本は民主主義、自由主義の制度に衣替えされたが、復興のためには官民挙げて一致協力して事に当らなければならなかった。そのお陰で経済も復興し、見事に平準化された社会が出来上った。身近な私達の暮しを眺めても、余裕が出てきたせいも、趣味の会、教養講座にと出向き、果ては海外旅行に足を延ばして見聞を広めることができるようになった。

昨今、世界に冠たる豊かさを維持発展させるためには、どうあるべきかが各分野で見直されてきている。たとえば、均質な労働者を養成するためには、画一教育でということであったかも知れないが、規格大量生産の場合でも今日では殆んどがコンピュータに頼っている。これからは個を見据えた教育をということが考えられてきている。このことは技術のみならず、文化、芸術の発展にも大切である。

と言うのは、人のもつ個性、素質、能力はそれぞれ異なるし興味、関心の度合も違うからである。

レイカディアでのように、各個人が選んだ科目であるから、心底より楽しく学べたし、その結果身についた成果に、喜びもひとしおであった。こと程左様に、身近な地域の活動にしても個人個人の意志が尊重され、お互い好きなことができるものでありたい。かつてのように、横並び思想というか「皆と一緒」が良いことで、違うことはよくない、という価値観では、個を伸ばすことは出来ない。

私達の老後は永い、個々の信念のもとに行動したいものである。

今、私の生き甲斐として

第十六期生園芸学科 橋本 武浩

レイカディア大学で二カ年の学習を続けている時、息子がワiproを新しく買い替え、今まで使っていた古いのが部屋の隅に放ってあったものを面白半分にいじっている間に、だんだん興味を覚えるようになり、在学中にも園芸学科の名簿や広報の他に、簡単な案内文等を作成して学友たちに配布して喜んで頂いたことも今になってみると懐かしい思い出のひとつであります。

す。

ちょうど昨年は、昭和の年号に当てはめると七十年になり、私達古稀を過ぎた者にとっては、終生忘れることのできないあの忌わしい大戦の終結を迎え、悲惨のどん底に落ち込んだ時から数えて五十周年を迎えることになります。

当時のことを知る人の数も次第に少なくなり、共に遊び、学んだ友達や、厳しい訓練を受けた多くの戦友を失った悲しみから立ち上がり、戦後のめざましい復興を見ることができ、何一つ不自由のない幸せですばらしい世の中になった喜びと、今は亡き多くの英霊に追善の供養の気持ちを含めて、私達年老いた仲間呼びかけ、戦後五十周年記念誌の刊行を計画し、多くの方のご賛同を得て昨年八月十五日の記念日に発行し、皆さんに配布し喜んで頂きました。

この記事を読んで頂くと終戦当時の世の中の様子についての一面を知って貰えると思いますが、更にもう少しくわしい記録を後世の人達に知らせる手だてがあったらと考え、今度は私達を育ててくれた「字の歴史」についての記録を書き残す計画をたて、現在その作業について遅まきながら取り組んでいる最中であります。

このことについては、字の中堅層の代表で組織された「むら

づくり委員会」で策定した計画の一環として、高齢者に古い歴史の作成が依頼されたことと相俟って、ちょうど同じ考えを持っていましたが、それについての古い資料集めに苦慮しているところであります。

現在日々の生活を営んでいるありのままの様子についての投稿を呼びかけ、出来るだけ早い時期に完成して、肩の荷を降ろすことが出来ればと考え、これを私の生き甲斐のひとつとして精進を続けていきたいと念じています。

感謝の日々

第十六期生文芸学科 野崎 満智子

大雪に悩まされた今年もようやく各地の花だよりで春の息吹きが感じられるようになった今日この頃です。

レイカディア大学には十六期生として二年間皆さんの仲間入りをして勉強出来ましたことに感謝しております。

平和な時代を迎え、溢れるほどの物資、医療、社会福祉など高齢者が生きのびていくためには恵まれた有難い平成の御代です。

卒業しましてからは、文芸学科の皆さんとの交流をはかり、月一回小西先生のご指導で短歌会を開き楽しく勉強しています。また旅行等も計画して下さり、一泊で長野県まで足をのぼしお花見に出かけ、個人ではなかなか行くことのできない所へ案内して頂けるので幸せです。

また私は毎日ラジオ体操をしたり、昔の人の文字が読みたいので古文書の見方教室でむつかしいのですが取り組んでいます。高齢者になりましたも、夢だけは捨てずに大きくもって健康で元気で明るく一日一日を過ごしていきたいと願う日々です。レイカディア大学も早や十五周年、卒業生が各方面で活躍され、高齢者の前途に明るい希望がみなぎり、益々のご発展を祈っております。

剛志君の瞳

第十六期生文芸学科 大橋 春子

「おばあちゃん髪白くて美しいね。ふわふわだね。どうして白い髪になったの?」「おばあちゃんはね年寄りだからよ。剛志ちゃんも一生懸命勉強して大人になり、おじいちゃんになっ

たら白い美しい髪になるかもね」「僕ね頑張ったから一番上の級になったんだよ」「よく頑張ったね。これからも頑張ろうね」習字教室に来る小三の剛志君との会話でした。

レイカディア大学で充実した二年間を有意義に勉強させて頂き大学で学んだ書道を自分の生き甲斐として過ごせられたらこの上ない幸せと思いい少ない日々の予定をこなしつつ学ばせて頂いております。

戦後の日本は驚異的な経済的発展を遂げ、物の豊かな時代を迎えましたが、その反面、そのひずみが大人の世界にとどまらず純真な子供の世界を直撃して少年を非行へと追いやり、いじめ、学校暴力など目を覆うような現実であります。剛志君のような清らかな瞳をもつ子らが物事の道理を見きわめ、立派に成長してくれることでしょう。老いとはいえ私も自己を見つめ生涯自分を磨いていくべく努力したいと思っております。

過日神戸で開かれた「ちぎり絵展全国大会」を観賞させて頂きました。すばらしいちぎり絵の数々、目をみはるばかりでした。全国の先生方の一枚一枚のパネルが三百余枚組み合され一枚の風景として見事に完成されておりました。

この風景こそ一人一人の意気の合った賜と人間関係の大切さを学ばせて頂きました。

書道とちぎり絵とを生きる限り挑戦してみようと益々意欲を燃やしている私です。

菊作り三昧

第十六期生園芸学科 石橋 隆 吉

数年前より、地域の方から菊作りを習い大菊三本仕立てを楽しんでいました。ところが、加齢に伴い大きな物の取り扱いが苦になってきましたため、昨年からコンパクトで扱いやすく、また栽培期間が短い利点もあって、しかも九寸鉢の花に劣らぬ豪華な花を見せるミニの三本仕立て「だるま作り」と、更に狭いスペースでも作れる「福助作り」に挑戦しました。

その経過を申し上げますと次の通りでした。
まず、短幹性の品種の中から「国華大社(赤)」 「国華時(黄)」 「国華歴(白)」 いづれも見栄えの良い厚走りを手当てしました。用土は、市販の「菊の土」に少し山砂を加え作りました。挿し穂苗は、十日前頃にビーナイン四百倍液を散布しました。六月中旬頃挿し芽、八月五日頃に七号鉢に定植、管理は大物同様で摘芯は、三枝分岐点を低いように心がけました。鉢縁より

五センチメートル以内に納めようとはしましたが、なかなか難しいものでした。

肥料は、国華園の乾燥肥料他にグリーンキング。活力剤は、国華園のキング。殺菌剤は、サプロール。殺虫剤は、マラソン・スミチオン。矮化剤は、ビーナインを適宜使用しました。

秋には丹精した菊が鉢底より花首まで五十七センチメートル以下に仕立て上がり、見事な大輪の花を見て初心者なりに一段の楽しみを覚え翌年も頑張りたいと意欲を燃やしていました。

「福助作り」も一月遅れで、同じような作業管理をしました。が難しくビーナインの使用・処理技術を十分勉強しなければならぬと痛感しました。

福助で思い通り仕立て上がった菊は、「国華大社(赤)」が鉢底より花首まで二十一センチメートル以下に納めることが出来ました。

作品は、地区の文化祭において自治会館に展示され、皆さんの目を楽しんでいただきました。私も、今後機会あるごとに、各地の展示会に足を運びよく菊を見て、また菊の写真集などで勉強、菊作りの参考にして、菊作り三昧に浸りたいと思います。

人生 雑感

第七期生陶芸学科 前田新吾

昨日いひ今日暮して飛鳥川流れて早き月日なりけり

若い時には夢多く、また大きく達成した夢もあり、バブルの如くハジケ飛んだそれもあつた。成し遂げたときの感激、今でも昨日のようにはつきりと脳裏に刻みこまれております。その反対失意落胆に暮れた日も少なからず。しかしこの年齢になつてみると何かほのぼのとした筆舌に尽し難く懐かしい想い出となつてきました。年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからずこれからの人生を意義あるものにと請い願う毎日であります。

「ふる里の伝承」に魅せられて

第十一期生生活学科 前田恒子

毎週日曜日の五時過ぎから放送されている「ふるさと」の伝承」

を興味をもって見ています。

日本全国あちらこちらの村祭りのあり方を放映されているのです。私の住んでいる木之本町でも杉野地区の「行い」の行事が放映されました。どこの町も村もその地方で行れる一年間の祭りの行事の一部始終を放映されるわけです。

昔々、その昔からふる里の人々に語り伝えられてきた祭事の大切さ、そしてその伝え方受け取り方実行方法のむづかしさ：など現在の社会生活の中ではなるべくならば避けられるものは避け手抜きすることの多くなっている時世、だんだんと失われてゆく伝承事を振り返ってみる時にいかに殺伐とした世の中になつていくものかと淋しさを覚えます。

伝承とはいえ、事によってはある程度の改善も必要とするところもあるかも知れません。それもまたよしとするとして、この放映をみるたびにふる里を愛し祭り事をいかに守り伝えてゆくかの人々の気持と努力、そして誇りに敬意を表するものであります。毎日の忙しさ、勤務の大切さの中のふる里の祭りの伝承は大変な努力のいることです。しかしこれを受け継ぐことにより町や村の人々がしっかりと手をつなぎ支えあってわかりあえて一つになることにより、初めてふるさとの温かさ、安らぎを得られるのではないでしょうか。

だんだん簡略に手を抜くことは、どんどん人々の心が離れてゆく現象につながるものだとつくづく感じ、この「ふるさとの伝承」のすばらしさ、大切さにひとしお愛着を感じ楽しんで見えています。このことのために村の老人から子供まで、男も女もこぞって一丸となって参加することにより、「ふるさとの伝承」の意義の尊さを感じとれて、すばらしい郷土が生れてくるものと信じます。

優雅にはつらつと

第十一期生文芸学科 笹原光子

平成二年九月卒業以来早や五年六ヶ月、在学中は良き師良き友に恵まれ、楽しい学生生活を経験させていただき、折にふれて懐しく思い出しております。

私も昨今は息子夫婦が憂いなく勤められるようにとの思いでいろいろと家のことをなし、小学生の孫のおやつの話や宿題の勉強を見るのが日課です。嫁が孫と同じ学校に勤めていますので、欠かさず授業参観にも出かけます。

その間月二回私も水墨画教室に参加。あこがれて入ったもの

の墨の濃淡、運筆、余白の取り方、いづれをとっても難かしく墨絵は室町時代禅僧たちにより中国から伝わったもので、日本の伝統芸術の一つとして国際的にも高く評価されているのと。白い空間に墨一色で表現していく墨絵はやり直しのきかない一本勝負の世界です。また墨絵は人なりとも申します。自然から得た感動を筆に託して表現する喜び。風雅を愛することは限りある人生にとって大変有意義なことと思います。「初心生涯」をモットーとして究めてゆきたいと思っております。

町の公民館講座の中の「あすなろ体操」も楽しみの一つです。エアロビクス、リズム体操に始まり、キック、サイドステップ各種を音楽に合わせて手足脇腹などを動かしていますと、凍えた身体もポカポカ。その後簡易なブルース、タンゴのある日もあり、最後は緩やかなストレッチ体操で終わります。若い人の多いメンバーなので心も体もリフレッシュ。動ける限りボケ防止にもなると確信して続ける覚悟です。

また、少しでもお手伝いが出来ればと地区の病気のお年寄りのお宅へ励ましに寄せていただいたりもしています。

人と人との和を大切に、健康で、「お陰様で」という感謝の気持ち忘れず日々を送りたいと念願しているこの日頃でございます。

墨跡に親しみて

第十二期生生活学科 中居 すみ

老大を卒業して早や五年、楽しい思い出いろいろありました。毎年押絵を同期の南院さんに教えて頂き、今年はえとのねずみ他数々の作品が作れるようになり、また同窓生とのお話も楽しく家に飾りプレゼントしたりと心豊かに毎年楽しんでおります。また日赤奉仕団に二年間奉仕させて頂き地域の皆さんのご苦勞もわからせてもらえて有意義に過ぎました。

私は毛筆を持っているときは心が落ちつき、只今は色紙や条幅も手がけて毛筆の味わいの深さは格別で、あれこれと自分の力量も忘れ「楽しみの書」を作り、奥深い書道に頭や手先を使うことで「ボケ」防止にもなると信じ続けていきたいです。

今年は楽市で展示させてもらい、このようなことが出来る平和を喜び、謙虚に皆さんに助けられ、出会いの大切さを感じ、神仏の加護を頂きながら一病息災で余生を送らせてもらいたいと思うこの頃です。

老大の益々のご発展を祈ります。

病んで思うこと

第十二期生スポレク学科 藤 居 信 之

古稀も過ぎ職業ともお別れし、その上神経痛に悩む身となつて、はじめて私は「老人」という文言が好きになってきました。私より若いのに老人の交通事故として扱われる新聞記事を見るにつけても、やはり私も老人だなあ。と実感するとともに老人であることを誇ることに出来る活力のある老人になりたいものと念願しております。

希望と夢を持ち続ける限り人は老いない。肉体の老いは必然であっても、意欲ある限り心の老いは無縁であると説くウルマンの青春の詩は、老人大学の日誌帳に掲載されていますが、まさしく心若き老人へのあこがれの詩でもありましょう。

毎日歩け歩けと十キロメートル歩行を日課としていた私が、親戚友人など葬儀が重なり、意欲が衰えたのか、二ヶ月間ほど日課を中断したために突然激しい腰痛が続き歩行も困難となり以後約二年の今日もなお通院治療を余儀なくされていますが、改めて日課中断の無気力な日々を後悔したことです。しかし病んだ身体でも運動を続ければ快復していきます。殆んど皆出席

でリハビリにも通いました。継続は力なりとも言われますが、適切な医療効果と相俟って、今では十キロメートル歩行を日課とするまで快復してきました。痛くても我慢して歩き続けた苦勞が報いられた気がします。私に限定された一事例にすぎません。しかし運動することへの執念が、心を活性化させ、継続への原動力となったものと確信しております。杖にすがりながら時には絶望しながらも、年を重ねただけで人は老いない。理想を失う時に初めて老いがくる。と歌うウルマンの詩に励まされたことでありました。老人大学で学んだことが、私に自信と希望を取り戻す糧となったことを感謝する次第であります。

主治医の適切な治療とご懇篤なご指導の成果が今日をもたらしたことは勿論であり、日頃感謝し畏敬申し上げている所でありますが、心に若さを持ち続ける限り、病気にも勝てることを知り得たし、誇れる老人をめざして、生ある限り希望実現への努力を続けたいものであります。

「自我」と「おはからい」

「人生七十、古来稀なり」と古人は申しましたが、今は平均寿命が古稀よりも遥かに延びました。まさに驚異的な事実と言えましょう。しかし如何に平均寿命が延びたと言っても、個々の人の命、すなわち私個人の命の終末とは別のことなのです。朝、目が覚める―あたりの物が見える―庭にさえざる鳥の声が聞こえる……。

ああ、今朝も生きる命を賜ったとしみじみ思います。この当り前と思っていたことが当り前でない有難いことだと思ひ及ぶとき、生かされて生きる命を神仏のおはからいと気づかしめられる日々を感謝致します。

私の人生はかくあるべきだ、こうでなければならぬと固執することは自我なのだと思います。自我に囚われることによつて、思うようにならない現実を悔む苦悩が生じます。

このとき、おはからいにゆだねると言っても、ただ手をこまねいて何もしないということではなく、試みと失敗の繰り返しであとから思えば無意味なあがきに過ぎなかったことも、歩むべき定められた道程だったと気づかしめられることだと思います。

この先の余生がいかにあろうとも、結果として全ておはからいでございましたと頭を下げ、おはからいのままに生かされて生きたいと願っております。

最後に拙作ですが最近の俳句と和歌三句三首をお目にかけてこの稿を終りたく存じます。

日脚伸ぶ特攻基地の乙女像

春潮の渦を見おろす磨崖仏

三歳の兎に珠数を買う仏生会

娶りたる子が家去りて四月経ぬ安堵と虚交々の日々

雁帰る父祖の地大和郡山城下町いま森閑と寂ぶ

城門の鋳黒光り春浅き彦根の城に風花の舞う

奉仕活動に参加して

第十三期生生活学科 吉田 まさる

老卒卒業後の私は、赤十字奉仕団の本部役員として地域に即した奉仕活動に励んできました。その中で忘れることのできな活動として、昨年一月十七日の阪神大震災の後二回にわたり避難所へ炊き出し奉仕に参加したことです。

前日は一日がかりで炊き出しの準備をし、バスの中にはポリタンクに水を、それに大きな炊飯器、鍋、まな板など調理一式と野菜などを積みこみました。

当日は朝四時半に集合し、本部役員十一名と社協の方々で四時間がかりで目的地の西宮市段上小学校へ行きました。

早速テントの下で調理にとりかかりました。一回目は二百五十人分の豚汁やわかめご飯、デザートを作りました。それに持ってきたぜいたく煮や里いもの煮物、また役員一人ずつが持ってきた漬物を食べてもらいました。

二回目は、あずきときな粉のおはぎ三個人入りのバック詰めを二百人分、それに大根と人参の酢の物とひじきの煮物、果物のデザートを作りました。食べ終るとわざわざ私達の所へ来て、

「滋賀県のお米はおいしいですね。ごちそうさま」「手作りの煮物など食べたことがないのでおいしかったです」「お漬物がとてもおいしい」と言ってお礼を言いに来て下さる方が何人かあり皆さんに喜んでもらえ、疲れもどこかへ飛んで行きました。

一回目(二月十七日)の炊き出し奉仕をしている姿を撮って下さった方がありました。一週間後その方からお礼状と共にこの写真を送って下さいました。この方は七十歳近い方で奥さんと二人で避難所生活をしておられたが今は新築した家で住んでおられます。

過日、その方が主人が亡くなったことを知り、ぜひ仏様にお参りをしたいと言って西宮市より訪ねて来て下さいました。

遠い所をわざわざ来て下さったご厚意に感謝し、とても嬉しく
思い、ふれあいを深めることが出来てよかったですと思いました。

健康 第一

第十三期生文芸学科 河路 寛

ようやくに雪囲いとく今年かな

今年は天候が悪く桜の開花も大変遅れています。昨年十一月
始め突然物が二重に見えるようになり、眼鏡が合っていないの
かと思いい眼鏡店で度数を調べてもらったが異状なしとのことで
片目で行動していましたが、二日ほどした夜、体の様子が変に
なり息子に頼み近くの病院に連れて行ってもらいました。

診察の結果「即入院」と言われ検査が終わるまでは絶対安静に
せよとのこと。体自体はそんなに悪いとは思ってはず、医師も
CTを撮ったが「異状なし」と言われMRで調べるとのこと。
その結果も異状なしと告げられました。「物が二重に見える
のは目が悪いのではなく、脳の方からきている」とのこと。朝夕
二回の点滴を受けるようになりました。廊下を歩くにも片目な
ら歩けますが両目では二重に見えて真っすぐには歩けませんで

した。

朝夕の点滴みつめ冬に入る

しかし二週間が過ぎる頃、元のように物が一つに見えるよう
になってきました。病院の近くに北陸自動車道が通っていて、
速度の早い車には目がついていけず一つには見えません。三週
間目には殆んど全快に近くなりました。点滴も三週間が
限度と言われ、その後は投薬に切り変えられました。ちょうど
その頃は近くの山々が紅葉の季節となってきたので今までにない美
しい自然界、元以上の目にして頂きました。

湖北路も雑木紅葉で賑わいぬ

今までは自分の年など余り考えていませんでしたが入院し、
来年は古稀を迎える年だ。また悪くなれば家族の者、病院の先
生、看護婦さん、村の皆さんに心配をかけ、人々のお陰で生き
ていることに感謝するようになりました。ちょうど四週間です
事退院することが出来ました。現在は月一度の通院はしていま
すが、以前は眼鏡をかけて〇、七度ほどしか見えていなかった
が現在は同じ眼鏡で一、〇以上に見えるようになりました。
私の体質は肥満の方で血圧は低い方です。先ず「体重を減ら
す努力をなさい」と言われ標準に近い体重になるよう毎日心
がけていて再び入院することのないようにしています。

レイカディア大学同窓会結成十五周年に当り、今の幸福を感じ謝し一筆書かせて頂きました。今後の同窓会の益々のご発展と会員皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り致します。

感 謝

第十三期生文芸学科 寺 倉 千鶴子

祈るのみただ祈るのみ古稀の春

二年前の新年の句です。朝「今日も健康で生きさせて下さい」と手を合せます。両親も夫も還暦さえ迎えることなくこの世を去りました。昨年夫の十七回忌を勤めました。弱虫の私がよく独りで生きてこられたと思います。結婚以来専業主婦で家事に育児にと一生懸命生きてきました。よき妻よき母として子供や夫のために尽すことが私の生き甲斐でした。子供達は無事独立し家庭をもち私のもとを去ってゆき夫と二人だけになりました。突然健康そのものだと思っていた夫がガンで逝ってしまったのです。生き甲斐のすべてを失い独りとり残されてどう生きてゆけばいいのか、何度吐息をついたことか。本当にどん底につき落された日々でした。こんな老後がくるなど想像もしなかった

私ですが、ひとりという自由を与えられて自分のために生きなければと思ひ直して老大に入学させていただきました。よき師よき友にめぐりあい年も忘れ男女共学、学生として充実した二年間を楽しく学ばせていただきました。

文芸学科十三期生である私たちは、卒業後も十三栄会という会をもち毎月句会、吟行など俳句の勉強を続けております。お互いに研鑽しあう喜びも味わいおつきあいもより深くなり月一度の出会いが何よりの楽しみとなっています。

独りぼっちの私がお老大のご縁で多くのよき友を得たことは何より嬉しく、また俳句を学ばせていただいたお陰で季語、表現形式など初めてで戸惑いながらの句作ですが、今までと違い、自然の営みにも日常生活の中にもちよっと心を動かされたり心ひかれたり、心豊かな日々を送らせていただけていますことを感謝しております。

お仲間の友情に支えられて楽しい余生を歩ませていただきました。有難うございます。



手縫いぞうきん

第十四期生

是洞 禎

『女性部の方には御苦勞様ですが今年度も雑巾をお願い致します。女性部長さんには取りまとめ方よろしくお願い致します』
単位老人クラブの総会における会長さんのご挨拶であります。

去る昭和六十二年から平成二年まで私は町老人クラブ連合会の活動推進員（現在のコーディネーター）として老人クラブ連合会事務局に勤務しておりました。平成元年に町老ク連副会長兼婦人部長（現在は女性部長と呼んでいる）堀江ハルさんの発案で老人クラブの婦人部会員が手縫いぞうきんを縫って各学校等へ贈呈してはどうかと老人クラブ連合会の総会に提案されて会員全員に徹底されて現在も手縫いぞうきん作りが続いております。このぞうきんは手縫いでなければなりません。というのは手を動かして手先の運動を行い、ボケ防止、痴呆防止のためにも手を動かすことが目的でもある。雑巾は古いタオル（二〜三回使用したタオル）を二つ折りにして縫うことでそのぐらいが雑巾として使いやすいのである。女性部全員が各二枚宛作って提出してもらおうように致しました。老ク連女性部だけであるが

約千枚ほど集まります。毎年二月から三月にかけての年度末になると各単位の老人クラブ女性部長さんがとりまとめた雑巾を老ク連事務局へ持ってこられるのです。老ク連事務局では町内各小学校、中学校、幼稚園、障害者施設共同作業所、老人福祉センター等に分配して持って行きます。毎年各小学校、中学校、幼稚園、その他等から町老人クラブに対し嬉しい礼状が来ております。老人クラブ活動としても大変重宝がられております。この手縫いぞうきんの活動をいつまでも続けてほしいものです。

高月町の誇り

第十四期生文芸学科 雨森多鶴

観光の視野の中なり糸柳

今渡岸寺の門前の柳が芽吹き静かな風に揺れるさまは優しい観音様を彷彿とさせる思いです。

どこかで自己紹介をする時は、国宝渡岸寺観音様の近くです」と言うところ存知の方や興味のある方などは話がはずむのです。本当に美しい観音様で幾度拝してもあきることはありません。また資料館には実物大のカラー写真で飾られ高度な撮影により

輝くように写し出されあまりの美しさに圧倒される思いで拝伏
させて頂いております。

新緑の参道を歩むだけで和み、また歌の種が出来て心のより
どころとお参りしつつ高月町随一の名所と致しております。

国宝の観音様の近く住み羨なき身の日日を喜ぶ

お御堂の豊の上にも容赦なく春一番の抜けてゆくなり

また近くに広々とした出会いの森に新たなビジョンとして県
下に誇る図書館が出来たのです。茉莉花像を前に輪奐な美しい
建築に目を奪うばかりで町の自慢のシンボルが増えました。二
階は井上靖氏の記念室やいろいろの展示物で階下は種目別に数
々の本が置かれ、そして三週間無料で借して頂け本当に有難く
お陰様で家に一人いても退屈という言葉を知らず過ごせます。

この冬は吉川英治の「新平家物語」を読み先生が精進齋さ
れた姿で七年間に及んでお書きになられたことに、ただただ感
動と感銘の言葉につきました。

親鸞においては苦勞して仏の道を尋ねられたお姿を後世に伝
えたくお書きになられたであろうに今京都の本願寺での在り方
に疑問を抱く思いです。

私本太平記には関西地方が多く出て、近くは蓮華寺の悲しい
場面などと、雄大な歴史の叙事詩を見せて下さる筆華のおもし

ろさに、また修羅を生きていく人間のあらがうべく宿業に対し
てどうすべきかの問いかけでもあるのか、感慨無量の思いで読
みふけりました。

一冊の本で人生観が変わるほど感動される方もあり読書は心の
栄養源でもある。これから老いてゆく中で孤独にならず心豊か
に夢の世界で遊べる読書の楽しみは格別のものである。

新平家読み終えて今胸あつく戦なき世のその尊くて
雄大な歴史ひもとく文章の英治の世界想ひたすら
拙い文を書きつつ皆様のご健康をお祈り申し上げます。

平和への祈り

第十五期生スポレク学科 尾 木 輝 雄

若き勇士「特攻隊員」の数々の資料を収めた九州の知覧特攻
平和会館を見学して痛感した。

戦後五十年が過ぎた。あの太平洋戦争末期の沖縄決戦には人
類史上類のないような悲惨さを我が国は体験しているのです。

私達十五期生のスポレク科で先日卒業後旅行として南九州方
面のコースのなかで、鹿児島県知覧町の知覧特攻平和会館を見

学しました。

十七歳、十八歳の少年飛行兵、学徒出陣の特攻操縦見習士官ら若き勇士らが本土最南端の特攻基地の鹿児島県知覧町から戦況が緊迫した昭和二十年、沖繩に上陸した米軍基地などへの飛行機もろとも肉弾となり一機一艦の突撃を敢行したのです。陸軍航空特別攻撃隊なのです。軽飛行機で一人乗りの飛行機は燃料は「行き」だけの燃料でまさに自爆そのものです。

「特攻隊の若桜」とか「若き特攻勇士」などと呼ばれ、国を思い、父母を思い、我が祖国日本は、必ず勝つとの信念のもとに壮途につかれ一命を捧げての花と散って行ったのでしょうか。

若き特攻隊員の英霊写真をはじめ、隊員の遺書、絶筆など、数多くの遺品などなど。出撃から突撃への特攻勇士の戦史、資料等、見る人々には、まさに心に迫ってくるものがありました。若き隊員達は、日本の永遠の平和を願いながら死んでいったのでしょうか？……

出撃二十分前の腹ごしらえの写真、出撃前夜の仲間同志での「腕相撲」の写真、別れの盃の写真など見るとき、実にふびんと申すべきか、悲惨さの物語りとしか思えないのです。

昭和二十年は私は旧制中学二年の時でしたから四年生五年生の先輩の方々です。当時予科練習生として志願した先輩方を送

り出しました。当時日本は、必ず勝つ、神風が吹くとも信じていた軍国主義教育でしたから。

同窓会員の方のなかには、戦争体験者も多くおられると思いますし、夫や肉親の方を戦争で亡くされた方々もおられると思います。このような戦争は、二度としてはならないとの願いと永遠の平和を祈念するものです。



奉仕と共に老いの学習

第十一期生文芸学科 鎌田成治

守山市の県立成人病センターで入退院を繰り返すこと四年余り（今も通院中）、孫が書いたたるまの七転八起の絵に励まされ、医師の懸命の努力によりやっと九死に一生を得、ボチボチと社会生活が出来るようになりました。

平成五年四月から、安曇川町老人クラブ連合会（会員一四五六人）の事務局を担当し、自分の体調に合わせながら皆さんのお世話を続けて三年になりました。もう一期と再任となり、二期六年勤めた民生委員も昨年十一月で退任してよかったです、ホッとしているところです。

昭和六十一年一月に、会社の定年と同時に安曇川町へ転居して自然の美と、おおらかな町民の愛情に恵まれて友人も年々増えて安曇川町へ来てよかったです、愚妻と共に喜んでいきます。

平均寿命も延びたようですが、生きていくということとはなかなか難しいものと、この年になって痛切に感じます。

自己管理が一番大切と思いますが、やはり行政の支援がないと生きがいのある生活は出来ないと思います。どうか立派な国になるように祈願し、同期生の方々の健康を祝して筆をおきます。

手びねり三昧

第十二期生陶芸学科 横田 三千太郎

老人大学校に同窓会が出来て十五年になるので記念誌を出す、それには卒業生の地域における活動の様子が発表出来るようにしたいものだ、ということとで早速投稿を呼びかけることになりました。

そこで、編集委員の一人でもある私は、その主旨に沿うよう陶芸の修了者として現在行っている活動を簡単に報告します。

そもそも私が陶芸を希望したのは、ある程度の技術を覚えたい、のんびりと手びねりを楽しみたい。という単純な気持ちからでした。ところが入学してみると、卒業したら地域老人のために頑張れとか、在学中に修得したものは地域の人々に還元せよと絶えず励まされたり、言い聞かされて卒業しました。同期

の友人もそれぞれ活動の場を見つけたようでした。

ちょうどその頃、町の公民館に陶芸教室が開講されることになり、請われるままに未熟であるが教室の講師に名を連ねることになりました。以来六年目になります。陶芸教室は毎年開講し、期間は一ケ年です。教室を終えると希望者は公民館文化協会の陶芸クラブに入ります。だから私は、二本建ての陶芸活動をしている訳です。毎年十数名のクラブ新人者があり、現在陶芸クラブは大世帯にふくれあがって嬉しい悲鳴を上げている状態です。日頃の作陶は信楽の土を使っていますが、時々クラブの有志とこの地伝統の音羽焼に挑戦したくて、近くの音羽山へ土採りに行き、水・ひから始めるのですが、なかなか満足するものは焼けません。生やさしい仕事でないことは重々理解しているのですが研究しなければならないことばかりです。

しかし、教室もクラブ員も世界に二つとない自分だけの焼物作りに全力を打ち込み、納得のいく作品が窯から出てくるのを夢みつつ、手びねり三昧の日々を送っています。

しあわせ

私は七十歳です。毎日が楽しくて、曇った日は一日もないと言っても過言ではありません。と言いましても、夫は二十年前若くして発病し、言葉をなくして十年、足までなくして寝たきり二年半、その間夫婦ならこそその看病をして参りました。私の看護のモットーは、ただ本人を笑わせること、これのみでした。冗談を言って笑わせ、頓狂な行動をしては笑わして、声の出ない夫は漫然の笑みでお腹をヒクヒクさせて喜びました。そして「百まで生きよ生きよ」と言う私にとっても嬉しそうに首で答えていました。が去る一月力つきて安楽世界に旅立ちました。

「おじいちゃん、やっと楽になりましたね。あの世は口も足もいらぬもの、そちらでゆっくりお休みなさい。私は正しくしゃかり生きますよ」と霊前に供えました。過去の苦勞はすっかり忘れて、今心から喜んでいきます。

ボケ防止に興味も良いと言いますが、私も人並にヒョンなことから、何の絵心もない私が仏画を習い始めまして約二年になります。最初京都の仏所へ見学に行きまして、先輩の立派な仏画に感歎して七十の手習いで必死に勉強しております。努力すればするだけの成果がみられ、心ゆくまでに作品が完成したときの感激は格別です。

作品にとりかかる時の神経は大変ですが、神経を集中して事

に取り組む。これが私の何よりの喜びなのです。主人のいる間に十三仏の軸が出来なかったことを残念に思っています。

月三回京都の空気を吸わせて頂きます。お出会いするお友達、先輩達が実に仏様の如く良く出来た方達で、技術は勿論のこと限らない良い雰囲気浸らせて頂き、一瞬でも蓮の花のような心にさせて頂く幸いです。

仏師のお言葉に「誰とでも何とでも仲良く出来る事ですね」を心に深く、教訓にさせて頂いております。これからも無限の夢をもって腕を磨きたい所存です。この世に老人という文字はないと思います。人生これから、八十でも九十でもやる気があれば青春です。

呆け防止

第十三期生文芸学科 中西重三

平成四年九月老人大学校を卒業して早くも三年半が過ぎました。卒業と同時に気のゆるみか、やれやれと思ったのか、途端に体の不調を覚えました。このままでは呆け老人になると思い、在学中に習った書道と俳句を続けるように努力しました。

書道については、町公民館内のクラブに入会させて頂きました。毎月第一と第三の金曜日午後からで期間は三年ですが、私は途中からですので二年半です。

また平成五年一月より、今津町の前川晋先生の澄心会という書道教室に入会をお願いして毎週木曜日に習いに通っています。また何を思ったのか般若心経の写経を思いつき、三ヶ月間毎朝一巻ずつ写経をしました。初めは一時間二十分かかりましたが次第に覚えられ最後には四十分で書き上げるようになりました。また作品の展出について大津歴史博物館で二年に一度のシルバー展に既に二回展出しました。さらに安曇川文化芸術会館で毎年一月末に湖西書初展、九月末には中江藤樹先生の遺徳を偲び藤樹書展。それが終ると私達の澄心会の会員展が行われ、全て出展させて頂いております。

次に俳句については、私の近くに高野素十先生のお弟子さんで川島九峰というお人に毎月八日、私の近所の大泉寺という山寺でご指導を受けています。このお寺は慈恵大師様のご誕生のお寺であり、比叡山の末寺です。吟行には素晴らしいお寺です。会員は十名ほどです。年はとつても俳句歴は一番の若造です。

他に通信俳句で「みづうみ」というクラブがあり、ご指導を受けるのは毎日新聞俳壇選者で成宮紫水先生のご指導を頂いて

大津支部

ヨーロッパ紀行

第十二期生陶芸学科 藤原 宏

旅行の好きな私は、一年に二回位の予定でヨーロッパに出かけています。今まで十カ国以上行きましたが、中でも最も好きな国の一つはイタリアです。日本と違ってローマは都市そのものが何百年もの昔からの建築物で、町角のあちこちにミケランジェロ、ダヴィンチの彫像がありヴァチカンのシステイナ礼拝堂のピエタやコロッセオ等見るべきものに溢れていました。有名なポンペイの遺跡も随分広く、まだ発掘中でしたが昔の人の生活が思われ、やはり来てよかったです。またシェーナのカンポ広場（貝の形）、フィレンツェの花のドゥオーモ（教会）ウフィツィ美術館の夥しい絵画、あまりにも多すぎてどれが誰の作品か頭の中がパニックになってしまいました。ヴェネツィアのサンマルコ広場ではちょうどカーニバルの前夜祭の日で大人も子供もマスクラをつけて広場に集まってきました。ミラノではドゥオーモが有名です。屋上まで上がって

尖塔の裏側からも見る事が出来ました。イタリアも二回行きましたが、南部方面やシシリアの方へも行ってみたいと思っています。

古代ローマを見るとそれ以前のビザンチン文化にふれてきたくなり、文明の十字路と言われるトルコにも行って来ました。地球上どこにもない景観のカッパドキア、こんな所にも人が住んでいたとは驚きと感動の日々でした。またパムッカレ（石灰の温泉）エフェソスの遺跡その奥にある聖母マリアの終焉の地と言われる小さな教会もありました。イルタンブルでは青の宮殿、地下宮殿、他いろいろの所へ行きましたが、ギリシャ神話をもっと勉強していけばよかったと反省しました。

別の意味で素晴らしかったのは、スイス、アイガー、モンブラン、ユングフラウヨッホ等の山々、登山電車に乗ってらくらく頂上まで行きましたが、今度はイタリア側から氷河特急に乗ってもう一度行きたいと思っています。

園芸の旅

第十四期生園芸学科 吉田 弘

老卒業後も私達園芸学科は引続き「みどりの教室」で嶋岡先生の教えを乞い、この三月無事修了の運びとなった。

早春の六・七日と私達一行が松の故郷とも言われる四国の香川県分寺町を訪れた。本州と四国を結ぶ全長九三六八メートルの瀬戸大橋を渡り、最初四国八十八カ所八十番札所分寺に詣でた。

その後錦松の発祥地と知られる国分寺農協盆栽センターを視学、明治の初めより百年余り伝統の上に二百数十名の盆栽農家が錦松、黒松、五葉松など苗木の素材から完成品まで、大衆物から高級品まで、生産から販売に当たっている。

松達一行は先生の紹介により盆栽の生産農家を訪れた。先生も今を去る二十数年前は、ここの農園を再三訪れ園主から直接教えを受け錦松の基礎技術を取得することが出来たと言われた。この農園を参観し、園主より生産農家としての苦労や栽培の裏話を受承り大変参考になった。温暖な気候とここの土壌が植木には最適とも感じた。この農園で各々好みの物を買った。私も

錦松の新品種「国宝」と他に黒松、五葉松の十年生位を一本ずつ購入した。

松のブームは去ったと一部では言われているが、日本を代表する樹木であり、常緑美しく幾百年の風雪に耐えて生き抜く長寿の木として尊ばれ、暮しの中に大きく関わってきた。松は盆栽の代表木ではなからうか。と私は思う。

当夜は「琴平」で一泊、翌朝六時に起床して七八五段の石段を約一時間かけて登り、航海の神金比羅宮に参拝。その後は天下一の名園「栗林公園」を見学し、鳴門大橋を渡り帰路に着いた。今後も年二、三回先生の指導を仰ぐと共にお互いに一層の親睦を深めようと別れた。

老大を通じ同じ趣味を持つ者が共に語り、創る楽しさ、観る喜び、これこそ人生を豊かにする最も大切なことではないだろうか。人の出合いを大切に、良き友が多く出来たことは私にとって何事にも勝る大きな財産である。

伝統の街・遺蹟の街・美術の街

第十四期生園芸学科 林 忠勝

七十歳になるのを記念して、前から一度は行ってみたいと考えていた。ロンドン・ローマ・パリに家内希望のスイスを加えて出かけた。

関西空港を出発して、約十四時間の飛行でロンドンに着いた。なんと五百人近い人に乗せ、途中無着陸で地球をほぼ半周してしまうのには、今更ながら科学技術の偉大さに驚いた。

ロンドンのバッキンガム宮殿は、日本の宮城のように堀で隔てられていることもなく、多くの人が宮殿の門や柵の間から中をのぞきこみ庶民的な感じがした。テムズ川畔の建物は日本でも重要な建築物として保存されるよう



バッキンガム宮殿前にて

な明治時代の重厚な建物がずらりと並び、伝統の街というにふさわしい街だった。

ローマでは、トレビの泉、真実の口、コロッセオなど遺蹟の街というにふさわしく遺蹟が大切に保存され、ローマ全盛時代を彷彿とさせるものがあつた。

しかし遺蹟保存のため、市内の各所に崩れかけた建造物があり、廃墟の街のように感じたのは私一人だけだろうか。遺蹟の保存と文化の発展との兼ねあいは難しいものだと感じた。

スイスのレマン湖畔に建つシヨン城は外観は大変美しかった。しかし城内に入ると、昔城内で殺された人々の妖気が漂っているのか殺伐としていた。

登山電車で三千四百五十四メートルのユングラウヨッホに登った。頂上駅を出たところに、世界で一番高所の郵便局があり局の前には日本の昔なつかしい赤いポストがあつた。

パリのベルサイユ宮殿内部は周囲の壁から天井まで、びっしりと絵画や彫刻がされ、その美しさは言葉では言い尽せないほど絢爛豪華なものだった。

しかし、この中で生活した王侯貴族たちは、かえって気疲れしたのではといらぬ心配をした。

ループル美術館は半日フリーで行ったが余りに広く、展示物

が多く、そのごく一部しか見ることが出来ず残念だった。
機会があればもう一度、芸術の街パリをゆっくりと訪れたい
と思っっている。

旅行記

第十五期生文芸学科 井上よし

高山線下坂駅で下車する。丸太造りの変った駅舎。三人だけ
の下車。静かな山あいの町だなと感心していると、宿の主人が
迎えに来てくれて、やれやれひと安心。薄化粧した山々に抱か
れるような小坂川。この川の流れの落差が大きく岩場や流れが
変化に富んで、鮎やイワナやアナゴが釣れるとの話を聞きなが
ら二十分ほどで宿に着いた。

ひっそりとした川畔の佇い、これが下島温泉、遥か頂上だけ
が見えるのが御嶽山。そして小坂川を挟んで四方は山々、これ
が有名な薬場温泉。胃腸病や神経痛、リューマチ等がよく効く
と言われている。炭酸水別名「サイダー泉」とも言う。

今回足を痛めて一ヶ月歩行するのも困難な状態で、早速二人
で来たという次第。湯量は豊富で一昼夜沸き出ている。足のた

め何回もお湯につかっていると足も体も軽くなったような気が
して、この世の極楽とはこんなことかと一人悦に入っている。
身も心も軽くなった気になって家路に着いた。

薬草湯身もほぐれゆく雪の飛驒

信濃路を旅して

第十六期生園芸学科 池本正三

客年六月末ふとしたことから長野市の古い友人から、たびた
び来遊のお誘いを受けており、二泊三日の予定で家族と共に信
濃路を訪ねました。その思い出を記してみたい。

自宅を六月三十日(土)午前八時出発して、名神高速大津インタ
ーから小牧を経て中央自動車道中津川バイパス馬籠を経て国道
二五六号線同一九号線、木曾福島から塩尻北ICより長野自動
車道から長野ICで降り、午後五時善光寺町に着き同町元善町
四八四番地の松屋旅館に投宿した。

松屋旅館は門前町にあり、千三百年前最初の善光寺本堂跡の
由緒ある旅館でした。早速善光寺のお詣りをすると思いましたが、
旅館の人の話では朝詣が原則とのことでしたので、翌七月一日

清々しい早朝、食前に家族揃ってお詣りしました。松屋旅館から徒歩で五分ぐらいの所に本殿があり、牛にひかれて善光寺参り。で有名な善光寺に朝詣でをしました。

善光寺は一山三十九ヶ所の宿坊があり、善光寺は古くから宗派の別なく、極楽浄土の門として親しまれてきました。

本尊如来に参拝し、お戒壇巡に入り暗闇の中で「極楽のお錠前」を触れて渡り廊下を出てご参拝を終わりました。

松屋旅館で朝食をとり国道一八号線に乗り更植市を経て小諸市大門峠。ピナスライン霧ヶ峰を経て乗鞍岳（標高三、〇二六メートル）の頂上で昼食をとり扉峠を経て美ヶ原温泉観光ホテルで宿泊しました。

七月二日(月)美ヶ原観光ホテルを午前八時四十分頃出発、松本城を見学し、岡谷市にある諏訪大社をお詣りし、諏訪湖を眺めながら岡谷ICより長野自動車道を経て国道一五八号線を通り岐阜県高山市を経由し、国道四一号线を通り小牧ICに午後五時に到着し、名神高速道路に乗り帰路に着いた。

久しぶりの旅で道中案じていたが、疲れもなく思い出の信濃路の旅であった。

国内全都道府県旅行達成

第十六期生文芸学科 川元繁雄

「ついにやった!! 全国四七都道府県旅行」

私が滋賀県から他の府県に初めて旅行したのは、小学校六年の修学旅行でした。京都、伊勢一泊二日の楽しい旅行でした。

今も覚えています。伊勢の旅館で友達と枕を投げ合って先生にゲンコツで殴られたことを……。

この旅行を皮切りに以来六十年の間に北は北海道から南は九州沖縄まで全国都道府県を旅行することが出来ました。

もともと旅行好きの私ですが全国を隈なく行けるとは考えていませんでしたが、いつ頃からか「この県は行った。その県も行った」と考えているうちに「出来れば全国四七都道府県全部行けたらなあ」と思いました、これを意識しながらいろいろな機会を利用し旅行を楽しんできました。在職中の出張、旅行会社のツアー、職場仲間や友達との親睦旅行等々、旅行の目的や方法は異なりますが、未知の府県に足跡を残したことに間違いありません。

全国旅行を意識した頃には殆んどの府県には少なくとも二、

三度は旅行していましたが、最後まで行く機会に恵まれなかったのが佐賀と山形の二県でした。

第二の職場を含め何回か職場は変わりましたが、ついに在職中に旅行する機会のないまま退職しましたが、退職後間もなくその機会がやってきました。佐賀県には「吉野ケ里遺跡を含む北九州旅行」最後は「最上川舟下りを含む東北旅行」のツアーに参加することが出来、ついに全国四七都道府県旅行を達成することが出来ました。

勿論全国旅行をしたと言っても隅から隅まで行った訳ではありません。その県のはんの一点を見たにすぎませんが、一介のサラリーマンが「全国旅行の快挙？」を成し遂げた満足感で一杯です。

これからも未知、既知を問わずいろいろな旅行に参加して、出来れば全国行脚にまつわるさまざまな思い出がまとめられたら楽しみも倍加するのではないかと考えています。



湖南支部

ある旅日記

第十一期生園芸学科 團野清 一

前日からの予報につられて思い立ち湖北路に向うことにした。師走とは思えないほどの日和に、久しぶりに見る湖東の冬景色が絵はがきのように美しい。

長浜駅で乗り継いだ電車は、ありし日は寝台特急として表舞台で活躍していたのに、一部改造されたとはいえ、今はローカル線で再度のご奉公とは、時の流れを思わせる。少しセンチになる。程なく高月駅に到着する。時節柄か観光客は皆無で、乗客は数えるほど、駅は無人なのに、待合室にはストーブが燃えており、土地の人々の優しさが偲ばれる。

観音の里と自負するだけあって道端に古タイヤを利用し、色とりどりの季節の花が植えられ、小川には鯉を泳がせ、よく手入れされた庭に南天が真紅の実をつけ、赤や白のさざんかの花が、出迎えている人通りの少ない道を地図を片手に道標に従って十五分見覚えのある渡岸寺の山門に辿りつく。

この十一面観音像とは、数年前の最初の出会いから、何か親しみを思わせる。少し腰をひねり右足を出し、今にも語りかけそうな立姿は、気高さの中にもなまめかしさを漂わせている。千二百年の風雪に耐え幾度かの兵火をくぐりぬけ、なお何を耐えているのだろうか。地元の信者の丁寧な説明も上の空で、観音さんは男だろうか、女だろうか、モデルは誰かなど凡人の空想に時を忘れさせる。

冬の早い日暮に遅れては大変と早々と湖畔の一軒宿に入る。遠く頂上に薄雪をかぶった比良の連山、目の前の水辺には無数の水鳥が遊び、その中ほどにお椀を逆に伏せたような竹生島が靄の中に浮かぶ景色をボンヤリと眺めながらの入浴の湯煙も時を忘れさせる。

宿の従業員の話では、今夜の宿泊者は自分達だけとのこと。年末の忙しい時に、さもありませんと思う。

夕食後、露天風呂に入り、今日は誰にも邪魔されず、国宝の観音と対面し、小さくとも一軒の宿を自由に使い名物の鴨鍋で満腹し、星あかりに霞む箱庭のような景色を独占する。これほどの贅沢は最初で最後。これも観音さまのご利益と感謝する一日でした。

友人

第十五期生文芸学科 河邊 謙

交通事故で背骨を傷め一年ほどの治療が続いている友人を見舞うため関西空港から三年ぶりにタイ国へ出発した。

もともとタイへ出向して活躍している多くの友人達と逢うのも大きな楽しみであった。ドムアン空港のロビーにはあらかじめ連絡のあったタイの友人と一緒になんと彼が迎えに来ているではないか！

顔色も良く一人で普通に歩いている。元氣になってきているのを見てびっくりするやら安堵するやら。

彼はタイ人ではあるが両親は中国人で根っからの商売人である。長いつきあいの間に彼が怒る顔を見たことが



ナコンパトム寺院で

ない心やさしい五十五歳である。

その後「ライオン」や「カンチャナブリ」への一泊旅行をしている間に彼の考え方生き方の変ったのに気づく。私がかつてタイ国に住み苦しい時に大変力になってくれた頃の彼はもっとガムシヤラに、仕事に利益追求にといわゆる華僑らしい人間であつた筈だ。

しかるにお寺へ行けば私を坊さんの前にひざまづかせて厄除けを授けて貰うとか、小乗仏教の教えに人間一生には七つの区切りがある。六十歳を過ぎたら心の安らぎを求めて楽しむことなどと意外なことを話す。一度死に目に会いさすが飲料水工場の経営や不動産業など金もうけ一筋の男も生き方の転換を自覚したらしい。

ある時は仕事も手につかず仏塔の廻りを散歩したり、またある時は終日ぼんやりしていた苦しい時のことなど話してくれる。夕暮の静かな池の畔のレストランで向いながら長い一生の最終楽章に入って如何なる道を選び如何にエンジョイすべきかなど静かに話しあうことが出来た。友遠方より来たる彼が大変喜んでくれているのがわかる。逢うことだけで話を通じあう友人というのは日本人同士でないからかもしれないが、これからもこの友情を大切にしたいと思っている。

近江八幡支部

カリフォルニアへ旅をして

第八期生文芸学科 牧田登茂

一大決心をして娘一家の住むアメリカへ三月初めて関西空港から一人で出かけることにした。十時間余り狭い座席にしばらくれているようでロサンゼルス空港へ着き娘の出迎えを受けた時はホッと嬉しさだった。娘達はニューヨークから転勤してたので、どんな所に住んでいるのか心配していたが、空港から十分ほどで家に着いた。ロス郊外の立派な住宅街が並び街路樹が高くそびえ随分広々とした所である。青く澄んだ空と新鮮な空気を肌を感じ無理をしても出かけてよかったと思った。

(一) ロサンゼルスには市内電車も地下鉄もない。高速自動車道路に依存している。息子の通学に娘が車で送り昼前に弁当を作って持って行き、夕方迎えに行く日課である。私も同道してその間を利用して学校の周辺や海の見える所までドライブをしたり、ショッピングして帰る。毎日が温暖の土地柄で晴天が続く、曇天雨天の日は少ない。住居の周りも広々とした

庭園があり、桜や百合、名も知らない紅い花、黄白紫と咲き競って目を楽しませてくれる。夕風がそよ吹くとオリブの大木がゆれ庭一面に花がこぼれる。夕闇になる頃時間的に灯りがつき十時頃に消灯される。幻想の世界にいるようで、異国の空と月とのコントラストに、出かけた歓びに浸っていた。

(二) ロスは危険だとかいろいろ言われて案じていたが、娘一家に包まれ幸せ一杯、胸一杯のおしゃべりが出来た。

メキシコに近い関係か、メキシコ人が多く東洋人、中国、韓国、日本の人達も目につき懐かしい思いをしたが、メキシコ人の数には及びません。不法入国してくる人もあり反発する雰囲気もあるようでも、娘達の家のプールの掃除や庭園の掃除、ゴミの収集なども決まった日に来てきれいにしてくれるのもその人達による。彼等にも生活がかかっているので、真面目に働いて帰り、にこやかに応答してくれます。

(三) 日本のTVではアメリカのことはよく映していたのにこちらではめったに出てこない。在米期間が長くなると日本のことと疎くなる筈だと思う。私は娘の通訳で何不自由なく理解でき助かりましたが、日本より転動してきた人達はやはり語学に苦しみ、慣れるまでが大変らしい。孫は十二歳、中学へ上がることになったが英語の方が早く理解し、日本語の熟語

などは私に聞きに来る。

(四) 買物をするにも車で三十分ほど行く。スーパーや百貨店も大きくて一部の所で用をすませるようにしないと疲れてしまう。駐車場も日本にくらべてけたちがい広く、日本製の車が多いかと思ってもそれほどでもなく、立派な外車はずらりと並んでいる。

(五) 娘達がいってくれたからこそ何不自由なく快適な一ヶ月を過ごし、私自身の健康な身体を与えてくれた両親の恵みを身に泌みてありがたく思いつつ帰国しました。これからも胸を開いて余生を一步一步固めていきたいものと願っています。日本語はやはり一番懐かしく肩を張らずに使えることは何より嬉しいことです。

残雪の奥入瀬溪流

第十期生生活学科 岡田茂子

地元の祭礼に引続いて八幡神社の祭礼。松明や太鼓の渡りと幾日も祭礼続きで氏子総代の主人もすっかり疲れていたところへ航空会社に勤めている娘から、今度関空から三沢空港に新

しく開航することになったから骨休めに是非行ってみないかとのことで十九日、二十日と古牧温泉へ旅をさせてもらうことにした。夕方から出発なので出かけやすいだろうと言うのでゆったりした気分で関空から出発した。

季節はずれの寒さと曇っていたので心配していたが、雲の上は晴れていた。ときどき下界が見える程度で一時間三〇分ほど三沢空港に到着。予報通り三沢は小雨だった。ホテルのバスに出迎えられて七時前に着いてその晩はゆっくり保養。

翌日幸い雨もやんでシャトルバスで観光させてもらう。四月もなかば過ぎと言うのに、さすがに山岳のリゾート地、奥入瀬は全面的に積雪で除雪車で道は開けてあって雪壁のような道を通りぬけ谷地温泉に着いた。ちらちらと粉雪が降っていて、屋根にはまだ昨日まで降っていたのか、たくさん積もっていた。

この温泉は湯の華がふんだんに湧き出ている、神経痛やリウマチ等によく効くそうで一週間もすればよくなるとか、運転手さんのひょうきんな説明で、一時間ばかりの休憩だったが入浴する人もいた。深い樹海の木々はまだまだ冬枯れの高原そのもの。木々の芽はまだ出る様子もなく、実に雄大な山あり、溪流あり、滝あり、さまざまな景色を眺めながらのひとときだった。

やがて十和田湖、もう来られるかわからないと言うので雪の

ちらつく中を乗船遊覧した。

奥深い大自然の中を過ぎ奥入瀬溪流グランドホテルで休憩。「森の神話」と題して万博でおなじみの岡本太郎さんの巨大なシンボルが天井から吊り下げられていて、その下に大きな丸太が赤々と燃えていた。直径三メートル、高さ八メートルもありまわりには夢の国へ行ったような絵模様がデザインしてあって北国ならではの暖かい大自然を満喫することが出来た。

夕方一杯まで観光して七時の飛行機で帰途につく。

関空到着が九時となり、こちらへの帰宅が遅くなると言うので娘が関空ホテルの八階で泊る手配をしてくれていたの思いもよらない所でまた一泊になり予期せぬ幸せをかみしめた。

スケールの大きな大自然の山岳リゾート地も四季折々のすばらしいよさがあるのであろう。

このところ足を患い健康とは言えないが、このくらいならと喜び感謝しつつまだまださめやらぬ余韻にひたっているこの頃です。

雪残る奥入瀬樹海みごとなり

旅のつれづれ

第十四期生園芸学科 佐橋 みわ

小豆島に旅をしたときのこと、寒霞渙をめざしロープウェーにバス一台分の私達の同志二十数名が専乗の如く乗り込む。

バスが動き出せば童心に返りはしやぎ、またにぎやかに下の景色にみとれながら中ほどにさしかかると両側面にそそり立つ大きな岩崩風の峽間を通りぬけしばらくして着けば可愛い猿の出迎えて爽やかな気分になるひとときでした。ほどなく行くくと土産物の屋台の並ぶ前にくれば広場には、散索を楽しむ人あり、修学旅行生のグループあり、でも比較的まばらな時のことちょうど中学生等二、三人のグループの一人、山際の方にいた人が猿に右手でパンの端を与えていたところ、その一瞬の際に左手に持つ紙袋をボス猿らしき大きな猿がさつと素早くさらって谷間の方へと逃げて行った。私達も思わず「アッ」と口々に言いあう。目で後追えば谷の木蔭に子猿に食べ与えていて、またそばには毛づくろいする猿もおり、それらのしぐさをしばらく眺めていたが、中学生らは口々に恨みの小言を言いあう中を私は尻目に見ながら思うに、動物の本能かと親子の愛情、慈愛

慈悲、猿たちの社会も何か人の情は親子の情愛も相通ずる一端もあるのだと、深く感動したひとときでした。

丘に建つ大観音を見上ぐるに優しき姿陽に輝やきぬ

小豆島にかく立ちたまふ観音の広き内陣に護摩法要を受く



東大寺二月堂お水取り

第十一期生陶芸学科 久田 勝 一

一人暮らしを始めて早や六年余、ようやくその孤独な生活にもなじみ少しは戸外に出てよんだ空気を一新し現在社会の流れに沿った新鮮な空気にふれたいと思う余裕も少し芽生えてきた。昨今、近くに嫁いでいる長女から連絡があり、つくば市で勤務している長男と一緒に奈良公園散策でもとの便りがあった。テレビでは何回か見ていた二月堂のお水取りの行事を一度目のあたりに見たいとの日頃からの願いもあり、思いきって一緒に出かけることになった。

奈良東大寺二月堂のお水取り行事は毎年三月十三日午前二時に行われる香水を汲みとる行事で、修二月会とも呼ばれる天平勝宝の昔より現在に伝えられているものである。中でも修二月会の十二日目にはよく知られている松明の行事がある。

午後七時ちょうど、あたりの投光器が一斉に消され、夜空に本堂の舞台廊下がくっきりと浮び上がり、境内はもとより附近

の道路も人々で埋まるなか十数名の練行衆が堂童子に籠松明（重さ八十キロ）をかつがせて、本堂左側の回廊より本堂舞台廊に駆けのぼり、火の車のように松明をふりまわすと、見物の中より一斉にどよめきが起り、カメラの閃光が走る。素朴で伝統的な天平勝宝の絢爛たる光景が繰り広げられる。松明は十二本、次々と舞台廊に上がり夜空をこがす。しばし天平の幽玄の世界である。

早いものである。来年は亡妻の七回忌を迎える。人生のよき伴侶であるつれあいを失ったという大きな空洞も日頃一人暮らしの親の身を案じて、各々が多忙な生活の中で、そっと配慮してくれているものかと、夜空を仰ぎながら思う。大きなものを失ったものの、また親子の絆という大きなものを得たことは今後余生を送る大きな支えである。禍福はあざなえるの如しである。

北京・西安五日間の旅

第十二期生文芸学科 竹田 幸男

望郷詩

翔首望東天、神馳奈良辺、三笠山頂上、想又皎月円

天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山にいでし月かも

阿倍仲麻呂、奈良時代の遣唐使として、養老元年（七一七）

入唐、玄宗皇帝に仕える。海難で帰国出来ず、在唐五十余年で

長安（西安）で客死。日本を偲び望郷の詩を詠む。千二百年前

身命を賭して唐の文化を学ぶため国使として彼の地で没す。日

本文化の発展のため先人のご苦勞を感じている西安の旅。

日本著名留学僧空海曾師事惠果大師子此、后成為創立

日本真言宗之初祖

弘法大師の日中文化友好の勉学の場青龍寺・小雨の中を尋ね

こられた大師の御苦勞を偲び感無量。ご苦勞様でございました

と頭を下げるのみ。

秦の始皇陵の兵馬俑、もう一度訪ねたいという米原校十二期

生文芸学科の人達に誘われ、昨年十月十一日より十五日までの

五日間十五人の友と訪中。前記の西安・北京の旅、飛行機で四

時間ほどで西安着。遣隋、遣唐使は風待ち日和待ち、海の荒れを避けて幾年月かけての航海。またまた頭の下がるのみ。

訪中道中記はまた機会があれば。

中国料理を楽しみと言われる友あれども、家鴨の丸焼、とかげの空揚げ、どうもいけません。朝のお粥に梅干し、これが一番でした。帰りの機内食のおいしかったこと。

中国の人の多さと、街角でたむろする若者達。昭和二十五年から三十年代前半の日本に思いを馳せるのも日本ではあのような若者はなかったと。

北京・西安・五日間の旅で先人の偉業と我が国日本の偉大さをつくづく感じ、日本に生まれ育ったことを感謝する後日であります。

海外旅行に学ぶもの

第十二期生生活学科 野玉 一子

私の今の一番の願いは、いつも何かに疑問をもってチャレンジできたらいいな、ということである。

老大で学んだ生活科学は余りにも漠然としていて焦点が決ま

らず、いや私が決めかねたのかも知れないが……。あまり記憶に残っていないのが残念である。けれど新しいものに魅力を感じ素直に老いて学ぶ姿勢ができたことはプラスである。

海外旅行もその一つであり、三年間に八回は少なくないと思う。名鉄さんの家族的なご案内で、度毎に楽しい旅を味わっている。どこへ行っても愛国精神旺盛で遠大な計画のもと着々と歩んでいる姿に感服する。

マレーシア、シンガポールの旅でゴム林を見学してそれを痛感した。一本の木で三十年間ゴムを取り、後は廃木として処分するのだが、今は細い木を何本となく植樹し昔の密林から沢山のゴムを取り輸出することを夢見て育てている。ひしひしと力強さを感じた。

中国でも多くの人が質素に、でも自国の経済発展のために堂々と、ゆったりと動いているのが大変たくましく見え、本当に圧倒されそうであった。

そして今一つ海外旅行で学んだことは、日本の国の便利さである。快適で便利のよさを再確認した。「よくぞ日本に生まれける」と思ったが、なれすぎてこれが当たり前となつてはいないだろうか。感謝の気持ちをはいけなと思う。

朝食のバイキングで小さな袋に入ったものが何かわからなく

て困っていると、「ハニー」と青年がにこっと笑って教えてくれた。「あ、蜂蜜やね」というと、またにこっと笑って「おはようございます」と美しい日本語で挨拶してくれる。国語は違うけれど心が通ったようで本当に嬉しい。

いづれの国も日本と同じく自然が美しく、自分の国を愛し、誇りを持って生きている姿に共感する。やっぱり世界は一つだと親しみを覚えた。



彦根愛犬支部

ヨーロッパ旅行記

第十一期生文芸学科 吉崎 禎子

先日私はこの年で初めてヨーロッパ旅行を体験した。その時の鮮烈な印象を二つ三つ書いてみたい。今まで欧州の荘麗さは映像等による知識しかなかった私が、それを現実に目のあたりにした時、そのみごとさ偉大さに今さらながら目をみはった。「まさに百聞は一見に如かず」だ。紙面に限りがあるのでくわしくは書けない。

市内観光では先づイギリス王室ゆかりのセントポール寺院、この歴史的な場所でチャールズ王子とダイアナ嬢が世紀の結婚式を挙げ世界の耳目をさらった。それが今は空しくも早や修復不可能なまでに潰え去ったとは、何の縁もない私ですら心が痛む。そしてバックingham宮殿。ウインザー城等の壮大さ。女王が留守とのことで中が見学出来、さまざまな宝物、家具類、人形等が見られた。驚いたのは、この中にジョージ五世とその妃ジョージ六世、エドワード四世の墓があり、また今だ存命中だ

がヴィクトリア皇太后もやがては入るであろう墓も用意されている。

フランスでは、ヴェルサイユ宮殿の壮麗さも筆舌に尽し難い。ここは正にブルボン王朝の盛衰が一举に語り継がれる所でありまたあのマリー・アントワネットの悲しすぎる歴史がある。そしてかつての世界大戦後ヴェルサイユ条約が締結された部屋も興味深く見学した。またルーブル美術館やオルセー美術館で正に本物の美術にふれたのは何よりの心の栄養になった等々、書けば実に枚挙にいとまはないので省略せねばならぬが、要は欧州においてその文明は強大な先進国である。

かつて日本の為政者も欧州の現実を認識していたらあのような無謀な戦も起きなかったのではないか。そう思うとあの長い日本の鎖国のつけは計り知れないほど大きい。そして私が一番感じたのは欧州の男性のお洒落なしなやかさである。ホテルの廊下で会ってもニコニコ笑顔で挨拶してくれる紳士、街道を尋ねるとゼスチアまじりで親切に教えてくれ、別れ際には「何とぞ素晴らしい旅を」とまで言ってくれる。日本でこのような光景が見られるだろうか。亭主関白に馴らされた私達中高年の女性はホトホト感じ入ったものだった。大げさな言い方だが総じて世界大発見の旅であったように思う。

昨日の敵は今日の友

第十一期生スポレク学科 堀田 肇

昭和十九年三月、インパール作戦に参戦して二度受傷、三度の命拾いをした。この半世紀如何なる多忙な日でも、一日として亡き戦友のことを忘れた日はなかった。後方から何の補給もなく、実に筆舌に尽し難い戦闘の連続であった。

それから五十年が夢のように過ぎ去った。戦後二度ビルマ・インドに慰霊旅行をした。二回とも現地の人々の温かい歓迎を受け、身の引き締まる思いがした。



戦友会では、日本ビルマ（ミャンマー）文

化協会など、発展途上国への文化交流と支援をする社団法人が出来ている。その中の団体が六年前から、ビルマ・インド（インパール）戦線で戦ったイギリスの戦友を招き、民間外交の一助になればと思い、年に一度の歓迎会を開いてきた。

その中には、ホーカーハリケーン機で、我々を頭上射撃して悩ました戦友がいて、びっくりした次第である。戦後五十年も経つと、そのことが思い出となってしまふ。「昨日の敵は今日の友」である。

現代の世相を見ていると、今日は平和ぼけのような気がする。国のために戦場に散った戦友のことを思い、この平和と繁栄の礎となつて散華された戦友のことを、永く後世に伝えると共に二度と戦争のない世の中たることを祈るのみである。

謎・幻

第十二期生文芸学科 伊藤 博 成

昭和二十三年八月、伊吹山に登るため近江長岡で汽車を降り歩いて友達と二人で夏の夕方、涼しくなりかけた道を同行者数人と麓の上野に向う。私は大正十五年生れ、昭和の年号と同じ

軍隊の経験もあり九死に一生を得ている。一度は死にかけた身、二十三歳の若さに恐さ知らずの年、今まで二回伊吹山に登っている。道筋などの様子は承知済み。終戦後のことお菓子はなく、そら豆と水筒、にぎり飯のきわめてお粗末なもの。日も大分暮れてもう上野に着く時分と思いきや、ふと気がつくとなんか全然感じの違う所を歩いている。家は見あたらず、コリヤおかしいぞ道に迷ったのかな、そんな筈がない。しかし覚えのない道、もうあたりは暗い夜道である。オカシイなあと話しているとき

向うからボーッと人影らしきものに気がつく。道を聞こう。ダンドンと近づいてくる、おばあさんかな、はっきりわからん、人らしい、黒いボーッとした影のような形、近くに来た。目の前、その瞬間、風の如く、幻の如くさっと横を音もなく過ぎ去った。全身総毛立ち、何も言えん、道を聞きたいのだが、ものが言えん、鳥肌だってゾーッと寒気がする。しばし無言、影は消えている。落ちつこう、道端に腰をおろして今のは何んや？わからん、むしろ化かされてるのか、だいたい道に迷ったことがおかしいな、ようやく我に振り返りしてやっと上野の神社に着く。かなり遠廻りをしてきたことがわかる。

大勢の登山者が賑やかに準備する者、休む者、一団となって登る者、その中に入ってやっと足を踏みしめ登山者となる。

こんな体験のある人、お知らせ下さい。どんな風に展開しますやら。

花を仰いで

第十四期生生活学科 稲 舘 ひさを

美しく咲き人々に愛される桜、山の奥から里に至るまで毎年春を飾ってくれる。「人恋しくて桜は下を向いて咲く」

誰の言葉か知らないが、聞いてから読書グループの友達と機会ある毎に桜を尋ね歩くようになった。本を読んで文学散歩としゃれこむのもみんなと同じ。姫路城、吉野山、高遠城址、仁和寺等々心に残る木々も多くある。「桜守」を読んで近くの清水しみずの山桜を尋ねた。ほの白く小さな花が盛り上がって見え、みんな上を向いて黙したまま……。一息入れて、これがあの桜か……。そして御母衣ダムにある莊川桜、ダムの底に沈む運命の桜木を掘り起して莊川の堰堤に移植されたと言う。村人達にとって何よりの贈り物だろう。その木の下で毎年花見をされる由。胸がジーンときた。樹齡千二百年余という枯死寸前の老木に二百本余りの若木の根接ぎをして甦らせ花が咲くように一生懸命世話

をされ、お陰で今も美しく咲き誇り散り際に淡い墨色になると
いう御存知の根尾谷の淡墨の桜。王位継承をめぐり難を逃がれ
この地に暮しておられた継体天皇が都に戻る際に村人との別れ
を惜しみお手植えされ「薄住みよ」という言葉があつてそれが
この桜の名前になったとか。老大から行った時は残念ながら葉
桜でした。来年も美しく咲いてやと一人言を言っていた。

もう一つ忘れられない素晴らしい桜がある。常照皇寺の開山
堂の前の「九重の桜」。地面につくぐらいに咲く紅しだけ桜で
ある。北朝初代の光厳天皇の草庵と聞く高雅さを表わす「九重
の桜」という名前も寺伝にある由。そして後水尾天皇が余りの
美しさにお車を返してご覧になったと言う「お車返しの桜」も
ある。太い幹に少々花をつけていたが、こうして美しい花をい
つまで仰いでおられるか……。日々を重ね年も多く重ねてきた。
暮しの中でちょっと心憂い時もある私は自然に枝葉を広げた
木々の緑や花に語りかける物言わぬ植物ながら心和ませてくれ
る。感謝しながらまた明日もある。やわらかな心でいこうと自
分に言い聞かせている。

旅

第十四期生生活学科 樋口 よし子

老大へ通っている時は孫の通園で大変でしたが、皆様とのふ
れあいの時間でした。三人の孫も学校に上がり、やっと思った
自分の体にメスを入れて気も弱っていましたが、幸いにもよき
友がたくさんいて下さり、今年の冬は大雪でしたが、ある団体
の旅行で新婚旅行の地オーストラリアへと夏の最中軽装での農
業見学。自然の美しい牧場でのブーメランでひとときを楽しみ
エメラルド色の海にはボートやウインドサーフィンの若者。

景色を見ているだけでリッチな気分になり、一つ道を野むけ
ると美しい野鳥が自然の木の実をついばんで美しい鳴き声に耳
をしばし傾けて自分のストレス解消である。カンガルーやコア
ラちゃんとの交流ももう少し若かったらなあ、帰りたくないよ
うな気分であった。良きも悪きも外国との比較これまた勉強で
あった。でも感心したのは、バスの中での飲食、歩きタバコ禁
止で罰金とか、ガイドさんが言っておられました。それに自動
販売機らしき物を見かけなかった。

オーストラリアも自然保護の問題は大変らしいですが、お互
いが自国他国を問わず自然を大切にしたいと思います。

自分の体につけて次なる目標、日本の灯台や離島めぐり
と夢実現のため、またポケ防止も兼ねて今は地図をひもといて
いるこの頃です。

六十箇の日々

文芸作品

- 詩
- 短歌
- 冠句
- 柳

短歌

我が身八十路

足腰痛み

生活範囲狭まりて

社会活動

おぼつかなし

第二期生文芸学科 中村 平三郎

千木高く西羅の森に鎮まりし鞍掛の宮守りて老い行く

春の雨止みてしばらく寺屋根に青葉はぬれて輝きており

灯籠に梅の香舞へる祈念祭集える村人若きも老いも

選管の重き務めを果し終え霊峰比叡をつつしみ仰ぐ

七とせの戦終り故里の鎮守の森は我を抱くも

八十路の日々

第六期生文芸学科 草野 一子

後幾許もなく二十世紀も終らんとす

二十世紀も終らんとす

今日此頃

同窓会の十五周年

寿ぐ日に会う嬉しさよ

我が身八十路

足腰痛み

生活範囲狭まりて

社会活動

おぼつかなし

第二期生文芸学科 中村 平三郎

千木高く西羅の森に鎮まりし鞍掛の宮守りて老い行く

春の雨止みてしばらく寺屋根に青葉はぬれて輝きており

灯籠に梅の香舞へる祈念祭集える村人若きも老いも

選管の重き務めを果し終え霊峰比叡をつつしみ仰ぐ

七とせの戦終り故里の鎮守の森は我を抱くも

八十路の日々

第六期生文芸学科 草野 一子

後幾許もなく二十世紀も終らんとす

二十世紀も終らんとす

今日此頃

同窓会の十五周年

寿ぐ日に会う嬉しさよ

今日一日

楽しく話す

助け合い

手に手を取って

生かされる日々

若人と

五行歌に

思いをたくし

心の交流もて

広く友と和す

以上の五行歌より日々の心境お察し下さい。

老の日々友愛の絆を心の支えとして、精一杯楽しい人生を

過ごしたいと願っています。

思い出

山茶花

第十三期生文芸学科 今川 静子

第六期生文芸学科 松尾 とみ

生前のわが業散れよ木枯しに行方果てなく光となりて
未来図に生氣あふるる山茶花は口紅ひきて朝あけを待つ
山茶花はふふみほどけて声をあぐ天高くして輝く朝を
こだわりも無くて咲き満ち拘りもなく散りつぐ山茶花愛しい
惜別の心はあらた叡山に研ぎ澄まされて雪輝ようは

文芸科に籍おき楽しく学びつつ老いゆくこころ折り折り詠みぬ
吟行は桜の園やもみじ寺映湖先生を先達として
政・経の変わりはげしき世を見むと時局も学びすこやかに生く
縦横の絆ふかむる旅行なり卒業生のあまた集いて
老いて学ぶ楽しさ知り得し学舎ぞ十五周年の意義は輝く

七十路

南国の旅

第十期生文芸学科 高野 節子

金色のモスクの庭にコーランの教えきびしく祈る人々
台風も地震もなき国マレーシア洪水だけが神の試練か
黒き雲またたくすきもあらぬ間にスコールと共に雷のなる
サルタン我真白き城と草萌ゆる門に銃持つ幼き兵士
ベランダに立ちて眺める高床の赤い瓦の南国の家

「京近江」みやびな宿のくつろぎに友等と眺むる春霞の湖
にこやかな顔を合せるクラス会声まろまると蝉丸謡う
すこやかに生かされ月に四度五度書道と謡曲とボランティア活動
こだまする山伏問答あわれに大日如来の光明届く
修験者の聖地なりしと明王院森閑として木洩れ陽の中

交互会

第十五期生文芸学科 西田 崇江

しばらくは大方の人目を耳を攫はれて師の席に对きいる
ふりかへる反り美しき三井寺の大屋根寒の空にしづもる

卒へて知る見残しし夢いままだ遠住む君の影を追ひいる

心臓病む夫の寢息を朝あさに確かめてわが一日はじまる

充互会耳順のはるを寄り合へばけふの一日は暮れずともよし

短歌の輪

第十六期生文芸学科 服部 利

レイカディア大学を卒業して七ヶ月余が過ぎた。あつという間のことである。在学中は日々新しいものに出会う緊張はありましたが、先生方の懇切なご指導で楽しく過ごさせて頂きました。そして、もうひとつの喜びは入学と同時に新しい十数名の学友との出会いであった。在所の方々とおつきあいに明け暮れていた私にはこの年になって出会ったお友達との交流は大げさに言えば正に新しい世界の誕生であった。やがて、卒業が近づいてくると級友の間で「このままでお別れするのは淋しい」という気持と共に「せっかくここまで勉強したのに途中でやめてしまうのは勿体ない、なんとか続けることは出来ないのか」という気運が漂ってきた。これが固まってきたのはひとえに山村金三郎先生のご厚情と川村学科長のご尽力の賜で、私どもの「短歌の輪」逢坂短歌教室が毎月一回持たれることに決まりま

した。

先生のお教えでいつも私の念頭にあるのは『見るものに触れ即座に言葉を働かせる瞬発力を養うのが肝要』というお言葉でした。いつまで経っても、そこまで辿りつけるとは思えないが近頃、今まで漠然と見ていた景色の見方が変わってきた。例えば、毎日見ている瀬田川の水鳥は川辺にいるのに、今日は珍らしく真中にいるなど、バスの窓から見入ったり、ただきれいなあとと思って見てきた石山寺の桜の古木が今までと違った姿で私に語りかけているような感じがするのは不思議な気持です。

この短歌教室は今年の四月で七回目を迎え、会員も新加入を含め十七名で座席に余裕のない盛況な場である。

このようにして、短歌の研鑽と、心に泌みる温かい友情とに月一回でも浸れる事が出来るようになり本当に嬉しい限りです。末尾になりましたが、級友の作った歌（作者のご了解を得てなくて、ご容赦下さい）と、この会に対し私の想いの歌を最後に書き止めました。

級友の歌

お浄土へ架かれる橋か琵琶湖より曼陀羅山への時雨の虹は
かき消されし灯火またも西に見ゆ雪雲今は鏡山越ゆ

里坊の茶室は時雨の闇深しほのかに浮かぶ山茶花の白

私の教室への思いを

レイ大での多くの友と出会いしをそのまま今日も短歌につどう

わが友

第十六期生文芸学科 川村 梢 一

平成七年九月にレイカディア大学を卒業し、翌月から十六期生同好の士が集まり、月に一度山村先生から短歌のご指導を受けています。

未熟な私の歌ですが、その時の詠草から五首を自選しました。

二年を経^{ふたしほ}し歌の道迷路とぞなれるも生きゆくわが友とせん

風の舞う湖上に揚がる噴水の飛沫^{しぶき}に秋の陽は七色に

初めての口紅を差し着飾れる孫の笑み映ゆ七五三の朝

いぬまきの実を拾いきて凶鑑繰る孫の瞳にわれを重ぬる

雨上がり待ちかねて鳴く鶯に雫して梅色香そえくる

平成五年七月に入学し、山村先生の初講義の時に聞いた言葉

「短歌を学ぶ者は、どんなことにも関心をもち、どんな時でも感性を働かせるように」との教えを忘れずに、これからも歌をわが友として、心豊かな人生を歩みたいと思います。

ひとときの燦

第十六期生生活学科 澤 栄子

湖を描きて近江の地図つくる琵琶の形の変りてあらむに見知らざる人に会釈を返したり振り向けばまた互みに目の会ふ立秋は名のみにあらず吹きおろす風は金柑の花の香はこぶ人間の運命^{さだめ}より或はたしかならむ打水にゆるる風船かずらさざ波をいろ濃く淡く染め分けて秋の湖面のひとときの燦

湖南支部

俳句

第十二期生文芸学科 山本 正一

花筏落ちしよりまとまらず
風薫る快気に向う万歩計

日々片々

第十二期生文芸学科 林 笑子

北方の領土を偲ぶオホーツクの海をこがして夕陽沈みぬ
神々のささやきのごと風穴の地下をひそげく水の流るる
夕さればブルーライトに映えし橋港の闇を青く染めゆく
ささやかな遺産を巡るうかららの絆を疎むひとときのあり
飲料水背負いて立寄るデパートは異次元のごときらめきてをり
一言を言わねばならぬと気負いしも刻が言葉を呑み込みてゆく
止まりたる時の狭間に生きしごとき熊川宿の古き町並
吾が胸をCTスキャナーの切りてゆくシャッターの音の幽けき
がなか

短歌

第十二期生文芸学科 西村 君子

日溜りの枯葉の中に水仙の蕾は五つふくらみてあり
歩いて十分バス停までの道の辺にあざみ咲きいし昔なつかし
買物の帰りによりし弁当店メニューは豊富皆おいしそう
寝る程もなけれど気分すぐれずにひと日炬燵にうとうととする

八十路となり物忘れとみに多くなり呆けてはならじと心を叱る

敗戦の日々

第十三期生文芸学科 堀池 栄一

ダバオの野に暗号書奪られし今村伍長敗戦しらず自爆せしかと
息のある傷病兵の靴はぐも見ぬ密林深き戦の日は
なつかしき思い出となる「捕虜収容所」八十路近きにまた夢に
見る
「PW」の文字を戎衣の背に書かれ囚はれし日懐かしく老ゆ
ダバオにて飢をしのぎし春菊をまず宴席に友と食ぶ

短歌

第十四期生文芸学科 山本 隆三

レイカディア大学同窓会十五周年誠におめでとうございます。
在学中の楽しい学習が思い出されます。老後の生きがいを見つ
け、卒業後も心豊かに過ごしております。
今回の記念誌発行に投稿せよとのこと、文を書くことの下手
な私は卒業後も学んでいる短歌を詠ませていただきました。

写してと藤のむらさき背に妻はあわれ過ぎたる春の顔笑む
送り火は限りなくさびし赤々と亡き父母染めて大文字燃ゆ

青空を引裂きて飛行機雲は伸ぶ水茎の岡越えて北指す

わが命この世界には二つなし唯我独尊をモットーとせん

遠のける焼芋屋の声聞伸びして団地の午后の陽は温し

初めて老大で短歌を学び四年、一向に上達致しません。昨年

第一首目が日本歌人クラブ関西大会で努力賞を頂いたのが唯一
でお恥かしいことですが、楽しんで今も山村先生に同好の人と
学んでおります。

終りにレイカディア大学の益々の発展と諸先生方及び卒業生、
在学生の皆々様のご健康とご多幸を祈念致します。

短歌

第十五期生生活学科 木林 久美子

うち揃ひ家族と登る立木山今年も詣でる幸をかみしむ

半年を経て編みあげしセーターの鮮やけき黄色飽かず見てをり

老骨に鞭打ちレイカディア大学に古典学びし仲間ら集ふ

紅白の玉入れ競争にはしゃぎつつ玉数うる声ドームに響く

祖父に對い習いしばかりの将棋指す孫の笑顔の頼もしく見ゆ

甲賀支部

四国巡礼の句

第十五期生陶芸学科 永谷 孝

渦潮を脚下巡礼四国入り

葉つき竿ひときは高き鯉幟

空缶に紫陽花一輪捧げあり

秋遍路白衣姿も身につけり

山こだましぐれのあとは納経は

近江八幡支部

冠句

第五期生園芸学科 永福 外次良

西本郷町老人クラブ八千代会文化部の冠句同好会有志十三名
余が相寄り年三回または四回町公民館で開催。その時に投句し
た作です。

一、五月 晴 武者人形がお留守番

- 二、よい機会　　ここで一発出たら勝
- 三、気がかりで　　孫の使いが遅いので
- 四、運動会　　足が走らず気が走る
- 五、堂々と　　不断の努力が実を結ぶ

私の楽しみ

第五期生文芸学科 中田ふみ

あわただしく時が過ぎてゆく中で一首の歌について考え込む。
考え込んでいる時間は透明で、いつの間にか過ぎてしまういい
時間です。

血圧を記すノートに花の芽の太りしも書く曇る夕べに
夕やみの白木蓮はほのぼのとおのがぬくみに包まれて咲く
あらあらと木の芽ほぐしの風吹けば色新しく鯉天に舞う
臆怖なことは齡にかこつけて老いも安しと思う時あり
日毎飲む薬の一錠減りたれば一錠ほどのやすらぎ覚ゆ

想い出の句

第十三期生陶芸学科 中島英三

盆過ぎて静けさ戻る老夫婦
鶏頭の色鮮やかに他を圧す
何もかも忘れ一刻三尺寝
秋の午後行者の道を喘ぎ行く
時雨止み藤樹の里に虹の橋

冠句

第十四期生文芸学科 高木ひさ子

話し合う　　徹夜もむなし平行線
力入れ　　板割りはねる樽の酒
寺参り　　余韻流れる山の闇
日記帳　　親も参加の旅話
気持よく　　本と昼寝のハンモック

老大の日々

第十四期生文芸学科 高木 系つ子

老いづきても尚輝ける日の蓄へと励ましかよひて二年を過ぐ
雪の日も汗ばみ急ぎぬ待ちくるる友の温顔まなうらにして

肩書を脱ぎて学べる人ばかり素顔の出会いの老大の日日
二年を見知らぬ人との触れあいあため学びて老大を卒ふ
ひさびさに昂りありて胸あつし老大卒業の螢の光に
それぞれの人生諾ひ学友の顔皆かがやきて老大を卒ふ

冬 季 雑 感

第十五期生文学学科 岩 崎 進

大雪に故郷忍ぶ童歌

口喧嘩炬燵狭んで大みそか

コマ廻し自分のミスに照れ笑い

孫だけが八幡言葉お正月

初電話思わずとびつく孫の声

シベリヤ捕虜紀行短歌に寄せて

第十六期生文学学科 谷 内 至

捕虜の身を有蓋貨車にひしめきてふし穴のぞけばバイカル湖見ゆ
白樺とシベリア鉄道果てしなくいづこに行くや監視されつつ
逃亡の兵のありしとソ聯兵銃を向けつつ点呼するなり

着きたるはエンセイ川のほとりにて吹雪く原野に佇むわれら
失調と下半身の病みし戦友われを呼べるもわれも病みふす
ソ聯兵ダバイダバイと身につけし時計万年筆もってゆきたり
石炭をコンベヤーにと運べるもノルマの枷にいつ終るとも
一日のノルマ終りて帰路につく寒さきびしく倒れるもあり
渡り鳥心があらばわが思い父母につたえよナホトカに在りと
赤チンを塗りし赤旗おしたてて使役に行くも国に帰りたく
わが想いかなうや舞鶴望み見て祖国に帰りしことをたしかむ
はるかなる祖国の土を踏みたるに胸せまりきて黙し語れず
終戦前私は満州ハイラル第二〇四九八部隊に入隊しておりま
した。ソ連参戦により戦闘状態になりましたが、興安山脈の山
中にて十月初め捕虜となり十月末にはシベリアに移送されまし
た。フラスノヤースクより支線に乗り替えてアバカン地区に収
容され炭鉱で石炭掘りの使役に従事する。

昭和二十二年第八次引揚船である遠州丸に乗船しナホトカよ
り舞鶴に引揚す。

終りに彼の地に眠る戦友及び抑留者の冥福を祈る次第です。

なお私は平成二年八月二十日より八日間シベリア、ハバロフ
スク地方抑留者の慰霊訪問団に参加して参りました。総勢五十
四名、墓地の調査慰霊及び見学などでした。

近詠五首

第六期生文芸学部 野沢政次

風くれば微か香にたつ菜の花を花菜漬にと妻と来て摘む
 年ごとに減る戦友会の宴半ば軍歌続けり自虐のごとく
 疎まれつつも命ある日を生きねばと媪は涙す敬老会に
 父の日のなき世を生きし我にして嫁より今日はネクタイを受く
 緩やかにレッカー動きました一戸この村の家壊されゆきぬ

戦後五十年となりて

第八期生文芸学科 田口敏之

原爆に焼けて五十年この地震神戸の破壊にも起ちあがるべし
 穏やかに「もう行け、もう行け」と子らを諭し瓦礫の中に父は
 焼かれたり
 わが家は三世大家族にてよき婿とよき孫を自慢せし友逝けり
 茅葺きの屋根に憩へる黒猫に烏二羽が嘴振りけんか仕掛くる
 信濃路にわずか十五名の戦友集ひわれらの戦後終りしならむ

春しぐれ

第三期生陶芸学科 川村順茂

昨年暮れにたまたま手にした新年度の暦によりますと、平成八年の私の運勢は大凶と出ていましたので何となく気になっていたのですが、新年早々から健康を害してつい先頃まで入院生活を余儀なくさせられました。退屈のぎに昔作った短歌などを思い出し同じようなものをまとめてみました。ちょうど老大会報十四号に原稿募集のことが知りませんでしたので応募致しました。ご覧下さい。

暮れかかる小川の岸の春時雨ささ蟹ひとつ濡れていにける
 灰色の甕に降りてしみじみと心しずもる細き春雨
 しめやかに降る春雨を聴きながら心なごみて文書きにけり
 若竹にささと降り来る春時雨暮れては寂し雨だれの音
 青竹より滴たり落つる玉雫地を潤ほして竹の子育つ

私の冠句

第三期生園芸学科 西山 弥一郎

何年か前老人会で冠句作りをやったかどうかと提唱したところ思わぬ賛成者があり、早速原稿の募集を始め、毎月句集を出すことにしてからもう百号を数えるようになったと言っているので。そこで私の近作を発表させて貰うことにする。

一寸でも 一隅照らす灯火

針仕事 母の面影窓の下

あこがれの 金婚祝フルムーン

さわやかな 虫の音高き十三夜

待ちきれず 振った一打のホームラン

羅針盤 倫理の辻に立つ地蔵

毎日の ニュースが語る社会学

事始め 裂帛の気合堂に満つ

年の暮れ 煩惱払う百八ツ

節分会 豆まく声や早春譜

鐘がなる 弥陀の呼び声朝に夕に

花一杯 わが住む里は生浄土

花の四季

第四期生文芸学科 田中 きり

春

魁けて春告ぐるがに咲きいでし蠟梅しとど水雨に濡るる
長き冬堪えいし思い噴きあげて八重の紅梅咲き満つるなり
娘の新居ようやく木樹のところ得て沈丁花匂い椿のこぼる
重おもと牡丹桜は垂りて咲くこの校庭に古りし日の夢

夏

小さき意地もちて仰げば眩しかり白冴え極む辛夷の花は
室戸岬岩うつ波の白さとも鉢に移せし浜木綿の花
梅雨晴の空に向いて噴きあぐる思いは何ぞのうぜんかづら
みどり児の寝息安けし窓近く垂れし糸瓜の花の明かるく

秋

あまかしの岳を囲みし曼珠沙華記憶の中の朱鮮しき
秋晴れて菊花薫れる文化の日明治節とう呼び名なつかし
叙勲にも入選・受賞も無縁にて菊に水やる今日文化の日
コスモスの花それぞれに吹かるるも同じ方へとなびくと見ゆる

冬

降り積みし雪の重みに堪えてなお万両の実の赤き輝き

素枯れたる庭の片辺の冬薔薇かたき蕾の紅のぞく

山茶花の花弁清らに雨に濡れその純白が心に染みぬ

うつむきて咲くが佳しと愛でましし師の俣ばゆるも茶の花咲けば

白足袋のこはぜの固し久女の忌
熱唱のサントワマミー雪が舞ふ

心に花を

第十期生文芸学科 浜野 喜三郎

小川原社の奉賛会の祭来て粃種おろしの春は動けり

おこないに村の長老が座せし場に今われ座る年となりたり

いつもの道いつもの刻に歩きつつ落日賞でいるこの平和もつ

古文書を共に学びし老い友らと湖畔の亭にて鴨鍋かこむ

日日思う若き日のこと口にせず老いの命をさやかに生きたし

第十五期生文芸学科 柴崎 英

歩み初む豆靴濡らす春の泥

小さき影一瞬走る春障子

ふと気づく闇やわらかき遠蛙

若葉雨煮こばれ匂う峽の茶屋

ポスターの花に初蝶無人駅

冠句 春夏秋冬

第十五期生スポレク学科 藤野 恒子

湖 光 る 生命の水を揺らしつつ

名 月 や 光の中にしばし無我

掃き寄せて 枯葉にまじる翅ひとつ

雪 帽 子 如月の空浮く伊吹

春を呼ぶ 火の粉舞い散る二月堂

久女の忌

第十五期生生活学科 伊藤 貞

余呉川に残る洗ひ場水草生ふ

白山は夕日に錆びぬ盆の唄

出番なき木偶に月射す蔵の窓

梅の香

第十六期生文学学科 加藤 正代

み社にほのかに匂う梅の香に遠き流人の偉才偲びぬ

梅の枝のつぼみふくらむ山裾に名残惜しむか風花の舞う

山裾のわが棲むあたり雪舞うに西の遠山淡き陽の射す

愛知川に濁りし水の流れおり鈴鹿山系雪解け初めしか

雪ふかき山の麓へ出で来れば信長館に冬日明るし

かぎろいの広がり初めし鈴鹿嶺に昇る朝日を指呼の間に見る

満天に星の冴えいし朝明けを踏むには惜しき霜柱たつ

いやいやと嫁を拒みて泣く孫を抱きしむるわれに嫁の目険し

ここにまた老いの集いの園建つもわれは入らぬと心に決める

銀閣寺の池をめぐりて見あぐれば風も吹かぬに藪椿落つ

湖北支部

追憶

第六期生文学学科 藤井 峯子

紫陽花の陽に映え雨後の麗わしさ育てし母はこの世在まさず

恋しくば弥陀の六字を称えよと言ひ残したる母が眼に浮く

柚子風呂に入る度母が眼に浮ぶ湯の香仄かに夜着に匂いぬ

夫逝けど明日へ飛躍の夢そだて母はたゆまず運ぶこの針

枕辺を見下す亡夫の微笑みに心安らぎ今日も無事過ぐ

舗装路のコンクリ割りて雑草の強く生きよと我を励ます

命日に亡夫の好みし衣をまとい白百合匂わす墓参急ぎぬ

古びたる亡夫の表札手で撫でつ読みつ話しつ面影偲びぬ

亡夫の齡越えて永々生かされて思い出尚もひしと抱きしむ

ねんごろに亡夫の二十三回忌を終えし夜の追慕の涙枕ぬらしぬ

生かさるる生きる悦び噛みしめて法と雅びに余生樂しも

コスモスの風の吹くまま逆らわず優しくゆれる姿見習ふ

皺深き我が手を頬に当てて笑む曾孫のありて日々の生き甲斐

やがて散る一日おごれるサボテンの夕べ果かなく命花閉づ

長命寺曲りくねりつ登り来て見おろす景色の湖のすばらし

春待たで無情の風に散りし師を悼みて巨星尚も惜しまる

散り果つる紅葉の後を追ふ如く逝きませし師を慕ふも空なし

有難や弥陀の照護の内住居心のすべてを知ろし召すなり

師持たずのただ三十一文字に綴るお恥かしい愚歌をご笑評下

さい。

俳句雑詠

第六期生園芸学科 秋野 昇

下萌えや孫に入学通知きて

只管に生きてすがしき山すみれ

啓蟄というも湖北は夢ン中

就中湖北の春は遅々として

されど好き素朴に春を待つ湖北

畑を打つふくれ蛙を埋め尽し

青き踏む恙なき身の証とも

花馬酔木秀吉博に形添えて

われら湖北のレイカディア

第六期生文芸学科 広部 庄太郎

一、湖北近江の 夕茜

戦に暮れし いにしえを

偲ぶすがは なけれども

伝説秘める 春の夢

白銀の視野 眩しすぎ

二、瓢箪印で 輪をつなぎ

霊峰眺め 住める幸

信長ひろめた 薬草畑

伊吹を映す 三島池

眉墨色の 賤ヶ岳

三、頭の体操 レクリエーション

無冠同士の きずな濃く

趣味の余生に 花香る

こぼれ陽だけの 恵み得て

白寿目指そう レイカディア

好きな歌

第六期生文芸学科 黒田 英麿

こんな歌が好きで、毎日口ずさんでいます。

生かさるることの重きを思うべし

更けゆく空をぐっと見上げて

空紅くそめて輝く夕焼のかの豊かなる老を迎えん

空紅く愛宕山夕陽の如く紅々と

やがて散る花はそのままさわらずにそっとしておくいたわり

(中略)

今も忘れません。冬の寒い日、味噌汁を小使室で炊いてもらって、昼の時間子供達に食べさせたことを……。一日一日が本当に楽しかったですね。親も学校も先生も子供も渾然一つでした。子供の大切ないのちの成育に一生懸命でした。今楽しく昔を回想しています。(以下省略)

前頁はさきの(四月二十七日)平成八年度支部定例総会の案内状の余白をかりて、元中学校教頭先生当時、私の息子達が大変お世話になった恩顧に対し、心にもない疎遠のお詫びの一言からはたまた貴重な教訓(感謝感激感動)を得たので、先生のお許しを賜わり寄稿致します。なお先生は今日まで、六回入退を繰り返されているが元氣です。(松下)

冠句

第七期生生活学科 広部 富子

レイカディア 不老の美酒共に酌む
レイカディア 逢うたび深む片えくぼ
レイカディア 生きがい求め老ゆるなし

レイカディア 晩年の意志磨かねば

レイカディア 全開で生きている顔

レイカディア 永久に消えない虹が立つ

短歌

第十一期生生活学科 佃 清子

少女期に恥じたる母の茶筌髪記憶の中に重く残れり

スキップをしたき思はず夫とゆく農免道路に人影はなし

可能性ためしてみるもよしと息子を励ましにつつ何にこだわる

くろぐろと塗りつぶしたる教科書に学びし子らより招待状の来

添寝する保母の手握り泣きじゃくる震災孤児の小さき記事あり

俳句雑詠

第十三期生生活学科 三ツ橋 貞子

辛夷咲く山を背にして余呉の湖

蝉時雨敗戦の日も鳴きをりし

公園の噴水に来て秋の風

秋の野の草花なべて小さかりし

雪を積み湖上に浮ぶ竹生島

拙詠 五首

第十四期生文芸学科 間 所 喜 代

目が開く立てる歩ける生きている朝毎気づく古稀過ぎてより
オリオン座常とは位置の変わりたる今宵は母家に長居したるか
嫁よりも先に巣づくりし蔵の鳩二代の隠居を見入るが如し
晴れた朝寝具みな変え髪洗い紅をもささん五日寝し今日
正座する人半ばなる老集うも脂粉の香りかそかに匂う

短 歌

第十五期生文芸学科 角 田 は る

ニトロだけは忘れず持てと主治医よりの注意守りて旅の荷作る
楕円形の窓に霧氷の花形に煌く朝を機上に迎う
スニーカー履きし日本の人に逢いロンドンの街に会釈を交す
橋一つ渡りてカナダに出国す秋陽浴びつつ夫と並びて
再びは見る事無けんナイヤガラの滝を仰ぎぬ飛沫を浴びて

短 歌 五 首

第十四期生文芸学科 木 村 諄 子

赤だすきはすして兄の肩軽くさせてやりたし五十年の遺影
この水は生まれ在所より流れ来しと亡母の言の葉川音に聞く
花苗が心むすびて新しき友の増えたり越し来し村に
しゃぎり譜の古びし一枚ふるさとへ心繋ぎて琴をつま弾く
白髪に似合うやピンクのイヤリングを付けて若やぐ春風を受け

短 歌 近 詠

第十五期生文芸学科 杉 山 幹 之

三代の揃うて祝う屠蘇の席に父祖より伝う塗りの重箱
清水湧くこの山すその雪解けて芹はみどりの芽を伸ばしそむ
九反余の種粃を漬け老二人父祖より受けし農を守りゆく
復員船に佐世保の土を踏みしより命ながらへ五十年経ぬ
わざわいの年忘れむと撞く鐘は闇にひびきて遠く消えゆく

水郷めぐり

第十六期生

筑田和子

身のこなし確かな腕と船頭の褒むれば得手と水郷漕ぐ友
幼き日田を手伝いて覚えたる友は鱸を漕ぐ水郷めぐりに
手袋もズボンも濡らしし雪だるま孫等いにし朝石の鼻落つ
癌病し友の死を知る夫の背は降りては消ゆる雪の花負ふ
眼科医へ行くその朝雪積り洩る心に時は過ぎ行く

高島支部

有為転変

第十四期生文芸学科

角井

操

薄き皮サラリとはじき水仙の音なく咲けり雪の朝を

水仙花凜と咲きつけそのかみの女性リーダーホームに行かれしと

老い給う琴の師匠の格子戸は今だ開かず春も去りたり

「お幾つ」とナウスの問いに「五十八」さらりと出でし言葉な
りしが

去年よりも低くなりたる腰かばい畑に翁ひとり草取る

孫

第十六期生生活学科

田中俊栄

後追いをせし孫はすでに高校生のびやかにおりわれは老いたり
四人の孫ひとりひとりと育ちおり進み行く世の光を浴びて
新鮮な話題に花を咲かす孫に憩いの時を夫とほほえむ
祖母という立場のわれにふさわしくありたし孫のひとり一人に
いつまでも元気で揃い過ぎしたく老いをしみじみ思いみる今日

あとがき

広報部長 野沢政次

会員の方々から多くの玉稿をお寄せいただき、この十五周年記念号を発刊できたことに感謝を申し上げます。

皆様方が在学中に培われた成果を生かして、各地域におけるご活躍や、また、趣味と実益を兼ねたご精進ぶりや、さらに各種のボランティアとして活動されている姿に深い感銘を覚えたのである。

この一年間、われわれをとり巻く社会情勢は実に多岐多難であった。いま改めてその一端をふり返ってみたい。

●政治

自民、社会、新党さきがけ三党が支える村山連立政権が、夏の参議院選挙での敗北などでよろめきながらの「低空飛行」を続けた。

与野党がもつれ合う形で、政局は出口を見出せず漂流しつつある。

住専処理案に世の批判が集中して、村山政権は九六年一月退

陣。三党連立を維持しながら、二年半ぶりで自民党首政権の橋本内閣が発足した。

これに対し、新進党は早期解散を要求するなど、与党との対決姿勢を強めつつある。一方「第三極」を目指す社会党は九六年一月、さきがけとの合流による新党結成に向けて、「社会民主党」に衣替えした。

●オウム真理教

信者約一万五千人といわれる宗教団体の代表麻原彰晃被告や教団信者らが実行したとされる大量殺人など、一連の前代未聞の凶悪事件が発生した。

九五年三月二十日、東京・営団地下鉄のサリンによる無差別テロ事件をはじめ、松本サリン事件や信者のリンチ殺人など、かつてない犯罪者集団と呼ばれてもやむを得ない事件が次々と明らかになった。特に化学兵器がテロに使われたことは世界を震撼させた。

麻原彰晃被告は九五年五月十六日に逮捕され、三月二十九日オウム真理教の破産宣告が出された。

●沖縄の米軍基地問題

三人の米兵による少女暴行事件をきっかけに、米軍基地に対する沖縄の怒りは大田知事の「代理署名」拒否で一気に広がり日米両国政府を揺さぶるまでに発展した。

基地の整備縮少を求める県民の声に、日本政府は新たな協議機関を設けて対応しているが、戦後五十年間改善されないままの基地の重圧に、うっ積した県民の怒りは収まる様子を見せていない。

●家族、社会制度

いま、個人意識の確立や、高齢化社会の進行などで、伝統的な家族や社会制度が大きく変ろうとしている。

結婚するに当たって、希望する男女には各々の旧姓を名乗ることを認める「夫婦別姓」が実現に大きく近づいた。

また一方、離婚については、婚姻関係が破綻して回復の見込みのない例として「夫婦が五年以上別居して共同生活をしていない」ことを加え、裁判上の離婚が成立する原因とした。

●尊厳死、安楽死

人はどう生きるかが問われる中で、尊厳死や安楽死の問題が大きく浮かび上がった。

東海大学医学部で、患者家族からの要請で主治医が毒物を注射して死なせた事件で、横浜地裁は安楽死に当たるかどうかの判断基準として、「耐え難い苦痛の存在」と「患者の意志表示」などを示した。

尊厳死は安楽死と区別して、医療を打ち切り人間らしい安らかな死を迎えることを選択するもので、死が間近な患者に対して、治療だけでなく苦痛の緩和や精神上の支援をおこなうもので、ホスピスが次第に広がりを見せてきている。

参考資料「時事ニュースワード」

余計な

会 遊

十五周年記念誌

会報

発行所

草津市南笠町新池一〇一

滋賀県レイカディア大学

同窓会事務局

平成八年五月一日発行

